二人…出会えたから

希里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人…出会えたから

【Ｎコード】
Ｎ０９９２Ｂ

【作者名】
希里

【あらすじ】
大学へ通う電車の中で倫は軟派男の蓮と出会う。サイテーだと思っていた蓮。無愛想でタイプじゃなかった倫。なのにいつの間にか惹かれあい、お互いが、大切な存在となる。。。「もうウソはつけない。」と自分の気持ちに正直になり、付き合いだす蓮と倫の前に今度は…。

印象（前書き）

初めて書いた小説です。

印象

春の日差しが心地よく照らしている。
四月半ば……。
ふと気を緩めてしまうと、ついうとうとと眠りに入ってしまいそうなそんな中……。
駅のホームにいつものアナウンスがかかると倫(りん)はベンチから立ち上がり
電車が来る方向を長い髪の毛を首元で押さえながら見つめた。
倫は、電車のドアが開くと一両目の真ん中の二人用のイスに座る。
このイスは、いつも座れるわけではないけれど倫のお気に入りのトクトウセキ。
倫は、お気に入りのトクトウセキに座るとバックからいつも電車の中で読む小説の
本を取り出し読みかけのページを開き、発車時刻になった電車はドアを閉じようとする……。
後半分でドアが閉まろうとしたその瞬間、一人の大学生、蓮(れん)が駆け込み乗車
をし、息を切らしながら倫の隣にドスッ！と座った。
「あっち～」
蓮は肩にかけていたバックの紐をはずすと、バックで自分を扇ぎながら迷惑そうな
顔で自分を見ている倫にニコニコと笑う。
なんか嫌な奴……。
あまりにもずっと自分の顔を見て笑う蓮に、倫はムッとし無愛想に
「なにか？」と尋
ねた。
「お前、笑うと可愛いよ」

……確かにそう。
すぅーっと通った目鼻立ち、カールした長いまつげと二重の大きな瞳に桜色の唇。
無愛想を除けば、すべてがパーフェクトといった感じの倫。
「……」
「お前、笑うと絶対可愛いって！」
蓮は、初対面の倫にあだかも自分の友達かのように馴れ馴れしく言う。
「余計なお世話よっ！」
サラサラした前髪から覗く少しクールな瞳。
でも、笑った顔と口調はすごく人なつっこい感じで軽く悪戯っぽい少年のような蓮は、
ぶすっとしながら自分の顔を見ている倫の口元に手をあてるとくちびるの端と端を上げた。
「こうすんのっ！」
えっ？
いきなりの予想外の蓮の行動に驚き焦った倫は思わず立ち上がり、
バッチ〜ンッ！と両手で蓮の顔を挟むように叩いた。
「！？」
唖然とする蓮と電車の中の周囲の人達。
あっ……。
倫は、驚いた様子でポカンと口を開けて自分を見ている人達から目線を反らすように
さっと床に落ちた本を拾い、バックに本をしまうとイスに座り俯いた。
電車が倫の降りる大学前の駅に到着すると、倫はドアが開くと同

時に真っ赤なムッと
した顔でそそくさと電車を降り、蓮もそんな倫の後ろをついて降りた。
少しして後ろに何かの気配を感じ、自分の後ろについて歩いていた蓮に気がつくと倫
は振り返り「なんでついてくんの？」とバックを蓮の顔の前に大きくぶんっと振った。
気がつえー女……。
蓮は倫の振ったバックをスッとかわすと、またニコニコと笑い改札口の方を指す。
「俺もこっちなの……」
「……」
蓮が指す改札口の方を見て、えっ？という顔で動きが止まる倫の横を蓮はふんっと顔
を上げ、してやったりという態度で微笑むと歩き出し通り過ぎようとした。
倫は自分の横を通り過ぎて行く蓮をキッと睨みつけた。
おもしれー女。
蓮は、怒り心頭でその場に立ち止まる倫の視線を背中に感じながら、飽きないおもち
ゃが見つかった子供のようにニコニコしながら大学へと向かった。

第2話あいつ

倫は次の日の朝もいつもと変わらない場所で電車を待っている。
電車のドアが開き、倫は今日も座れるトクトウセキに嬉しさでいっぱいになった。
倫はイスに座ると辺りを見渡し、昨日のあの蓮(おとこ)がいないことにホッとすると、
いつものようにバックから本を取り出し読みかけのページを開き読み始めた。
電車は発車時刻になり、ドアが閉まりかけようとした瞬間、またあの蓮が駆け込み乗車し、
倫の隣にドカッと座った。
「……」
「はぁ、はぁ……おはよう……」息を切らしながらニコニコと笑い、
昨日と同じようにまた
バックで扇ぎだす蓮に倫は呆れた。
「ねぇ……あなたいつもこうなの？」
「ん。だって俺、独り暮らしだもん。起きれないんだよねぇ～なんならお前モーニングコールしてよ」
前髪の隙間から覗く倫を見る瞳……。
綺麗な瞳。
吸い込まれそうな瞳に倫はドキッとした。
「なんで私がっ！？」
蓮と目を合わせていられなくなった倫は俯いてまた本を読み始めた。
「ちぇっ……」蓮はがっかりした様子で目線を倫から窓の外にうつした。

ドクンッ……ドクンッ……ドクン。
倫の心臓の鼓動は、自分のコトを吸い込んでしまいそうに感じる蓮

の綺麗な瞳に、
まるで身体まで揺れているんじゃないかと思うぐらい大きく打っていた。
電車が走る心地のいい音が心臓の音で聞こえない……。
倫は蓮に気づかれるはずのはないのに、この身体まで揺らしているんではないかと感じさせる心臓の
鼓動に気づかれないよう、読む余裕のない本を見つめ駅までの時間を過ごした。

電車が二人の降りる駅に着き、倫と蓮は電車を降りた。
「お前、大学生？」倫の隣に何気なく歩く蓮は訊く。
「うん、あそこの……」
倫は自分を見る蓮と視線が合わないように歩く速度を落とすと自分の通う大学の方を指さす。
「なんだ、俺と一緒の大学じゃん。何科？」
「英語よ。あなたは？」
「俺はねぇ……」
改札をくぐり、振り向くと今まで一緒に歩いていたはずの倫の姿がなかった。
「あれ、あいつ何処行った？」辺りを見回しながら蓮はまた来た道を戻って行くと、倫は改札口
前でお婆さんとなにか話している。
「あいつ……やっぱり可愛いじゃん」蓮はお婆さんにニッコリと微笑みながら話をしている倫を
見てまた思う。
倫は話し終えるとお婆さんが持っていた重そうな荷物を受け取り、
大学とは正反対の方向へ歩いて行
ってしまった。
「あっ」
蓮は倫のコトが気になりしばらく改札口の電話ボックスの前で待っ

ていると、倫は携帯電話を見なが
ら走って戻ってきた。
電話ボックスの前で待つ蓮に気がつかず通り過ぎようとする倫。
「おいっ、そこの女っ！」蓮は大声で倫を呼ぶ。
えっ？
「……」
倫は立ち止まり驚いた様子で振り返り辺りを見回すと、蓮が両腕を組み電話ボックスの前で立って
いた。
「はぁ、はぁ……」
「お前気づけよ、ずっと待ってたんだから」蓮はすねた表情で倫に近づいた。
「はぁ……はぁ……」
自分の所に歩いてくる蓮を息苦しそうに見つめる倫。
蓮は倫の少し前で立ち止まると、倫は自分より二十センチ以上高い自分の前に立つ蓮の顔を見上げた。
百八十センチ以上はありそう……。
綺麗な瞳（め）……また、この瞳に吸い込まれそう……。
倫は自分を吸い込んでしまいそうな瞳を見つめ蓮の顔が少しずつ近づいてるような錯覚におちていく。
少しずつ……。
少しずつ。
綺麗な瞳が近づいてくる……。
少しずつ……。
えっ、何？
ドスッ！
近づく顔が錯覚じゃないことに気がつき、我に返った倫は後少しというところで咄嗟に蓮の顔に持っているバックを押し当てた。
「いった～、お前、なにすんだよぉ～！」顔を押さえる蓮。

「なっ、何しようとしたのよっ！？」
「キスだよ！キスッ！」
なっ！？
キスという二文字に倫の身体中の血液は足の指先からすべて顔に上昇する感じがした。
「な、な、なんでそんなコトしようとするのよ？」倫は真っ赤になった顔とウルウルの瞳で蓮を見た。
「お前があまりにも可愛い顔するから……」
パチンッ！
そうニコニコと笑いながら軽く答える蓮の顔を倫は今度ひっぱたいた。
「何すんだよっ！？」
「バカにしないでよっ！」
「だからって叩くことないだろ？」
少しでもこいつにドキドキした自分に腹がたつ。
「私を他の女の子と一緒にしないでっ！」
倫はそう言うと顔を押さえて立っている蓮を睨み、怒りながら大学へ向かった。

第3話本命

あのキス未遂事件から倫は蓮に会わないように一本早い電車にする。
物凄く混むこの時間帯。
お気に入りのトクトウセキにはもちろん座れないし、本を読むことすらできないとにかくギュウギュウ
詰の電車の中。
でも、あいつに会うよりは数倍マシかも……と思う。

「あれぇ？倫、最近早いね……」
とぼとぼと大学までの道を一人歩く倫の後ろに友達の里香が走って駆けつけてきた。
「おはよう。んーなんとなくね……」
里香とは高校一年生の頃からの友達で一番の親友。
困った様子の顔の倫を見て里香は口の前で両手を合わせると「あーふふふ」と笑う。
「なによ？」
「倫にもやっと春が来たのね」人事に楽しそうな里香に、倫はふくれっ面で「違うってば！」
と言い返す。
「あんた、お世辞抜きで、ほんとすごく可愛いのにお堅いんだから……もったいない」
「そういう問題？」
倫はまたぶすっとふくれる。
「そういう問題よぉ～」
「私にはよく分かんない……だいいちどこのどいつかも知らないんだよ？」倫は地面を見つめ
真面目な顔で言う。
今まで、いいなと感じる男（ひと）がいなかったわけでもないけど……好き

とか愛してるとか、
私にはよく分からない。
だいいち、恋愛したいなんて考えたコトもない…。
「んーそれはそうだけど」

蓮は、最近、あの無愛想女（倫）に会えないのでつまらなかった。
いつもする（好きで？）駆け込み乗車を止め、時間より少し早く駅で待ってみたり、
人文学部の棟の前でしばらく待ってみたりもする。
でも、無愛想女（倫）に会うことはなかった。
それに、蓮は無愛想女（倫）の名前を知らない。
「なぁ……蓮。お前、最近誰か探してるの、いい女でも見つけたのか？」
人文学部の棟の前で今日も待つ蓮に直樹は訊く。
そんな直樹の質問にニヤッと笑う蓮。
このニヤッと笑う時の蓮は曲者で、直樹はまた始まったかという顔をし呆れた。
「お前さ～唯名と両思いなんじゃねーの？そんな事ばっかりしてっと唯名他の男に取られっぞ！」
と軽く忠告を言い放つ。
「……」
その直樹の忠告に、悪戯っ子のような顔で笑っていた蓮の顔が徐々に暗い表情に変わっていく。
「まだダメなのか？」
「……」
俯き何も返事しないで蓮はジーンズのポケットからタバコの箱取り出すとタバコを吸い始めた。
それにはわけがある。

蓮は六歳の頃、大好きだった両親が離婚した。
そのコトが蓮には今でも忘れられない。
どんなに愛し合っていても、いつか気持ちは離れる……どれだけ信じていてもいつかは裏切られる。
小さい時に親から受けた裏切りは、大学生になった今も蓮の心の中に深く傷として残っている。
唯名とお互い想い合っていて付き合ったとしても、信じ合って結婚したとしても、いつかは親のように唯名も自分の元を去っていく。
ーそれなら、仲のいい友達のままいた方がいい。
蓮はそう思っている。
だから唯名と同じ想いでいても友達以上に進むことはできない。
蓮は自分が本気になれない軽い女の子ばかり選んでとっかえひっかえ付き合っていた。
「ごめん……蓮」
直樹は暗く沈む蓮に謝った。

直樹は蓮の幼稚園の頃からの友達で蓮の一番の親友。
だから、昔、蓮がどれだけ傷ついていたかすべて見てきたからよく知っている。
器用そうに見えて意外と不器用な蓮。
「……ん、大丈夫」蓮は吸いかけのタバコを足元に捨て靴で擦り消すと、余計なコトを言うん
じゃなかったという表情で心配そうに自分を見る直樹にそっと微笑みかけた。
「今度は、どんな女よ？」
直樹は，元の軽い感覚の蓮に戻そうと、蓮が今探してる女の話に戻し興味深々そうに訊くと
蓮はあっさり一言「無愛想女……」と答える。
「は、な？」

ぶ、無愛想女？
お、俺の聞き間違えか？
今まで蓮の口から発されたことのない言葉に直樹は自分の耳を疑い、口は金魚のようにぽかんと開いたまま言葉を失う。
そんな直樹の顔を見て、蓮はまた楽しそうに悪ガキのような顔でニヤッと笑いかける。
今の直樹には、ニヤッと笑う蓮の今度のターゲットがどんな女なのかもちろん想像もつかない。

第４話竹下蓮

あの男（蓮）と会わないようになって、二週間が経とうとしている。

ホッとする。

倫はいつものように里香と一緒に大学のカフェテリアで楽しそうに話しながらランチをしている。

サラダのキュウリにフォークをさし食べようとした倫は、後方から「唯名っ！」と呼ぶ聞き覚えのある人なつっこい声に振り向いた。

高い身長、茶色のサラサラした髪、笑うと人なつっこい軽いフインキ……。

あいつだった。

倫は、蓮に気づかれるのが嫌なのと急に早く打ち始める心臓の鼓動に戸惑い振り返り俯いた。

ドキドキ……。

どうしたの、私……？心臓の鼓動がどんどん早くなる……。

倫は自分の心臓の鼓動がどうして早くなるのか分からない。

戸惑う倫。

「あー、あの人……法学部の竹下蓮だぁ……」

俯き戸惑っている倫の前で、里香はあの男の名前を口に出した。

「ホウガクブ……タケシタ……レン……？」

倫は小さな声で蓮の名前をゆっくりと口にする。

あの人レンって言うんだ……。

「そう、あそこにいる背の高いイケメン」

「里香ちゃん、何で知ってるの？」

「あんたは興味ないから知らないかも知れないけど、あの人、ニ、三年の女子の間じゃぁ凄く有名だ

よ〜。頭もいいし、すっごくモテルんだよ。ちょっとタラシだけど」
「そ、そうなんだ……」
全然知らなかった……。
っていうか、全然知らない。
倫はもう一度ゆっくり振り返り蓮を見た。
「金城(きんじょう)唯名、あの子が竹下蓮の本命らしいよ」
金城唯名。
あの子なら知ってる。
この大学の理事長の孫で、この大学の人間なら知らない人はいないってぐらいの綺麗な女の子。
色白で清楚な感じで何もかもバランスよく整っていて、女の私ですらドキドキしてしまう。
倫はなぜか悲しかった。
最悪だと思っていたあいつ……。
「ふーん」
やっぱり……。
蓮を遠目に切なそうな顔で見ていた倫がフォークにさしたキュウリを食べようと口を開けた瞬間、
蓮は倫の方を見た。
あっ……やばっ……。
慌てて振り向き俯く倫。
でも、遅かった?
蓮は倫に気がつき、探してた倫の俯く後姿をトレーを持ったまま見つめた。
「蓮?」
唯名はそんな蓮の顔を不思議そうに見ながら蓮の服の袖を引っ張った。
誰かを真っ直ぐ見つめる蓮の瞳。
唯名は蓮が見ている視線の先を見て、蓮が他の女を見ているのに気がつくとムッとし、また蓮の

服の袖をおもいっきり引っ張った。
「あ……」
ようやく引っ張られた服の袖に気がついた蓮は唯名の顔を見下ろす。
「早く座ったら？」
「あ、唯名、ごめっ！またね」
「えっ？」
蓮は唯名に謝ると、倫が座るテーブルの方に歩き出した。

倫は二人の間にどんな会話があるのか気にはなったけれど、私には関係ない……と言い聞かせサラダを食べる。
「やっと、あーえーたっ！」
蓮は人なつっこい口調でニコニコしながら倫の隣に、ドカッ！と座る。
「！？」
まさか自分の本命を残し、自分の所に来るとは思わなかった蓮を物凄く驚いた様子で見た倫は、前に座っている里香に助けを求めようと見たら、里香は倫以上驚いた顔で自分と蓮を見ていた。
今日は何も言わない倫に、「今日は怒んないの？」と訊く。
軽そうな悪戯っぽい瞳で自分を見る蓮。
周りでランチをしている学生の視線が倫と蓮に注がれる。
「みんなが見てるから……」
ボソッと答える倫。
蓮は、慣れた感じで驚いた顔で自分達を見ている周りの学生にニコニコ笑いかける。
「倫……まさか……？」
少しして我に返った里香はなぜか分からないけど恐る恐る倫の名

前を口にし、里香が何を言いたい
か察した倫はため息をつくと軽く頷いた。
「リン。ていうんだ。可愛い顔に合ってんじゃん！どう書くの？鈴、凛々しいの凛、不倫の倫？」
幼い子供がお母さんに、なんで？を訊くかのようにテンポよく訊く。
「倫理の倫」
「あー、倫理の倫ねぇ……そうなんだぁ」
蓮は納得したようにウンウンと頷き、今度は里香に目を向ける。
「お友達は何ちゃん？」
「里香です」
「よろしくね、里香ちゃん」
「はい、こちらこそぉ」
里香はまるで芸能人に会ったかのように嬉しそうに返事する。
私も里香ちゃんのように愛嬌があったらいいのになぁ……。
蓮と楽しそうに話している里香を見ているとなぜかそんなことを考えている。
今まで感じた事もない、考えて事もない気持ちが湧き上がってくる。
人を羨ましいなんて思ったこともなかったのに……。
里香が蓮と楽しそうに話してる中、倫は今まで感じたコトのない感情に戸惑いを覚えていた。

第5話曇りのち晴れ？

倫はあの気持ちが何なのかまだ気づかない。
誰が教えてくれるのだろう？
お母さん……先生……？
友達……？
自分……？
数学の方程式ならすぐ解るのに……。

あの日以来、なぜかいつもトクトウセキに蓮も座っている。
駆け込み乗車をしない蓮。
もちろんカフェテリアでもだいたい隣に座ってる。
ランチを終え倫達と別れ図書館に向かう為，ガラス張りの渡り廊下を歩いている蓮に、直樹と
智史は後ろから追いかけ訊く。
「椎名倫。どうだった、良かったか？」
「ん～何が……？」蓮はとぼける様子も無く訊き返す。
「付き合ってるんだろ？」智史はその先を早く訊きたそうにニヤニヤしながら興味深々に訊く。
「ん、付き合ってもないし、何もしてねぇ……」蓮は他人事のようにあっさりと返答する。
「は……？」
直樹と智史は、蓮の口から出た言葉に驚いた様子で顔を見合わせると、「あいつ……やっぱり
手ごわいんか？やらせてくれないんならさっさと新しいの探せよ」
と口を揃えた。
いつもならターゲットを見つけ、ヤレそうじゃなかったら手のひらを返すように次のターゲッ
トに乗り変える蓮。

「でも、どうして椎名倫なんか……あの女、可愛いけどいつもとはちょっと違うんじゃないか？
だいいちとっつきにくいし、やらせてくれそうもない……からかってるだけか？」
智史はどうして蓮が倫に構うのかが不思議でたまらない。もっと軽い女はいっぱいいるのに……
そう思っている。
「……あいつとはそんなんじゃない」ポツリと意味ありげに呟く蓮。
「でも、本命は唯名なんだろう？」
「まぁね」

蓮は自分でも不思議な感じだった。
あいつといるとなぜか落ち着く……。
自分でも分からないけど、知らないうちにあいつ（倫）を探してる。
どうしたんだろう、俺……？

＊　＊　＊

ある日、倫は久しぶりに里香と二人だけでランチをしていると、蓮の本命と噂のあの金城唯名が
話しかけてきた。
「今度、うちに海外からお客様が来るの、ホームパーティをするからもしよかったら蓮と一
緒に来てくれる？」
透き通りそうなほどの白い肌……整った顔立ち……綺麗な子……。
蓮くんが彼女を好きなのも分かる……。
「……」
思わず見とれてしまった。
「どう？」唯名は倫の目を真っ直ぐ見つめ微笑む。
倫はどうして唯名が話したこともない自分を誘ってくれるのか分か

らなかった。
「私なんかが行ってもいいのかしら？」
「もちろん。勉強にもなると思うし……」ニッコリ微笑む唯名。
倫は窓の外の春風に揺れる綺麗な新緑の葉を見つめ少し考えると、
「いいわ」と返事をした。
「じゃぁ、細かいことは蓮に伝えておくわ」
「……うん、分かったわ」
唯名の姿が自分の前から消えると、倫はそっとため息をつきグラスの中の水を飲んだ。
緊張した。同性と話しててこんなに緊張するのは産まれて初めてといったぐらい緊張した。
まだドキドキする……。
どうして私を誘ったんだろう？よりによってあの竹下蓮と一緒にだなんて……。
戸惑い俯き考え込む倫。隣でこの二人のやり取りを聞いていた里香は「金城唯名、椎名倫に宣
戦布告……」
「……」
里香の言った言葉に驚き倫は、ぱっと顔を上げると意味が分からないといった感じで里香の顔
を見つめる。
「竹下蓮に気に入られたから……」
「えっ、気に入られた？」
全く現在の状況を理解していない倫。
「そう、あんたが金城唯名のライバルになったから……」
えっ、えっ？
「ライバルって？　だってあの二人は両思いなんでしょ？」
「うん、そう訊いたけど……」里香は清ました顔で食後のコーヒーを一口飲む。
なんなんなのか、どういうことなのか分からない……。

「里香ちゃーん。なんなのぉ〜？」半泣き状態の顔で里香に助けを求める倫。
「よしよし、あんたの気持ちは分かんないけど、とりあえずがんばってね」
里香は小さな女の子を慰めるようにそっと倫の頭を撫ぜた。

＊　＊　＊

戸惑う倫の気持ちをよそに唯名の家へ行く日はあっという間に来た。
昼過ぎ、倫と蓮はいつもの駅で待ち合わせ。
今にも雨が降りそうなドンヨリした曇り空……倫のココロの中を表してるよう。
そんな空の下、倫は駅のホームで俯きベンチに座って待っていると、
「よぉ！待った？」いつもの人なつっこい口調と笑顔で蓮は歩いてきた。
「……」
倫は少し緊張した様子で立ち上がると自分の前に立つ蓮の姿を見つめた。
スーツ姿の蓮。
身長が高いからすごく似合ってる。
倫はモデルみたいにキマッテル蓮に少し見とれたが、「なんか、ホストみたい……」とぶっきらぼうに呟いた。
「お前……かっこいい！とか言えないの？素直じゃないんだから……」
「なっ……」
生意気そうな笑顔で腕を組む蓮に、何を言ってるのという感じで呆れ横を向く倫。
スモーキーピンクのサテンでできたミニのパーティードレス、いつもは長く伸ばした栗毛色の髪

を今日はアップにしている。そんな倫を可愛いと感じる蓮。
「似合ってんじゃん、女らしいかっこ……。可愛いよ」
「……」
いつもとは違う口調の蓮。
倫がゆっくり顔を上げると蓮は優しい表情で倫を見つめていた。
ドキッ……。
少しずつ早くなる倫の心臓。
あまりにも優しい表情で自分を見つめる蓮を見つめることができなくなった倫はぱっと顔を地面
に下ろした。
「まぁ、Tシャツとジーンズの小生意気な感じのお前の方が俺は好きだけどね」
「もぉ……」

二人はいつも降りる大学がある駅を三駅越した駅で電車を降りた。
いつ雨が降るのか降らないのか、まだはっきりしない空の下、倫と蓮はしばらく道なりを歩く。
蓮は閑静な高級住宅街の中でもひときわ人目を惹く上品な白い大きな門の前で足を止めた。
「ここだよ、あいつんち」
倫は大きな門を通り越し、少し離れた所に建っている邸宅を見上げると声をあげた。
「わ、すごい……」
閑静な高級住宅地にある、白亜の豪邸。
そんな言葉がぴったりだった。
インターホンを押すと、門から少し離れた玄関から唯名が出てきた。
「いらっしゃい」
「よぉ」
唯名に手を上げ微笑む蓮。
「こんにちは」

蓮の後ろに立っていた倫はひょっこり顔を出し、唯名の姿を見ると真っ先にショックを受けた。
スモーキーピンクのサテンのドレス。
透き通りそうなほどの白い肌の金城さんにとても似合ってる……。
倫は自分の着ているパーティードレスとは形は違うけど、同じ色のパーティードレスを着ている唯名を悲しそうに見つめた。
「来てくれてありがとね、倫ちゃん。さぁ、中入って……」
「あ、うん」
倫は少し元気の無い声で返事をすると、蓮と唯名の後ろをついて門前を広がる階段を一段一段ゆっくりと上がった。
「倫ちゃん、ホームパーティーは初めて？」
「えっ？あ、うんん、フランスにいた時はよく……」
唯名と蓮は驚き顔を見合わせた。
「お前、帰国子女？」
「あ、うん……」
「だから少し感覚が違うんだ」
「え、そう？」

少しほろ酔い加減の倫は楠木にもてれ楽しそうに話している蓮と唯名の姿を眺めていた。
こうして見てると何気に気立てが良さそうな蓮と見るからにどこかの令嬢と分かる気品がある唯名。
すごくお似合いの二人……。
倫はため息をついた。
今日ここに来てからため息ばかり。私……どうして行くなんて言ったんだろう？
倫の目に薄っすらと涙が浮かんだ。

楽しそうな二人の姿を見て色々と考えていると、蓮と一緒にいる時にドキドキする理由と涙とため息のでる理由が少しずつ分かってきた。
私……。
わたし……蓮くんのコト……。
私は、蓮くんのコトを……。
倫は、やっと、今日初めて自分の気持ちに気づく。
きっと、私、蓮くんのコトが好きだ。
２０年間生きてきて今まで誰にもこんなに強く感じたことがなかった感情。
ゆっくりと倫の周りを通り過ぎていく夜風と揺れた楠木からほのかに香る楠木の葉の香りの中で、
倫は蓮だけを見つめた。
そして……はっきりと気づく。
……私は、蓮くんが好き。
蓮くんが好き。

唯名の家からの帰りの電車の中、倫は蓮と一言も話そうはせず、だた目の前のガラス越し、早く通り過ぎて行く街のネオンを見つめている。
蓮は出会った時のようにまたニコニコしながらいつもより無口な倫に、「お前、笑った方が可愛いって」と言うと倫の口元に手をあてた。
「！？」
驚いた倫は咄嗟に立ち上がり蓮をひっぱたこうと手を振り上げ下ろした、その時、蓮は倫の手首を掴み自分の方へ引き寄せキスをした。
「……っ」
倫は蓮の手を思いっきり振り払い肩を押し離れると蓮を睨んだ。

蓮を睨んだ瞳からは涙がポロポロと止まることを知らないかのように溢れ出す。
そんな倫を見て、蓮は驚き立ち上がった。
気が強い倫がまさか泣くとは想像していなかった。
口元に手をあて肩を揺らしながら泣く倫。
今回も上手くかわされるか怒って済まされると蓮は思っていた。
「なにも泣かなくても……ごめん。ごめん、椎名。本当にごめん……」
戸惑い困った様子で倫の顔を覗き込み何度も謝る蓮。
「謝るならはじめからこんなコトしないで」
いつもよりきつい口調で言い放ち、またイスに座るとバックからハンカチを取り出し顔を覆う倫。
「お前みたいな女初めてだよ」蓮はそんな倫の姿を見て苦笑しながら見つめるとまた倫の隣に座った。
「なにそれ？それはこっちのセリフよ」
涙を拭いたハンカチを握り締め倫は膨れった顔で向かい合わせのガラスに映る蓮を見る。
蓮は、真っ赤な目をした膨れる倫の顔を覗き込みニッコリと微笑みかけた。
「お前といるとなんか落ち着くよ」
「……」
どういう意味？
倫はハンカチでまた涙を拭き真っ赤になった目でぽかんと口を開け、ガラス越しに見ていた蓮から
目を離し隣にいる蓮の顔を見た。
「まっ、他の女がこんなに怒りんぼうだったイヤだけどね」
キョトンとし自分から目を離さない倫のほっぺを軽くつねる。
嬉しい。
今日、蓮と唯名のお似合いな二人の姿を間近で見て落ち込んでいたことなんかすっかり忘れてしま

うほど……この時間(とき)に幸せを感じる。

第6話トライアングル

……私、蓮くんが好き。
楠木の葉の香りが漂う夜にはっきりと気づいた気持ち。
帰りの電車の中での突然の蓮のキス。
「お前といるとなんか落ち着くよ」そう言ってくれた蓮くん……。
唯名の家でのホームパーティーのその帰りの電車の中で、二人の間を流れてる空気が少しずつ変わり始めていた。

ある日、倫は里香と二人だけでランチをしていると、倫の姿を見つけ、また唯名が倫の所に歩いてきた。
「こんにちは、倫ちゃん」
唯名ちゃんはいつ見ても本当に凄く綺麗で、キラキラした瞳(め)でずっと見つめられると、女の私ですら硬直しそうになる。
きっと、私が男だったら、蓮くんが唯名ちゃんのコトを好きなように私も好きになると思う。
「こんにちは、どうしたの？」
唯名があの日以来、声をかけてくるコトがなかったので倫は不思議そうに訊いてみる。
「倫ちゃん今度の土曜日はヒマ？」
今度の土曜日？
彼氏がいるわけでもない、テスト勉強もないし友達との約束も入っていない。
「うん、ヒマ……だけど？」
「そう、よかった。なら一緒に映画でも行かない？」

「え、映画？」
「うん、見たい映画があって……」
唯名は少し甘えるような声で言った。
どうして私を誘うんだろう？映画なら他の子を誘えばいいのに……と倫は思ったが、取りあえず見に行く映画の名前を訊いてみた。
「なんの映画見に行くの？」
「あのね、フランス映画なんだけど、『休日はあなたと…』っていう映画、倫ちゃん知ってる？」
「えっ？うそっ」
倫はフランス映画という言葉と見に行く映画の名前を聞いて声を弾ませる。
その映画は倫の見たい映画だった。見に行きたいけど里香ちゃんはフランス映画に興味がないし……
一人で行くのもなんだかなぁ……と思って見に行くのを保留していた。
倫は丁度いいから「いいよ」と返事をした。
「じゃぁ、決まりね！蓮と直樹も誘ってあるから四人で行こう」と唯名は両手を自分の胸の前で合わせると嬉しそうに言った。
えっ？
唯名の口から出た蓮の名前に倫は一瞬ドキンとする。
蓮くんも一緒なんだ……。
蓮も一緒に行くと聞き、映画に行く気が少し失せた。
蓮と二人きりでいたり、話したりするのはいつものことだし、蓮のコトが好きだから全然問題はないのだけれど、大学外での蓮と唯名の二人の姿を見るのは、倫にとって辛いことだった。
「二人も来るんだ」
「うん、蓮も直樹も映画好きだから誘っておいたの」

ニッコリ微笑む唯名に「そうなんだ」としか言えなかった。
「じゃぁ、土曜日、時計塔広場に一時ね！」
「あ、うん」
倫とは正反対に嬉しそうに満面の笑みを浮かべ唯名はそう言うと、友達が待つテーブルまで歩いて行った。

倫は複雑な気持ちで目の前にあるグラスの中に入ってる水を一気に飲み干すと、食べかけのカレーライスを黙々と口の中に詰め込み食べ始めた。
そんな二人のやり取りを、この間と同様、今度は倫の隣でクールに座ってまた聞いていた里香は、落ち着きがなくカレーライスを口に次々と詰め込んでいく倫を見てニヤリと笑うと、「すごい集中攻撃」と呟いた。
「えっ？んんんん……」
里香が言った言葉に思わず声を飲み倫は里香を見た。
「なーんかドラマ見てるみたい……」
「……」
楽しそうに笑う里香はスプーンを皿の上に置くと腕を組み何かを考え始めて、少し経つと「トライアングル」と一言。
「えっ……？」
トライアングル？
倫は楽器のトライアングルを思い浮かべ、カフェテリアの明るい陽射しが注ぎ込む高い吹き抜けの天井を見つめ考え込んだ。
違う……。
トライアングル、イコール……三角関係？
えっ、三角関係～？

三角……。
「違うっ！」
倫は大声で否定すると席を立ち上がった。
「り、倫？」
私達が三角関係～？
「それは絶対に違うっ！」
息と声を荒げて倫は言う。
「お、落ち着いて……みんなが見てるから座ったほうがいいよ。ね，倫」
自分の右腕を掴み、よそに視線を向ける里香の視線の先を見た倫は立ってる自分を、何してるんだ？
と言う顔で見てるみんなを見て、「ごめんねさい、何も無いです」と左右前後にお詫びをし、またイスに座った。
「里香ちゃ～ん」
「だってね……」里香は自分の顔の前に右手を上げ人指し指を突き出すと、「天辺が竹下蓮。斜め横に下ろして金城唯名。その横が椎名倫、あんた。そしてまた戻すと、はいっ、綺麗なトライアングルの出来上がり！里香ちゃん上出来！」里香は自分の言ったコトに納得しながら得意げに言う。
確かにそうかも知れない……倫は一瞬、ゴモットモと納得するが、「違うっ！」倫は里香と同じように自分の顔の前に、右手を出し人指し指を差し出すと、「ここが、竹下蓮。ずーっと真っ直ぐ引いて金城唯名。これでおしまい！」と言い返した。
「えっー」
里香は疑いの眼差しで倫を見ると「倫、竹下蓮のコトなんとも想ってないの？」と訊く。
「想ってない。まーったく想ってない！」

倫は首をおもいっきりブルブル振り否定する。
「なーんだつまんないのぉ」
里香はがっかりするとまたカレーライスを食べ始める。
「そんなわけないでしょ、余計な詮索しないの」
「はいはい……」
倫も残りのカレーライスを食べ始める。
「はぁ……」
最近色んなコトがありすぎて少し、ため息が増えた感じがする。

第7話複雑な心境

雲ひとつない澄みきった青空の土曜日。
倫は電車に乗ると、空いているお気に入りのトクトウセキには座らずにドアの手摺りにもたれかかり
反対のガラスのドアに映る自分の姿を見た。
白い生地に青い小花柄の膝丈までのワンピースを着た自分。
幼少の頃は、ママの見立てでよく女の子らしい服を着ていたけれど、年頃になるにつれてTシャツに
ジーンズのボーイッシュな格好をするようになっていった。
倫はいつもの自分と今日の自分を照らし合わせてみる。
足が出てるし、肩も出てる……なんか凄く恥ずかしい……。
やっぱり止めてくればよかったかな？

「Tシャツにジーンズ姿のお前の方が好き……」
そう言ってくれた蓮くんの言葉を思い出す。
着てきたコトを少し後悔する……でも、蓮くん、いつもとは違う私に今日は気づいてくれるかな？
倫は唯名と先に待ち合わせをしていて、今、電車に乗っているはずはない蓮の姿を探した。

待ち合わせの時計塔は、大学がある駅を降りて大学とは反対の方向にある。
いつもと同じ改札口を抜け、倫は緊張した様子でゆっくりと歩いた。
心臓の鼓動がまた少しずつ大きく鳴る。
やっぱり断ればよかった。
着てきた服以上に後悔という二文字がクローズアップしてくる。
「あ、どうしよう」

緊張で歩く足がさっきよりスローダウンすると倫は大きくため息をついた。

ドキドキする心臓をなんとか深い呼吸で押さえ待ち合わせの時計塔の前まで来ると、そこには蓮と唯名の姿はまだなく、蓮の友達の直樹が一人で立っているのを見ると倫は、よかったと少しホッとした。

「よぉ、椎名！」

直樹は倫を見つけると手を振った。

当然直樹と初対面じゃない倫は直樹に微笑みかけると、小走りで直樹の元へと駆けて行く。

「こんにちは、佐藤くん（ちなみに直樹の苗字は佐藤）」

ニコニコと微笑みながら、大学にいる時とは全く違う感じで自分の所に駆けて来る倫を直樹はぼーっと見つめる。

「……」

「佐藤くん？」

動かなくなった直樹を、倫はどうしたんだろう？と思い、直樹の顔を覗き込むと、「椎名っていつもそうやって笑ってれば、めちゃ可愛いのに……」と真顔で言う。

えっ？

突然そんなコトを真剣な顔で言う直樹が可笑しくて倫は照れながら、「えー、ヤダ、佐藤くん。何言って……。あはは、佐藤くんって面白い。あはははは」とお腹を抱えて笑い始めた。

「そんなに笑うなよぉ～倫ちゃん」

「ごめっ、ごめんね。あまりにも真剣な顔だったから、あはは」

「もぉー」

あまりにも笑いこける倫に直樹は苦笑いをしながら、ポリポリと

頭を掻いた。
直樹のおかげ？でさっきまでの緊張が解け、思いもよらないほど気が合った倫と直樹が和気藹々と話
している中、五分程遅れて、倫の後ろから「遅れてごめんね」と唯名が二人に声をかけると、倫はその
声に笑いながら振り返り唯名を見た。
真っ赤な高級外車。
倫は車から目線を運転席に座る蓮に移すと蓮が自分を見ていた。
見つめ合う倫と蓮。
さっきまでの笑顔は徐々に消え、また倫の顔は緊張した表情に変わっていく。
どうしよう……やっぱりダメかも……。
早くなる心臓の鼓動、倫は自分の胸を押さえた。
いつもとは何か違う倫。
そんな倫に蓮は一瞬ドキッとするが、いつものように倫に声をかけようと口を開いたその時、倫がふ
いに蓮から目線を外した。
あ……。
何も言えなくなる蓮。
「さっ、倫ちゃん乗ろうぜ」
直樹は倫の肩にポンっと手を置き歩き出すと助手席の後ろのドアを開けた。
「あっ、ありがとう直樹くん」
ニッコリと直樹に笑いかけ車に乗り込む倫と、いつも間にか二人が名前で呼び合ってることに気づい
た蓮はなぜか少しムッとした。
時々、後部座席から運転する蓮の横顔を見つめる倫と、バックミラー越しに倫を見つめる蓮。
依然として倫は蓮に話しかけようとはせず、蓮も話しかけるタイ

ミングを見つけれない。
いつもとは違う感じのそんな中、「しかしいいよなー唯名」後部座席の倫の隣に座る直樹は車内を見回した。
「えーどうして？」
唯名が直樹の言葉に振る向くと倫は運転をする蓮を見た。
「誕生日プレゼントに外車なんて……」
「あー」
「えっ？この車唯名ちゃんのなの？」
倫はてっきり蓮が運転をしていたから、蓮の車だと思っていた。
「俺、運転あまり好きじゃないから……」
ようやく倫と話せるタイミングを見つけた蓮は運転しながらバックミラー越しそう答えたが、倫は蓮と目も合わせようともせず「直樹くんは？」とすぐに話を直樹に求めた。
な、なんなんだ？
蓮は自分を避けている感じがする倫にまたまたムッするが、直樹は蓮のそんな様子に少しも気づくことなく「俺は持ってないよ、倫ちゃんは？」とまた倫を名前で呼ぶ。
あ、くそ。直樹、俺でも倫のコト名前で呼んだこと無いのに……。
いつもなら誰にでも軽く呼び捨てする蓮だが倫だけは名前で呼べずにいる。
「そうなんだ、私も……直樹くんはどんな車乗りたい？」
だっ、倫まで……。いつから名前で呼ぶようになったんだ？俺のコトは、あなたとかねぇとしか呼ばねぇのに……。
ブツブツ思いながら、気が合い仲良く話している二人を蓮はバックミラーでふてくされ睨んでいると
隣の助手席に座って話を聞いていた唯名が「あの二人いい感じ、お似合いね」と小声で複雑な気持ちの

蓮の心に留めを差した。

はぁ〜いい感じ？あの二人が……？冗談じゃないっ！

第8話蓮の作戦

映画館に着いた四人は、あらかじめ蓮がネットで予約をしておいたチケットに記載してあるシアター1への席へと向かう。
「Fの7と……」
蓮はチケットを見てジュースを置くと席に着く。
私は……Fの8……。倫はチケットに書いてある番号を見て席を見ると蓮が隣の席に座っている。
あ……蓮くんの隣の席。
座席は、倫、蓮、直樹、唯名の順だった。
いつも電車の中では蓮の隣に一緒に座っているけど、今日の倫の心臓はなぜかいつもの慣れているコトにすべて過剰に反応してしまう。
どうしよう……また、心臓がドキドキする……。
倫は俯きながら先に座る蓮の前を通り蓮の隣の席に座った。
「……」
自分のコトを気にせずにさっさと先に座る蓮と倫を見て唯名は少しムッとする。
「おい、蓮、席変わってやろうか?」
どうしよう…どうしよう、話しかけられたらどうしよう……倫がスクリーンを見ながら心の中で考えていると、丁度いい具合に唯名と蓮に気を利かせた直樹が蓮に声をかけた。
「……」
ナイス、直樹くん。ナイス直樹。
倫と唯名が直樹の言葉にホッとし、蓮の横顔を見た時、「んにゃ、面倒だからいい」と蓮は口にする。
えっ?

「……」
蓮以外の三人は蓮の返事に戸惑った。
「そ、そうか？唯名、蓮の隣に行く？」
直樹は今度、落ち込む唯名に気を利かせる。
「あ、うんん、いい」
唯名は蓮と仲良くする所を本当は倫に見せつけようとしていたのだけれど、蓮の一言でオジャンになってしまう。
蓮のバカ…少しぐらい気を利かせてよ。
唯名は意地で直樹の横に座り真っ直ぐスクリーンを見ている蓮を不満そうな顔で見つめた。
一方、面倒くさいと言う蓮のただの言葉にすごく意識してる倫は、隣は壁状態。といった感じで依然蓮と話そうともしないし、顔も見ようとしない。
そんな倫に、珍しく話しをかけたくても話しかけられない蓮はホールが暗くなり映画が始まったと同時に倫のジュースにわざと手を伸ばした。
「はぁ〜、美味し！」
蓮の作戦で、自分のジュースが飲まれているコトに倫は映画に夢中で気づかない。
「……」
蓮はまた倫のジュースを口にするが倫はまだまだ気づかない。早く気づかないとジュースがなくなるぞぉ。蓮は映画そっちのけで倫の顔を見てる。
映画が始まって十分ぐらい経った頃、喉が少し渇いた倫がジュースに手を伸ばした。
今だ！
倫は自分のジュースの紙コップを掴もうとした瞬間、倫の手から紙コップがするりとすり抜けた。
「えっ？」

倫は驚き、何も気づかないような顔で自分のジュースを飲んでいる蓮を見た。
あ……それ、私のジュース。
蓮は倫が自分を見ているコトに気づいてるが、わざと気づかないフリをして飲んだジュースの紙コップを元の位置に戻す。
「……」
う……。
いつもの倫ならすぐに何でも言えるけど，今日の倫は何も言えずただ飲まれたジュースの紙コップを見ている。
そんな全く何も言ってこない倫に蓮はまた同じコトを繰り返す。
あ……。
今度は二度も自分のジュースを飲んでいるコトに気づかない蓮の肩を倫は叩き、「このジュース、私の」と映画を見ているフリをしている蓮に言うが、蓮は「はぁ？」と聞こえないフリをする。
もぉ！倫は蓮が聞こえないんだと思い、蓮の耳元で話そうと近づいた時、蓮がふと横を向いた。
「……！？」
近づいた倫の唇に振り向いた蓮の唇がすっと触れる。
「わぁ」
倫は驚き、何も言えなく俯く。
やった！作戦成功で満足げにニコッリ笑う蓮。
そんな蓮とは反対に、どうしてこんなコトばかりするんだろう……？と倫は思う。
唯名が好きなはずの蓮が自分のコトをからかって楽しんでるように感じ、倫は落ち込み泣きそうになる。

第9話青い小花柄のワンピース

気づいたらエンドロールになっていた。
しまった……とても映画どころじゃなかった……この映画凄く見たかったのに……。
映画のエンディング曲を聴きながら倫は視線をちらりとスクリーンから蓮へと移した。
さっきのコトなど全く気にしていないという様子で唇に指をトントンとあて、エンドロールを見ながら
エンディング曲のリズムをとっている蓮。
倫は、蓮の自分に対しての行動が不思議でたまらなかった。
蓮が軽い人だってコトは里香から聞いて知っている。
でも、蓮がイマイチどういう性格なのか倫はまだ判らないし、自分と出会う前の蓮の女の子への接し方
も知らないから蓮の自分に対する態度に一つ一つ困惑する。

「終わったな、出ようぜ」
ホールが明るくなると、蓮は空の紙コップを手に取り一目散に立ち上がった。
「うーん、飯くいに行こうぜぇ～」
続いて直樹も背伸びをして立ち上がる。
「倫ちゃん、いこ」
唯名は、まだイスに座ってボーっとしている倫に声をかけた。
倫は色々な考えていて、ホールが明るくなっていたコトも蓮達が立ち上がったコトも気づかず、唯名の
一言で目が覚めるかのようにハッと我に返った。
「あ……うん」
倫はほとんど蓮に飲まれたジュースの紙コップを持つと席を立った。

四人は映画館から出ると地下の駐車場へと向かう。
蓮と唯名は、「あの場面が良かった」「あの男のあの台詞はいただけない」とか、映画の感想をワイのワイのと楽しそうに討論している。
そんな二人の後を倫は無言のまま俯き直樹とついて歩く。
「あの二人、映画見に行くといつもああなんだぜ」
直樹が言った言葉に倫は顔を上げ「そうなんだ……」と漸く口を開いた。
あの二人本当に仲がいいんだ。今更知ったコトじゃないけど……。
倫は蓮と唯名の楽しそうに話しながら歩いている後姿を見つめると、胸が苦しくなり小さくため息を吐くとまた俯いた。
そんな待ち合わせの時とは違う少し暗い倫のコトを直樹は気にし「倫ちゃん、調子悪くなった?」と倫の顔を覗き込んだ。
あ……きっと直樹くんに気づかれる……。
直樹に蓮への気持ちを気づかれるんじゃないかと思い「あはは、大丈夫だよ〜」とあっけらかーんとした感じの笑顔を作り倫は直樹に返事をする。
「そう、ならいいんだけど」
「えへへ、心配かけてごめんね直樹くん」
今度は倫が心配そうにする直樹の顔を覗き込む。
そんな二人の仲の良さそうな姿を、唯名の車のドアの前で見ていた蓮はムッとすると、さっき以上複雑でモヤモヤした落ち着かない気分になっていった。

結局、今日、倫と蓮はまともに話すコトもなく、目もまともに見ることなく終わった。
倫は、帰りの電車、一人お気に入りのトクトウセキに座り太もも

の上の青い小花柄のワンピースを見つめた。
蓮からこのワンピースのコトに関して一言も聞けなかった。
憎まれ口でも言って欲しかった。
でも、自分が蓮を意識し避けたコト、蓮が何度か話しかけようとしてくれていたコトも分かっている……。
唯名を送るために帰りも一緒じゃない蓮。
蓮くん、今唯名ちゃんと何してるんだろう……二人は付き合い始めてるのかな？
頭の中をそんなコトばかり駆け巡る。
「はぁ……」
片思いってこんなにも苦しいんだ……。
こんなコトなら今までみたいに恋になんか関心がなかった方のが楽だなと思う。
揺れる電車と進む電車の音がいつもより、より一層大きく感じさせ倫の心を切なくさせる。
私の恋は、私のこの想いは、何処まで走っていくんだろう？

次の朝、倫はいつもの場所ではなく駅のホームのベンチで座っている。
今日はなぜかプラットホームにたくさんの高校生がいる。
あー、毎年恒例の社会見学。これじゃぁ、電車に乗れないかも……。
倫がたくさんの高校生を見回していると、女子生徒が顔を見合わせきゃぁきゃぁと言い始めた。
ん、何があるんだろう？
このざわめきにベンチから立ち上がった倫は、高校生の頭の中からずば抜けて高い頭が女子高校生達の視
線を浴びながらこっちに歩いて来るのに気づく。
「ふわぁ～。おはよ～、なんなんだよ～これ～」
蓮は大あくびをし、眠そうな顔で倫の前で立ち止まった。

あ……。
いつもと違って少しだらしなさそうな蓮も違った感じで格好いい。
「お、おはよう……」
蓮と挨拶を交わす倫に周りの女子生徒の視線が一斉に向けられる。
ヤッ、こ、怖い～どうしよう～？
「……ちょっ、ちょっと離れてくれる？」
女子高校生が自分を足の先から頭の天辺まで見上げている。
わわわ、朝からきつい。
「ほえ？なんで～？」
蓮はこんな場面に慣れてるのか周りの視線を全く気にすることなく、その場に座り込んでまた大あくびをする。
「え、あ、だって～」
倫は涙目で恐る恐る女子高校生達を見ると、「なんだあんな可愛い彼女がいるやん」と口々に揃え、女子高校生は向きを変えた。
な、なんなのぉ？
一瞬にして気が抜けた倫はまたベンチに腰を落とした。
「あ、電車来たぞ」

電車の中は案の定詰め込みセールの胡瓜のようにギュウギュ詰で息もするのが苦しいほどの熱気だった。
う、暑い～。
朝から散々な倫。
二人は込み合う電車の中、出やすいようにとドアの手すりのある位置に立つ。
蓮は何気に倫を手すりとイスの少し狭い間に立たせ、自分の身体で他人をシャットアウトするかのように倫の前に立ち塞がった。
「すごいな、こんなん初めて」

初めての事態に身長の高い蓮は電車内を見渡して言う。
「あれ、毎年一回だけあるでしょ？」
毎年一回はあるのに初めてと言う蓮の言葉に倫は蓮の顔を見上げる。
「あー、俺、3月まで車で大学行ってたから……」
蓮はそう答えると顔を倫の顔の前で止めた。
……あ、凄い至近距離。
でも、蓮の長身のおかげで助かったと思い、目線を蓮の顔から胸板へと移すと倫は蓮の身体が自分の身体
にぴたっとくっついているコトと蓮の身体からほのかに香る香水に今気づく。
ど、どうしよう～こんなにくっついてたんだ。
服越しに感じる蓮の体温に倫の心臓の鼓動は早くなり爆発寸前まできている。
ドキッ、ドキッ、ドキドキ……ドキドキッ……。
どうしよう～こんなに密着してたらこの心臓の音、蓮くんに気づかれちゃうかもしれない。
倫は辺りをちらっと見て、肩にかけていたバックを胸元に持ち替え真っ赤な顔で俯いた。
あ……。
急に意識して俯く倫の旋毛を見て今度は蓮がドキッとする。
女にも、女の裸にも慣れているはずなのに、倫の旋毛すらも可愛いと感じてしまった自分に蓮は戸惑った。
そういえば……。
蓮はぴたっと引っ付いている身体の隙間から倫の足元を見て、今日はジーンズを履いていると確認し
なぜかホットすると、土曜日に着てた膝上までの青い小花柄のワンピース姿の倫を思い出す。
華奢な倫の身体にすごく似合ってたワンピース。

『似合ってる』何度か言おうとタイミングを見計らっていたけど言えなかったワンピース。
心臓の音が蓮に聞こえないように遮ったバックからも、蓮には倫の体温が感じるような気がする。
「なぁ……」
蓮は緊張して俯く倫の旋毛を見つめ、そっと倫に話しかける。
「……な，何？」
そんな位置から声をかけないで……。
倫は緊張で張り裂けそうな心臓の鼓動を押さえる為に胸元で持つバックをぎゅっと握り締め俯いたまま返事をする。
「土曜日に着てたワンピースさぁ……明日、着てこいよ……」
えっ、ワンピース？
「……」
気づいてくれてるとは思わなかったワンピースのコトが蓮の口から出たコトに倫は驚き顔を上げまた蓮の顔を見る。
「あの花柄のワンピース、明日着てこいよ……」
蓮は珍しく顔を真っ赤にすると鼻の頭を掻きながら照れくさそうにそう言うと電車の窓の外を見た。

第１０話約束と誰かの一目惚れ

や……こんな所でそんなコト言うなんて……。
満員電車の中、密着する身体と蓮の言葉に倫の頭はオーバーヒート寸前。
ダメだ……窒息死しそう……。私、このまま死んじゃうのかな……？
人の熱気とドキドキする心臓に火照る身体で上手く呼吸ができない。
早く……駅について。早く。
そう思った時、電車はやっと大学がある駅に着いた。

電車のドアが開き、ドアの手すり側にいた倫と蓮は人に押されるように電車の外に出た。
倫は自分の火照った赤くなっていると思う顔を蓮に見られたくなくて、人にまだ押されるようなフリをして蓮の先を歩いた。
「おい、無視すんなよ」
どうして無視すんだよ？
蓮は倫の少し後ろで倫のぎこちない後姿を見ながら声をかける。
「……」
「待てよ」
「……」
「おい、倫っ！」
無視し続ける倫の名前を蓮は初めて呼んだ。
ビクンッ。
「……や」
これ以上無視すると、気づかれちゃうかもしれない……。
う～。
初めて呼ばれた自分の名前に立ち止まりさっき以上火照った感じの顔で倫はそろ～と後ろを振り返っ

た。
う〜。
「ヤダッ！！何言ってんの？なんであなたにそんなコト言われなきゃいけないのぉ？」
「いいじゃん、着てこいよ」
「イヤッ！」
「倫ってば」
また自分の名前を口にする蓮の声に意識し、今度こそ蓮に意識してるコトに気づかれるんじゃないかと感じた倫は蓮に背を向けた。
「……」
「あの服……凄く似合ってたから……」珍しく恥ずかしそうに照れながらぶっきらぼうに言う蓮を倫は可愛いと感じ「あ、明日ね……」と横目でチラッと蓮の顔を見る。
「やった」

次の日、倫は昨日蓮と約束をした、青い小花柄のワンピースを着て駅でいつものように蓮が来るのを待った。
「遅いなぁ、蓮くん」
最近は、駆け込み乗車をしない蓮。電車が駅に入る少し前には階段を駆け上ってくるのに今日はそんな気配もない。
寝坊でもしたのかな？倫はホームに入った電車のドアが開くと先にお気に入りのトクトウセキに座った。
今日の電車の中いつもと同じでそんなに混んではなく、曇って太陽が出ていないせいか少し肌寒く感じる。

蓮くん遅いな？辺りを見渡してみる。ふふ……今日は久しぶりに駆け込み乗車するのかな？倫はそう思って一人微笑んでいるとドアは閉まり、「えっ？」電車は発車した。

昼から降りだした雨。
倫はカフェテリアで里香と二人でランチをしていたが、蓮はカフェテリアにも姿を見せなかった。
「倫……今日、なんか寒くない？」辺りをキョロキョロ見回し寒そうに二の腕を擦る里香。
「そうだね」倫は俯きながらパクパクとサラダを食べる。
「そう言えば今日竹下くんは？」
「知らない……唯名ちゃん達とランチしてるんじゃない？」不機嫌そうに答え、トマトに箸をぶすっと刺す倫。
あはは、倫ってモロ態度にでるよなぁ……。
これは何かあったと里香はにらんだがあまりにも不機嫌に暗いオーラを放ち落ち込んでる倫に突っ込むコトはできなかった。

倫はランチを終えると、図書館で調べ物がある。と里香と別れ、一人ガラス張りの渡り廊下を歩いていた。
もう、あんな奴知らないし口も利きたくない。あんな奴、もう相手にしないっっ！
倫は頬をぷぅーと膨らませながら、怒り心頭で自分に言い聞かせる。
あー、もうヤダヤダ～。なんで？
ドンッ！！
ドサドサドサァッ！
ぶつかった拍子に何冊かの本が倫の足の上に落ちてきた。
「痛っ」

足元を見ながら歩いていた倫は、分厚い何冊かの本を抱えてた男に気づかずぶつかった。
「あ、すみませんっ。前が見えなくて……」
しゃがみ込み本を拾いながら倫に謝る男に倫もしゃがみ込み座り「あ、私の方こそ前を見ていなかったから……ごめんなさいっ、ごめんなさい」と何度も謝り一緒に本を拾い始める。

透き通る栗毛色の色素の薄い髪の毛がサラサラと色白い肩から流れ、華奢な腕で重い本を何冊か拾う
倫の姿を男は見つめた。
確か、この子、同じ学部の……椎名……んー？
綺麗な子だなぁ。
いつも廊下ですれ違うぐらいだからなんとなくしか思わなかったけど、こんな綺麗な子……だったんだ……。
男は俯き本を拾う倫の姿を見つめた。
「ごめんね、ありがとね」男は自分の鼻下まである高さの本を重そうに抱えるとニッコリと微笑んだ。
「重そうですね、半分持ちましょうか？」耳下で髪を押さえ倫はニッコリ微笑み訊く。
「えっ、いいよ」
「そうですか？」
「今から、図書館行くんでしょ？」
「あ、はい……」
彼女との間に優しい空気が流れる……男はそう感じる。
「じゃぁ……」男は倫に優しい顔で微笑みかけると
「はい」倫はお辞儀をし図書館に向かい歩きだした。
すれ違う倫の甘い香りと色素の薄い髪の毛が靡くのを横目で追う。
本当に綺麗な子だなぁ。
僕は、この子に一目惚れをした。

第11話ごめん

怒り心頭の倫。
そんな倫との約束を忘れ、蓮は図書館で朝から調べ物をしていた。
「おはよう、朝から調べ物？」
「……唯名」
「直樹達は？」
「あいつらが図書館で勉強ができるわけないだろう」
「ふふふ、そうだね」
唯名はテーブルの上にバックを置くと蓮の隣のイスに腰をおろし、本を見てはレポート用紙に何かを書く蓮の横顔を見つめた。
本を真っ直ぐ見ている蓮の顔が好き。
笑うと軽い感じの蓮も好きだけど、冷めたどことなく寂しそうな蓮の表情も、もっと好き……。
この図書館で偶然隣に座った女好きで軽いという噂とは違う竹下蓮の真っ直ぐ本を見ている瞳に私は惹かれた。
一年生の時の……ちょうどこの頃。
……晴れた雲ひとつ無い澄み渡る空の日。
「なんか、懐かしいね」
二人でこうしてるの。
「ん？」蓮の目線が本から自分に移ると、唯名はそっと蓮に微笑みかけた。
「初めて会った日もこんな感じだったね？」
「ああ、そうだね」
「蓮、覚えてる？」
「ん？」
「蓮、あまりに熱中しすぎて、消しゴム取ろうとして私の手掴んだ

の」
「ああ、覚えてるよ。唯名、真っ赤な顔して硬直してたもん」
「あは、私、真っ赤な顔して硬直してたの？」唯名は恥ずかしそうに笑うと、徐々に切なそうな顔へと表情を変化させる。
あの時、顔を真っ赤にして硬直したた唯名に俺は一目惚れをした。
「ああ」蓮はじっと切なそな表情を浮かばせ自分を見つめる唯名に優しく微笑みかけると、また本を見始めた。

「うーん」
一時間程して調べ物が終わった蓮は大きく背伸びをすると本を閉じ始めた。
「次の講義受ける？」
「あ、うん」
「じゃぁ、私も行こうかな？」
「うん」蓮は本を重ねバックにレポート用紙をしまおうとしたその時、真面目そうな男子学生が三人、
蓮と唯名が使っているテーブルの隣にバックと本を置き小声で何かを話し始めた。
……倫。今日、図書館に来るかな？」
倫？
苗字は聞き取れなかったが、名前は確かに倫と聞こえた。
一人の男が口にした名前に蓮はその男の顔を見る。
「来るんじゃないか？」
「可愛いよなぁ，椎名倫」
椎名倫。
「あの子可愛いけど、とっつきにくくねぇ？」
「そこがまたいいんじゃん。昨日さ、すっごい可愛いワンピース着てたんだよ」

「孝司、椎名倫にマジ惚れ？」
すっごい可愛いワンピース？
「蓮、行こう」
「あ、うん」
ワンピース？という言葉になにか胸にひっかかった感じがし、考え込む蓮。
「蓮？」
あっ！？
『明日、あのワンピース着て来いよ』『明日ね』駅での倫との会話と約束を思い出す。
「あ～、バカだ。俺～」自分の頭をポカッと叩きしゃがみ込む蓮に驚く唯名。
「ど、どうしたの？」
あー、あいつ怒ってるんだろうな？
蓮はガバッと立ち上がると「唯名、俺、次の講義パスッ！」本を持ったまま唯名を置いて走って行ってしまった。

蓮は、初めて入る人文学部の棟の教室を一つ一つ覗き込んで走った。
「椎名倫いる？」
「ん？」
「椎名倫って子いる？」
「えっ、いえ」
「そう、ありがとう」
法学部の蓮がここにいるコトとあの竹下蓮に話しかけられたと驚き喜ぶ女子学生達で人文学部の棟はザワザワし始める。
何処にいるんだよ～あいつ。
どこの教室を覗いてもいない倫。
「はぁ、はぁ……。ねぇ、森本、椎名おらん？」偶然見かけた高校

の同級生の森本佐奈に声をかけ
訊いてみる。
「あ、竹下くん。ちょっと待っててね。確か……」
「ああ、ごめん」
走ってきたからすごい汗。
「りーん。竹下くんが呼んでるよ」佐奈が蓮の名前を口に出したの
と同時にみんなは教室の隅で
里香と話してる倫を一斉に見る。
えっ、何、なに？
「倫、竹下くんとどうかしたの？」
「知らない」
な、なんで来るのー？もう、話すつもりもない、会うつもりもない
のに。
倫はむっとし、ちらっと蓮を見る。
なんだろう？
ドアにもたれ、自分を真っ直ぐ見て待っている蓮の所まで歩く倫。
「ありがとう、佐奈ちゃん」
「森本、ありがとうな」
「じゃぁね、ふふふ」
な、何？佐奈ちゃんの今の笑い。
「な、関係ないからね」
「がんばって」
二人はみんなの視線の中、教室のドアの前で黙ったまま突っ立って
いる。
みんなが見てる。イヤ～最近こんなのばっかり。
「ちょっと、来いよ」蓮は誰の視線も気にすることなく倫の手首を
掴み歩き出す。
「痛いっ！痛いでしょ、なんでこんなコトするの？」
蓮とは反対にこんな大勢の視線に慣れてない倫は自分の手首を引っ
張る手を思いっきり振り

払うと蓮を睨んだ。
もう、話さない。もう会わない……。って決めた。
こんないい加減で……こんな軽い男なんて……大っ……。
「ごめんっ、倫っ」
キラ……ィ。
えっ？
思わなかった。蓮くんの口から……こんな言葉が出るなんて思わなかった。
倫は目を丸め驚きポカンと口を開けたまま顔を上げる。
見上げて見た蓮の顔は汗まみれだった。
私に謝る為に、その言葉を言う為に蓮くん走ってきたの？
「……似合わない」
「は？」
「汗、あなたには似合わないよ」
蓮くんに似合わないよ、その汗。
「何それ？」
「だって似合わないんだもん」
「じゃぁ、似合わないコトしたから許してくれる？」蓮は顔を傾け悪戯っぽい表情でニッと笑う。
「ランチご馳走してくれる？」倫は頬をプーッと膨らませ、生意気そうな顔で蓮の顔を見ると優しく笑う蓮。
「お安い御用です。倫さま」
「じゃぁ、しょうがないから許してあげるよ」

第１２話この関係

六月に入ったある日。倫の父、良明がフランスから帰国した。
倫の母、玲の十七回忌の為。
倫の母は倫が四歳の頃、交通事故でこの世を去り、玲の死後、良明は幼い倫を連れフランスへ飛びたった。

パパは十七年経った今もママのコトが忘れられない……。
お墓参りを済ませた晩、良明は倫と両親に「日本の大学を辞めさせて、フランスに連れて帰りたい」と話す。
倫は十三歳で日本に帰国し、父方の祖父母の家で暮らしている。
後二年で卒業だし、なにより今は少しでも蓮の近くにいたいと思う。でも、『いつか嫁ぐ娘と少しでも一緒にいたい』と言う父。小さくして母親を失った娘を不憫に思い、母親の様に大切に育ててくれた父の娘と一緒にいたいという気持ちは痛いほど分かる。
倫は「少し考えさせて」と返事をした。

最近、雨ばかりで嫌な日が続く。
倫は誰もいない静まりかえった教室でイスに座ってひとり窓の外を眺めていた。
青々とした木々の葉っぱ達は気持ちよさそうにシャワーを浴びているように感じる……。

コンコン。
誰かが倫のいる教室のドアをノックした。
振り返ってみると教室の後ろのドアにもたれ腕を組み微笑みなが

ら蓮が立っていた。
倫もそっと蓮に微笑み返す。
「お前、やっぱ笑うと可愛いじゃん」ふたりきりのこんな場面、蓮はいつも口癖ののように言う。
「私だって話してる時は笑うでしょ〜？」倫は膨れっ面で言い返す。
「おっ、その顔もいい」
蓮はケラケラと軽い感じで笑うと倫の座る席の机の上に腰を下ろした。
「どうしたの？」
法学部の蓮がまた人文学部の棟にいるコトを不思議に思い訊く。
「里香ちゃんが図書館で、お前が元気ないって……」
「あー」
「どうした？」
蓮の口調が急に真面目になる。
「ん、うん……あのね……」
倫は四歳の頃、事故で母親を亡くしたコト、父と二人でのフランスの暮らし、いつも自分の気持ちを優先してくれた父親に大学を辞めてフランスに帰って来て欲しいと言われて迷っているコトを蓮に話す。
珍しく真剣に話を聞いてくれる蓮。
「そうか……それで、お前は本当はどうしたいの？」
「……ん」そう聞く蓮の顔を見つめ、倫は、今は蓮くんの傍にいたい。と心の中で呟く。
「俺の両親なんかさ、お互い別の家庭を持ってて俺を引き取ろうともしない。金とマンションさえ渡しとけばいいと思ってる……まぁ、そっちの方がすっきりしてて俺はいいけど……」
そんなコトを笑いながら淡々と話す蓮の顔が倫には少し寂しそう

に見える。
「蓮くん……」
初めて蓮の名前を小さく口に出す倫。
「もし、お前が大学を辞めたくないんなら……そんなに大事に思ってくれる親父さんなんだぜ。夏休みに一度フランスに帰って、自分の気持ちキチンと伝えてこいよ」
「そうだね。後、二年ぐらい待ってくれるよね？」
後、二年ぐらい蓮くんのいるここにいてもいいよね？
「ああ。大事にしろよ、親父さん」
「蓮くんに似合わない言葉……」
そう言いながらニコニコ微笑む倫。
「ひどっ……。人が真面目に聞いてやったのに……」
いじけて机から立ち上がる蓮。
「ごめん……ごめんね」
倫はいじける蓮を見て笑いながら蓮の服の袖をひっぱった。
「ふーんだ」
「蓮くーん」
「やっと名前で呼んだな」
何度も口にしている名前にようやく気づいた蓮は嬉しそうに笑い、照れながら口に手をあてる倫に
「よくできました」と髪の毛をぐしゃぐしゃと撫ぜた。
「もぉ、子供扱いしないでっ！」
「はは……」

こんな関係が今の二人にはとても心地いい。
友達以上恋人未満？
倫は蓮に大抵のコトはなんでも話せるようになる。
このままこんな関係が続くといいな……。そんな思いで、蓮が言うように，父、良明にキチンと自分の気持ちを伝える為、倫は夏休みにフランスへと飛んだ。

第１３話倫がいない

倫がフランスへ帰り、夏休みも終わって一週間が経とうとしている。
電車でも大学でも倫に会うコトがなく、お互いの携帯電話の番号を交換していなかった
蓮には倫と連絡の取りようがなかったので、倫の友達の里香に倫のコトを聞くと『いつ帰ってこれるか分からないからしばらくの間大学を休学する』と電話があったという。
蓮はその話を聞いて愕然とすると、倫はもう帰っては来ないんではないかという不安と寂しさにかられた。

朝の電車の中、カフェテリア、倫がいない退屈でたまらない毎日は長く感じる。
「蓮、最近元気ないな」
元気がなく図書館にこもり気味の蓮を珍しく智史が心配をする。
蓮は元々勉強が好きな方で、図書館で勉強しているコトがしばしあったがこもるということはなかった。
「ああ、そうだな」
「そー言えば最近椎名見ないな」
「フランスに帰ってるんだってよ」
「そーなんだ、蓮の奴、喧嘩相手がいないから寂しいのか？」
蓮は倫をよくからかい、それに対して倫がよく蓮にバックを振り回しているので智史から見て、倫は蓮のただの喧嘩相手に見えるらしい。
「さー」

直樹は歩きながら適当に返事をする。
「今度の人文学部の女達との合コンに蓮を絶対連れて来いって言われてるんだけど、蓮来
るかなぁ？」
「コンパは別じゃねぇの？」
「そうだよな。あいつがコンパに行かねぇなんて、天変地異の前触れか？ってぐらいなコ
トだもんな」
「あはは、そうだな」
こんな智史と直樹の会話は、天変地異の前触れ？かと思う予想しない言葉が、後ほど蓮
の口から返ってくるとはまだ知らない。

智史は相変わらず図書館でおとなしく真面目に読書をしている蓮を今夜のコンパに誘った。
「……今晩？人文学部の女とコンパ？」
蓮は人文学部という言葉にぴくっとすると顔を上げた。
「そう」
おっ、反応してやがる。智史はニコニコし始め、次に『待ってました』という言葉は確実
だなと確信する。
「……」
ところが蓮は、また俯き返事もせずに、ただ黙ったまま、また本を読み始めた。
「行くだろ？」
そんな蓮に気味が悪くなり（大袈裟？）智史はまた訊き返す。
「……んにゃ、行かない」
「は？」
な、何ぃ？
蓮の口からは智史と直樹が思いもしない言葉が発せられ、智史と

その隣で黙って立っていた
直樹はこの世の物ではないものを見たかのように目を見開き、智史と顔を見合わせた。
「やめとくよ」
「……」
今度は智史が黙り込み蓮の顔を不思議そうに見た。
「どうした？」
固まる智史を不思議に思い今度は蓮が訊く。
「て、天変地異の……が……」
目をテンにし小声で言う。
「は？」
天変地異？また訳の分からないのが始まったと蓮は呆れ、また本を読み始めると「蓮……お前……熱でもあるのかぁぁぁぁぁ～」と智史は突然大声を出し、蓮のおでこを触った。
「わぁあ～、なっ、何するっ」
「さ、智史落ち着けっ」
「これが落ち着けるかっ！わ、蓮が蓮がぁ……ぁ」
「ここは図書館だぞ！」
直樹が必死になって止めるにもかかわらず智史は周りの状況を気にするコトもなく半狂状態で蓮に抱きつく。
「蓮～、お前、お前～俺はそんな男に育てた覚えはないぞぉ……」
「育てたって……俺はお前に育てて……分かった、分かった。行くってば、行くっ。だから静かにしてくれ」
観念した蓮のその言葉を訊くと智史はぴたっと動きを止め、嬉しそうに笑い始める。
「はっ、はっ、は。それでこそ、蓮」
「俺って……」

俺ってどんな男なんだろう？蓮は呆れ深くため息をついた。

第１４話気づかされた想い

発狂する智史に観念し、蓮は合コンに付き合う羽目になる。
「遅れてごめん……」
「来た来た、蓮」
みんながセキについて少し経った頃、蓮はいつものように遅れて現れた。
蓮はいつも合コンに遅れて現れる。
そして、始まってまだみんながぎこちない時にその場を盛り上げるムードメーカーだったが、今日の蓮は違った。
遅れたコトを一言謝ると黙ってセキにつく。
そんな蓮の様子に智史達は顔を見合わせ首をかしげた。
「蓮、みんなもう頼んだからお前もなんか頼めよ」
「あ、うん」
蓮はメニューを直樹から手渡されると、また黙ってメニューのページをぺらぺらとめくり始めた。
「どうかしたの、竹下くん？」
そんないつもとは違う蓮を不思議に思った合コン相手の中のひとり、森本佐奈は声をかけた。
「何が？」
「妙に落ち着いてる」
佐奈は蓮の高校三年生の時の同級生で、当時蓮が付き合っていた彼女の親友だった。
だから蓮のコトは良く知っている。
「そう？」
冷めた口調で返す蓮。

「この間は一生懸命だったね」
冷めた口調で返す蓮に、佐奈はニヤリと笑いかけるとコップに手にかけビールを一気に飲み干した。
佐奈は昔からこんな感じだった。
童顔の可愛い顔とは反対に、仕草は男っぽく、時々なにか意味ありげな笑みを浮かべる。
「お前、相変わらずだな。この間ってなんだよ？」
佐奈が何のコトを言っているのか分からない蓮は鬱陶しそうにムッとすると訊き返した。
「今度は倫を狙ってるんだぁ？なかなか落ちないでしょ？あの子……」
佐奈はまたコップに並々とビールを注ぐとニヤリと笑った。
「はぁ？」
何が言いたいんだ？
いちいち突っかかるようなコトを言う佐奈を、蓮は瞬きひとつせず冷めた目で睨むと、盛り上がり始める合コンの中、蓮と佐奈の間だけは冷たい空気が流れた。

合コンが終わり、智史や佐奈の友達は二次会へ行こう！と盛り上がっている。
「蓮と佐奈はどうする？」
唯一盛り上がっていない二人に直樹が声をかけると「俺はパス」
「私もちょっと」と、二人は返事をした。
「そっか、いしし……」
この二人の妙なふいんきに智史はいやらしそうに笑いかける。
「……？」
「いやっ、気にしないで、いいよいいよ。お持ち帰りは蓮の定番だ

もんな。さ、みんな行こうぜ！」
完璧に誤解している智史は蓮の背中を押すとニヤリと手を振り直樹の肩に手をかけ歩き始めた。
「か、勘違い、してる……」
蓮はため息をつき、首を左右に振るとタバコに火をつけ、佐奈を気にするコトなく駅に向かい歩き始めた。
「ちょ、ちょっと待ってよ」
蓮はタバコを加えたまま、夜のひとけのない商店街のアーケード、駅までの道をスタスタと足早に歩き、佐奈は小走りに蓮の後をついて歩く。
しばらくして蓮はタバコを捨て小さくため息をつき立ち止まり「森本さ、俺に何か用があるわけ？」と佐奈の顔ギリギリに自分の顔を近づけた。
「今度は、倫が好きな女の身代わり？」
佐奈は自分の顔とほんの数十センチも離れていない蓮の顔に少しも動揺することなくまた意味ありげな笑みを浮かべると訊く。
「は……？」
佐奈が言ったコトに蓮は佐奈の顔の前から自分の顔を離すと目を大きくし佐奈を見た。
倫が好きな女の身代わり？
佐奈がこう言うのには理由がある……。
昔、蓮と佐奈はお互いに想い合っていた。
でも、蓮は両思いでも本命とは付き合わないというコトは学校内で有名な話だった。
佐奈の友達は、佐奈が蓮を好きだという気持ちを知ってて佐奈の代わりと承知でそんな蓮と

付き合い始めた。
倫が身代わり？
好きな女の代わり？
自分でも分かっているコトを、人に初めて言われた蓮は戸惑いを覚える。
黙ったまま考え立っている蓮を、佐奈は愛しそうに見つめた。
今、目の前には大好きな竹下くんがいる。
佐奈は、今でも蓮のコトが好き。
佐奈は蓮が今、金城唯名の代わりにしようと倫を落としていると思っていた。
なら、今度は……。
大学に入り、ずっと蓮と接することがなかった佐奈は倫のおかげでまた接点を持てたコトにあるコトを考え、智史に合コンを持ちかけた。
……倫がいないうちに。
もう、私への気持ちがなくても、私は……欲しい。
佐奈はドキドキする心臓の上、胸の谷間にぎゅっと握り締めた手をそっと置くと「金城さんの代わりでもいいから、倫じゃなく私と付き合おう？」とゆっくりと声を出した。
「は？」
突然の佐奈の告白に驚き佐奈の顔を見る蓮。
「きっと倫は落ちないから、私を金城さんの身代わりにすればいいよ」
自分でも驚くような大胆な言葉を発した佐奈は背伸びをすると、初めて知る積極的な佐奈に驚いている蓮にキスをした。
「……」
「森本？」
「別に金城唯名の代わりは倫じゃなくてもいいでしょ？」

倫は誰かの代わりなんかじゃない？
そう思って倫に近づいたコトなんか一度もない……。
ただ倫と一緒にいたいだけ。
自分でも気づかないうちに倫を探し隣にいた。
俺は……。
蓮はもう一度キスをしようとする佐奈の肩を手でそっと押し、離すと「ごめん。俺、用事あるから先帰るわ」とポケットからタバコを取り出し火をつけると、佐奈をその場に残し歩きだした。

蓮はタバコをくわえ、駅までの道を止まることなく歩く。
佐奈に言われたコトにショックを受ける蓮。
佐奈に言われたコトで自分の倫に対する気持ちに、はっきりと気づく。
自分は倫を恋愛対象に見ていたつもりはなかった。
気にはなっていたのは事実だけれど、ただ気の合う友達だと思っていた。
でも会いたくて会いたくて倫のいない毎日が退屈でたまらない……。
それは自分が倫を好きになっていたからだと……今、気づかされた。

駅につき改札を通り抜け、薄暗い駅のホームの一両目の車両が止まる位置で蓮は立ち止まった。
油の匂いが生暖かい風と共に蓮の前を通り過ぎていく。
俺は倫が愛しくてたまらない……。
俺は、倫を……愛して……いる。

第１５話おかしい自分

蓮は、マンションに帰ると、そのままベットに入り、ずっと、ずっと考えている。
六歳の頃、離婚した両親のコト。
好きになった女達のコト。
軽くて後腐れのない元カノ達のコト。
しつこい元カノのコト。
唯名のコト、もちろん倫のコト……。佐奈に言われるまで、倫に対して深く考えたコトなんてなかった。
俺はどうしてあの時、倫に声をかけたんだろう？
一番苦手なタイプなはずなのに……。
タイプじゃないけど可愛かったから？
唯名の代わりにしようと思った？でも、俺はなぜ、いつものように倫に軽く『付き合おう』と言わなかったんだろう？
あいつは落ちないって感じがしたから？
なぜかあいつといる居心地のいい空間を失いたくなかったから？
疑問文ばかりが浮かんでくる……。
俺は気づかないうちに倫を好きになってた？
昔から、好きな女ができても、そいつをいつか失うのが怖くて、友達以上に進展させれない自分のコトは分かっていた。
いつから倫を好きになっていたんだろう？
あ～～もぉ……わけワカンナイ。
どうしてこんなコト考えてるんだろう？俺って？？俺ってなんか馬鹿じゃん。今の俺ってカッコわりィ。

蓮はベットから降りると、タバコに火をつけ大きく息を吐いた。
当たり前だけど倫から連絡はない。
こっちに帰ってくるコト、もう諦めた倫？
里香ちゃんに倫の電話番号を聞けばいいことなのになぜか聞けない。
会いたくてたまらない。
タバコを灰皿にぎゅっと押し、まだ吸えるはずなのに火を消す。
倫、早く帰ってこい。
「会いたくてたまんねーよ」
こんな気持ち今まで好きになった女になんか沸いたことがない。
「俺、どうしたんだよ？」
こんな自分に物凄く戸惑う。
タバコの箱がいつの間にか空になっている。
「あれ？帰りに買ってきたばっかりだろう？」
今、消したばかりのタバコにまた手を伸ばす。
ローテーブルの上に置いてある灰皿には見事山のようなタバコの吸殻。
「あーうそ……」
最近、またタバコを吸う回数が増えたのは、会えない倫のコトばかり考えてるからだということにも気づく。
「馬鹿たれ」
蓮は、空になったタバコの箱をダストボックスへ投げ捨てた。

十月に入ると大学内は月末に行われる合同祭のため慌しくなる。
蓮達が通う大学は、毎年、創立記念祭と学園祭が同時に行われかなり壮大な行事になる。
いつもは智史達と合同祭に向けて盛り上がる蓮だったが、今回の蓮はまったく乗る気がなかった。
「蓮、お前はいつからそんな不健康男になったんだ？」

「は？」
智史は両手を広げ「最近お前の周りに女がいないっ！」とぼやく。
「あのなぁ……」
「俺、お前が森本と付き合うかと思ったのに……」
「なんでだよ」
「おー、俺もそう思った」
直樹も蓮と佐奈が付き合うと予想していた。
この間のコンパの後、二人で消えていったからには絶対何かある。
それに高校時代、蓮と佐奈は想い合っていた。こうくりゃ、百パーセント何かがあってもおかしくない……。
でも、予想外の結末（大袈裟？）に二人は驚いた。

『昨日、あれからどうだった？』智史。
『ん、何が？』蓮。
『いしし……とぼけんなよ。ほれ、森本……』
『あー、わけの分かんねぇコト言うから、置いて帰った』
『はぁ？』
『……』
『何、言われたん？』
『忘れた……』
『……』
唖然とする智史……。

「だってよ、お前、昔、森本のコト好きだっただろ？今は、唯名が本命なんだし、ぜってー手ぇ出してるかと思った」
確かに智史の言う通り。
自分でもそう思う。
今は唯名を好きであれ、倫を好きであれ、以前の自分なら絶対そ

うしてると思う。
「ぅーはぁぁ……」
蓮は深くため息をつく。
俺、絶対変……だ。
「お前、おかしいぞっ」
智史……お前には言われたくない……。
「さぁ、図書館行くかなぁ……」
「わっ、俺、鳥肌がっっ」
「うそ、行かねぇよ」
「ナンパに行こうぜ！蓮」
「嫌だ。勝手に行けや。俺は帰って寝る」
「この不健康男っ！」
智史はバックを握りしめいじけ始める。
「よし、じゃぁ、みんなで蓮んち行こうぜ」
直樹は蓮の肩に手をかけた。
「しゃぁねぇーな」
「よっしゃぁー」
ほんと俺、俺が俺じゃない。
倫は、まだフランスから帰ってこない。
でも、倫が帰ってきたら俺はどうするんだろう？
また、ちょっかいなんかかけて倫にきっとバックなんかでバッシッて殴られて……。
でも……。
ああ～、もう考えるのよそう。
「酒でも買っていかねぇ？」
「よし、きたぁ！」
「なんか俺たちって寂しくねぇ？」
「いいの、いいの」
今日はとりあえず何もかも考えずトコトン飲み明かしてやる

第１６話合同祭の夜

創立記念祭と学園祭の合同祭は、前夜祭と計二日間行われる。
合同祭で一番盛り上がるのが、最後の日の行われる『金城大学ミスコン』
蓮達が大学に入学してからは、言うまでもないけど二年連続唯名がナンバーワンだった。
今年もきっと金城唯名がナンバーワンだと誰もが思う。
コンテストの出場者は、十月の中旬頃に配布される推薦用紙によって推薦され、当日の朝、
大学内推薦された上位十位内の出場者の顔写真などがコンテスト会場に貼り出され、一般客、
学内生の投票によってナンバーワンが決定される。
もちろん蓮達は、配布された推薦用紙に唯名の名前を記入した。

「やっぱり、唯名は貼り出されてるな」
合同祭の当日、コンテスト会場に上位十名の顔写真とプロフィールが貼り出された。
「ま、今年も唯名の優勝が確実だろ？」
「そうだな」
蓮達はそんなことを言いながら出場者面々の写真とプロフィールを見ていく。
「あ……」
先を見ていた直樹の足が止まり、蓮は直樹の顔を見た。
「ん、どうした？」
「ほれ……」
直樹が指差す先を見ると、なんと倫の写真が貼り出されていた。
「……」
写真で見る久しぶりの倫の顔。

蓮はここに倫の写真が貼り出されているコトに驚くよりも、ずっと会いたかった倫の写真に
切なくなる。
……倫。
今にでも憎まれ口を叩かれそうな感じがする。
しばらく立ち止まって倫の写真を見つめる蓮の元に、写真を吟味しつつやっと二人の所に辿り着いた智史が倫の写真に気づくと指を差し驚きの声を上げた。
「あーぁ、椎名が貼り出されているぅ。蓮、蓮っ。見ろ見ろっ。すげー」
「……」
「初めてだよな？倫ちゃんが貼り出されんの」
意外だと思ったコトに動揺し興奮している智史とは違って落ち着いている二人。
「ああ……」
「蓮、お前推薦したの？」
「ん、いや。してない……」
あ……。
蓮は、図書館で倫のコトをいいと言っていた男の顔を思い出した。
「でもさ……」
興奮していた智史は平静を取り戻し、倫の写真をまじまじ見ると
「椎名って可愛いよな？」と
一言。
「そう、倫ちゃんって笑うと可愛いよな、蓮？」
「……」
『お前、笑った方が可愛いと思うよ』
本当ならば、倫の可愛さにみんなが気づいてくれたコトを嬉しいと思うはずなのに、蓮は少しも嬉しくなかった。

一緒にいるうちにどんどん笑顔になっていく倫。
『お前、笑った方が可愛いと思うよ』……なんて言うんじゃなかったと思う。
みんなに倫の可愛さを気づかれて、なぜだか分からないけど複雑な気持ちが湧いてきた。
倫を独り占めしたい……。
「そうか？どっから見ても無愛想女そのものだ」
「そんなコト言ってんと、また殴られるぞ！」
「いねーから、大丈夫だよ」
「まっ、そうだけど」
「行こうぜ」
そう、倫は今ここにいない。
蓮はバックからタバコを取り出しくわえると火をつけ歩き出した。

夜になると、みんな慌しくバタバタとコンテスト会場に集まりだす。
蓮達も会場へと駆けつけた。
会場は物凄い人だかりと熱気に、夏が戻ってきたんじゃないかと思うほど熱くなっていた。
夜なのに眩しいぐらい明るい会場。

「こんばんは～」
司会進行役の三年生の男子学生が現れると会場は一段とヒートアップする。
「さー、今年も盛り上がっちゃいましょう……ウダウダ話してると怒られちゃいますのでとっとと進行します」
司会者の学生の台詞にどっとする笑い声、軽やかな音楽と共に、貼り出されていた上位十名の出場者たちが名前を呼ばれると、一人ずつステージに上がり自己

紹介を済ませると発表まで
の緊張する時間を待つ。
　みんな結果は分かっているけど、この時間が楽しい。

「今年の、ミス金城大はっ……」
　いつものお決まりのドラムの音にざわめいていた会場内は一気に静まりみんなゴクンッと息
を飲む。
「金城唯名さんでーす」
　予想通りの結果に会場はまたざわめき始め「やっぱ、金城さんよねぇ」「だよな」と言う言
葉で会場は埋め尽くされる。
　みんなが認めるナンバーワンの唯名に、直樹達も、うん、うん。
と頷く。
「おめでとうございまぁーす」
　花束を渡されにっこり微笑む唯名。
「ありがとうございます。嬉しいです。みなさん、ありがとうございました」
「三連勝ですね」
「そう……ですね」
　唯名は慣れた口調で次々と質問に答えていく。
「ちなみに二位の方の椎名倫さんとは十票さだったんですが、椎名さんをご存知ですか？」
　司会者の言葉に唯名は驚いた表情を見せる。
「おい、マジかよ」
「すげーな、椎名」
　直樹と智史も顔を見合わせ驚き感心している。
「……」
　蓮は思いもしなかったコトに俯き、込み上げてくるどうしようもない複雑な気持ちをぐっ

とこらえた。
「そうなんですか？友達です」
「そうなんですかぁ。やっぱり類は友を呼ぶんですね。あ、話は変わってこの後はどうされます？」
「今夜、好きな人に告白しようと思ってます」
唯名は倫への気持ちでいっぱいな蓮の俯いた姿をステージの上から見つめる。
「おお～」
その唯名の堂々とした発言に会場内は驚き、またざわめき始め、司会者はあたふたと戸惑いだす。
「あわわわ、そ、そうなんですか？」
「はい」
ステージの上での唯名のとんでもない発言に「おい、蓮っ」直樹は俯く蓮の背中を押すが、
周りのざわめきも直樹の呼ぶ声も全く気になってない様子の蓮。
そんな蓮の顔を直樹は覗き込みまた声をかける。
「蓮？」
「あ、何？」
ボーと考え事をする蓮は切なそうな顔で直樹の顔を見た。
「もしかして、今の唯名の言葉聞いてなかった？」
「は？あ、うん」
「あいつ、今夜好きな奴に告白するんだってよ」
「は……？」
唯名が告白する？
誰に？
今はそんなコト、どうでもいい。
「では、がんばってください！！みんなで応援してまーす」
司会者の応援に「ありがとうございます」と笑顔でペコリとお辞

儀をし手を振る唯名。
「ミス金城ナンバーワンは、金城唯名さんでした。みなさん盛大な拍手をぉ」
ミスコンは幕を閉じた。

「おい、どうするんだよ蓮？」
「大丈夫か？」
「えっ、何が？」
他人事のように冷静な蓮に対し、シドロモドロしている直樹と智史。
「何がって……」
「……」
「断るのか、お前？」
「は？」
蓮は唯名の告白話のコトなんか上の空で、それが自分へだと言うコトもすっかり忘れている。
蓮が好きな女とは付き合えないコトを知る二人は、蓮と唯名のこの後の展開に不安を持つ。
まだ冷め切らない熱気に溢れた会場。
「よおっ、蓮」
「おう」
「がんばれよ」
唯名が蓮のコトを好きだというコトも、蓮が唯名を好きだったコトも、二人を知る生徒はみんな知っている。
「さっきからなんだよな」
「蓮、お前……」
何度かそんな応援言葉を不思議そうに交わしている中、蓮の携帯

電話の着信音が……鳴った。

第17話告白

蓮は、自分を呼ぶ携帯電話を開き、待ち受け画面の文字を見ると、唯名の文字を目にした。
「もしもし？」
『蓮？私……今、ちょっといいかな？』
「ああ……」
まだ熱気が冷めない会場の中、蓮だけは落ち着いた様子で電話を片手に持っている。
『今から講堂に来てくれる？』
「いいけど……？」
『待ってるから』
唯名は蓮を講堂に呼び出した。
「分かった、じゃぁ後で……」
電話をきったとたん、直樹と智史は「蓮、唯名かっ？」電話の相手が誰かを問いただす。
そんな二人に、蓮は表情をひとつも変化させることなくコクリと頷く。
「そ、そうか」
珍しくおとなしく納得する智史。
「俺、ちょっと行って来るから、先、帰ってて」
「お、おお」
「蓮……」
携帯電話をジーンズのポケットに突っ込み歩き出そうとした蓮を直樹が呼び止めた。
「何？」
振る返る蓮を心配そうな表情で見た直樹は「蓮、失うコトばかり考えるなよ。お前達は、お前の親とは違うんだ」と言う。

そんな直樹に蓮は微笑み「ああ、行って来るよ」と言葉を返す。
蓮は心配する直樹達をよそに意外と冷静だった。

イベント（ミスコン）会場を後にブースの人だかりを抜け、蓮は人ひとりいない芝生のカーペットに挟まれた講堂まで続く月明かりに照らされた薄暗い石畳の小道を歩く。
「あ、星がキレイじゃん」
夜空を見上げると星がキレイに瞬いている。
夜空を見上げるなんて子供の時以来だ。
「は、俺、何センチになってんの？ガラじゃねぇ……はは」

しばらく歩くと講堂は姿を現した。
創立以前から此処に植わっているという大木と大木の間の趣のある大きな重厚な扉を開けると、薄暗い静寂な講堂の中、舞台に向かって傾斜になっている席の中央の椅子に唯名は座っていた。
「蓮、突然呼び出してごめんね」
「大丈夫だよ」
微笑みながら立ち上がる唯名のもとに蓮はゆっくりと近づき、唯名の前で足を止めた。
「蓮」
蓮の顔を切なそうに見上げる唯名、そんな唯名を蓮も見る。
唯名の綺麗な瞳……桜色の頬。
好きだった唯名の表情……。
「……」
「蓮、好き……」
唯名は今まで口に出さなかった言葉を、ずっと自分を見つめる蓮

に告白するとそっとキ
スをした。
「……」
あ……。
蓮は、漸く直樹達が心配そうにしていたわけが分かった。
広い講堂の中、二人だけが……いる。
二年以上、ずーっと想い合っていた二人の初めてのキス。
本当は欲しくて、切なくて……ずっとこうしたいと思っていた……はずの……唯名とのキス。
なのに、蓮の頭の中には六歳の頃の自分と、大きなボストンバック一つだけを持ち、何も言わず自分に背中を向けて部屋を出て行こうとする母親の姿が浮かびあっがた。
思い出したくない……過去の記憶。
その記憶の中の、その母親の姿は、やがて、倫の姿へと変わっていく……。
……倫。
「……」
「蓮……私達、ずっとこのまま？」
二人の唇が離れて少し経った後、唯名は瞬きもしないで立っている蓮に訊いた。
その唯名の声に、母親であるはずの倫の後姿が部屋のドアをバタンと閉めた。
あ……。
「ねぇ、私達、ずっとこのまま？」
自分の前から……倫の姿が消えた……。
消えてしまった……。
蓮は、心の中で落胆し深く大きくため息をつく。
そして……「唯名……俺達、付き合おうか？」蓮は唯名にニッコ

リと微笑みかけると唯名
の頬にそっと手をあて、今度は蓮から唯名にキスをした。
倫……俺はやっぱり無理だ。
俺は、お前を俺の前から消したくない。
……倫。
「蓮、好きよ」
唯名は背伸びをし、蓮の肩に手を伸ばすと蓮を強く抱きしめる。
「ん……」
俺は、また本当の自分の気持ちを押し殺して、あんなに好きだった唯名を、今度は倫の代わりにしようとする。
森本……この前、お前に言われてはっきり気づかされたよ。
……俺はなんて臆病なんだろう……。
俺ってバカだ……。
でも、どうしても……どうしても、ダメ……なんだ。
唯名は蓮の肩からゆっくり両手を下ろすと、蓮のズボンのベルトに手をかける。
「蓮……」
唯名はとろんとした目で蓮を見つめた。
「唯……」
蓮はそんな唯名の服のボタンに手をかけた。
倫……。

第１８話会いたかった人

十一月になると、町や大学周辺の落葉樹は赤や黄色の艶やかな色彩に変化をしていく。
そんな頃、倫はフランスから帰国した。

「りーんっ、お帰りぃ～」
昨日、電話で約束した待ち合わせ場所で倫が待っていると里香が大声を上げて走ってきた。
「里香ちゃん……」
「もぉー、帰って来ないかと思ったよぉ」
里香は倫の鎖骨辺りをトントンと叩く。
「痛いよ、里香ちゃん。ごめん、ごめんね。はい、これ」
倫は、バックの中からお土産の香水を出し、里香に渡す。
「ありがとう。欲しかったんだぁ、これ」
「みんなは元気？」
倫は、蓮のコトを訊きたかったけど、蓮の名前を口にするコトができず遠まわしに訊く。
「うん、みんな元気よ」
「ふーん」
その中には、蓮くんも入っているのかな？
里香は嬉しそうに微笑み、貰った香水をバックの中にしまうと、何かを思い出したような表情を浮かべた。
「あ、そういえば、竹下くんと金城さん付き合ってるんだよ！合同祭の時、金城さんが告って……」
「え……」
唯名ちゃんと……付き合い始めたの？蓮くん……。

「そうそう。それと倫、あんた合同祭のミスコンで金城さんと十票さで準優勝したんだよ。すごいね、倫……」
倫は、蓮と唯名のコトを耳にすると、目の前が急に真っ暗になり、ぎゅっと締め付けられる胸と時差ボケの頭が少し痛み出し、色々話し出す嬉しそうな里香の話を聞く余裕がなくなった。
「そ、そうなんだ……」
「うん」
涙が溢れ出しそうになり倫はきゅっと唇をかみ締めた。
一番会いたくてたまらなかった、一番どうしてるか知りたかった人の、思ってもいなかったコトを耳にする。
帰って来なかった方がよかったのかな?……そう思う。
「里香ちゃん……私、やっぱ具合が悪いから帰るね」
「えっ?」
きっと、今、二人の姿を見てしまったら普通にはいられない。
きっと、私は泣いてしまう。
「大丈夫、倫?」
「うん、大丈夫」
「時差ボケは辛いよね。疲れかなぁ、一人で帰れる?」
「……」
急に黙りこみ俯く倫を、里香は心配そうに覗き込むと、倫の瞳に薄っすら浮かぶ涙を見つけた。
「倫……倫ってさ、前から気になったんだけど、もしかして?」
倫は、その先を言われないように里香の言葉を振り払うように「あ、違う。ごめんっ、帰る」と慌てて手を振り、溢れ出る涙を手で拭うと走り出した。

「あっ、倫っ……」

倫は、ひとり改札口前で立ちすくんでいた。
好き合っている二人が付き合うのは当然のコト。
きっと、こうなるコトは、心のどこかで思っていた。
蓮くんと唯名ちゃんのお似合いな姿を見てきている。
蓮くんは唯名ちゃんを好きで、唯名ちゃんは蓮くんを好きで……
だからこうなるコトは
必然的なコト。
分かってた。
でも、私は……。
私はどうしたらいいんだろう？
倫は小さくため息をつき、改札を通り抜けようとした。
すると駅のホームから小さな女の子が泣きながら倫の方へ歩いてきた。
「どうしたの？」
倫は泣く女の子に優しく微笑みかけ声をかけるとしゃがみ込んだ。
「ふぇ……」
「ママと離れちゃったの？」
小さな女の子はポロポロと涙を流しコクンと頷く。
「お姉ちゃんが一緒に、ママ探してあげるよ」
倫は、小さな女の子の頭を撫ぜ、抱き上げると、階段を一歩一歩ゆっくりと上がった。
階段を上りきり、倫は足を止め、小さな女の子の母親らしき人がいないかと辺りを見回す。
すると倫の目に見覚えのある姿が映った。
「……」
高い身長、相変わらずの茶色い髪の毛には、フランスに行く前と違って、少しパーマが

かかっていて、両手をジーンズのポケットに入れ少し寒そうに歩いている。
「あっ、ママぁ！」
小さな女の子は、母親を見つけ指差し嬉しそうにそう叫ぶ。
小さな女の子の母親は、倫に抱かれている我が子を見つけると、ホッとした様子で二人のもとへ駆けて来た。
その小さな女の子の声に振り向く周囲の中、蓮は倫の姿に気づいた。
夏休み前よりも少し伸びた髪の毛が風にふわりと揺れている写真ではない倫の姿を蓮の切なそうな瞳は見つめた。
「ありがとう、ありがとうございます。なんてお礼を言ったらいいか、なんてお礼をしたらいいか……」
小さな女の子の母親は、我が子を思いっきりぎゅっと抱きしめると、何度もお礼を言い、何度も頭を下げた。
「いえ、気にしないで下さい。よかったね」
「うん。お姉ちゃんありがとう」
倫とその親子は手を振り微笑み別れると、倫は視線を蓮に移した。

お互い見つめ合いながら立ち尽くす倫と蓮……。
進んでいた時間が夏休みの前に戻る……。

「よぉ、元気？……親父さん分かってくれたんだ」
少しして、安心した表情で蓮は倫に声をかけるとゆっくりと倫に向かって歩き出す。
「うん、元気。元気だよ。分かってくれたよ」
倫は、さっき里香に聞いた蓮と唯名のコトで落ち込んでいること

を隠すかように明るく
振舞う。
「あれ、何？もう、帰るの？」
そんな明るく振舞う倫とは対照的に、蓮は少しだけ微笑むと元気のない表情で倫に訊いた。
「あ、うん。なんだか身体がだるいし、頭が少し痛くて……まだ、時差ボケかな？」
「そっか……」
「……」
蓮は、気だるそうに首を傾け、冷めた瞳で通りすぎる電車を見送った。
「……俺も……帰ろう……かな？」
倫はそんな蓮の顔をずっと見つめた。
蓮くん……なんか雰囲気変わった？
彼女ができたから？
「電車が来るから、私、行くね」
「ああ……」
「じゃぁ、また……」
倫が俯き、蓮の横を通り過ぎようとした時「あ、待って……やっぱ、俺も帰る」
蓮は向きを変えた。
「……」

ベンチに座り、家に帰る電車を待つ二人は前のようには話せず、お互いぎこちなく違う方向を見ている。

「……来た」
電車はブレーキ音を鳴らしゆっくり止まる。
二人は口に出さなくても、当たり前のように一両目の真ん中のイ

スに座る。
久しぶりに二人で座る倫のお気に入りのセキ。
何も話さなくても、隣に座ってさえいれば落ち着く二人の空間。
電車の振動と線路の上を駆けていく音が心臓の鼓動のように聞こえる。
ホッとする。
他の誰にも感じるコトはない。この感じ……。
倫は、時折、蓮の横顔を見ては俯き、蓮も倫の横顔を見ては俯く。
でも、それはやがてなんとも言えない寂しい気持ちへと変わっていく……。
下車する駅までの時間、無言のまま電車に揺られ時間(とき)を過ごす二人。

第19話言えない言葉

長いようで短い電車の中での時間。
こうして二人で一緒に座っていられるのが、なぜかこの時間(とき)が最後のような気がした……。

駅に着き、二人は電車を降りる。
もう少し二人でいたい。
倫も蓮も、心の中ではそう思っていたが、口には出せない言葉を胸にしまい、電車の中同様、無言のまま改札を抜けた。
改札を出たら、二人の家は反対方向にある。
倫は足を止め、蓮の顔を見上げると「じゃぁ、私、こっちだから……」と、知っている蓮にわざわざ言う。
「ああ……」
やっときりだせた言葉にも続きはなく、倫は、笑いもしない冷めた蓮の瞳に少し泣き出しそうになった。
「じゃぁ……バイバイ」
「……」
泣きそうな表情でそっと微笑み、振り返り歩き出す倫。
そんな倫の手首を、蓮は突然グイッと力強く掴んだ。
「……っ、蓮くん、痛いっ！」
すごい力で倫の手首を握り締める蓮。
「……」
「痛いっ、離して……」
蓮は、痛がり離そうとする倫の手首を、表情一つ変えずぎゅっと掴んだまま自分のマンションの方へと歩き出した。
そんな強引な蓮の、会いたかった蓮の背中を倫は見つめた。
ずーっと会いたかった。
……会いたくてたまらなかった。

振り払えるはずの蓮の手を振り払わず倫は蓮に引っ張られるまま歩き出した。

マンションのロビーに着くと蓮は、倫の手首を掴んだままエレベーターに乗り込み、自分の部屋がある十階で降りた。
エレベーターを降りても蓮は倫の手首を離そうとはせず、そのまま玄関のドアを開けた蓮は玄関に入るやいなや何も言わず倫を壁に押しあてキスをした。
「……っ」
成り行きの突然の蓮の行動に、倫は戸惑い、蓮を押しのけ睨んだが、蓮はそんな倫にお構いなしに今度は倫の両手を掴み壁に押し当てて、また強引にキスをした。
どうしてこんなコトするの？
蓮の行動に戸惑う倫。
「イヤッ」抵抗し顔をそむけ、そしてゆっくり蓮の顔を見た倫は、息が荒い蓮のとても切なそうで泣きそうな表情を初めて目にする。
「蓮……くん？」
蓮は、不思議そうに自分の顔を見つめる倫に今度は優しくそっとキスをした。
ゆっくりと瞳を閉じる倫。
……好き。
蓮への気持ちが身体中から溢れてくる。
重なり合うくちびるとくちびるを離しては見つめ合い、またくちびるを合わせる二人。
もう、抑えられない……倫を抱いてしまいたい。
優しいキスは、次第にまた激しいキスへと変わり、二人はお互いを激しく求め合うと、着ていた服をはぎ取るようにしてベットの中へと沈み込んだ。
首筋を流れる蓮のくちびる。

ずっと、こうしたかったかもしれない……。
初めて触れる人の肌。
私は、蓮くんの腕の中にいるんだ。

触れるとこぼれる倫の微かな声。
ずっと、心の奥、どこかで倫に触れたいと思っていた。
今、倫は俺の腕の中にいる……。

愛してる。
声にしたいけど、声に出せない言葉が二人の身体いっぱい溢れてくる。
気を……失いそう……。

夕方になり、カーテンの隙間から差し込む夕陽がベットで寝ている二人を照らす。
「ん……ん」
夕陽の眩しさに蓮は目を覚ますと、ローテーブルの上に置いてある携帯電話に手を伸ばし携帯電話の中の時計を見る。
「四時か……」
隣では倫が気持ちよさそうにスースーと静かに寝息をたてて眠っている。
蓮は、携帯電話をそっと置き、眠っている倫の髪の毛をそっと撫ぜると悲しげに倫の寝顔を見つめた。
どうして倫を抱いてしまったんだろう？
失いたくない女(ひと)なのに……。
あんな倫の泣きそうな顔を見たらいてもたってもいられなかった。
後悔というものをする……。
どうして今までのように気持ちをセーブできなかったんだろう？
今まで持ったコトのない自分の感情と行動に蓮の頭の中はぐちゃぐ

ちゃに混乱していた。
普通の人間なら、ただ愛してるとか素直に言えるし受け入れられるのに、子供の頃負った傷が深かった蓮にはそれが難しく無理なコトだった。
蓮は、ベットから出るとジーンズを履き、タバコに火をつけると大きくため息をついた。
「んん……」倫が目を覚ました。
「蓮くん、タバコ吸うんだ」
よく一緒にいたけど、タバコを吸う蓮の姿は初めて見る。
「あ、うん」
「今、何時？」
「四時ちょっと過ぎ……」
「そっか……けっこう寝ちゃったんだ」
ぎこちない会話。
蓮は、タバコを吸い終わるとローテーブルの上に置いてあるリモコンのボタンを押しテレビをつけ、倫はベットから降り、シーツで身体を包みながら辺りに散らばった服を拾う。
「あ、ストッキング破けてる」
「……」
ちらっと倫を見、またテレビに目を向ける蓮。
そんな素っ気無い蓮の態度を見て、倫はあるコトを思い出した。
そう、蓮くんには唯名ちゃんがいたんだ。
もしかして、私とこうなったコト後悔してる？
胸が張り裂けそうになる……。
言われる前に自分から言おうかな？そうすればこの気持ちもこれ以上進まないで止められるかも……。
「蓮くん……」
「ん？」
「私……今日のコトは忘れるから、蓮くんも忘れてね」平然さを装いながら倫は口にした。

「……」
「ね……」
「……ごめ……」
倫を失ってしまう。
愛してる、言ってしまえばいいのに……。
いつものように、軽く好きだよって、言ってしまえばいいのに、軽く『好きだよ』とさえ言えない。
俺は、なんて臆病なんだろう？もう、倫を失うコトは分かってるのに……。
「……私、帰るね」
倫は、蓮の横顔を見つめ悲しそうに微笑むと部屋を後にする。

「畜生！」やり場のない怒りに蓮はリモコンを床に投げつけた。
前に進めない自分の臆病さと倫を傷つけたコトに深く落ち込み、自分に苛立つ。
どうして変われないんだよ。

エレベーターを待つ倫。
『……ごめ……』
蓮くんには唯名ちゃんがいる。
分かってる。分かってるけど、でも、謝って欲しくなんかなかった。
蓮の謝る声が、また少し痛み出した頭の中をこだまし、瞳から涙が溢れ出すと同時に倫はその場に泣き崩れた。
「ふぇ……」

「愛してる」一言、言ってしまえばいいのに……。
「愛してる」言ってしまいたい。

二人の気持ちが通じ合えたと思ったのに……。

「お腹が痛いよぉ……」

二人の身体には、温かいお互いの身体の一部分の感触と触れ合った肌の温もりが残っている。

第２０話キズ

幸せの時間から出てきた後は、深く傷つき臆病な自分を支配する後悔。

ある晩、蓮は夢を見ていた。

「ただいま〜」

大きなランドセルを背負った六歳の蓮が小学校から帰ってきた。

いつもは、玄関で笑顔のお母さんが蓮を抱きしめてくれるのだけれど、今日は違った。

「あれ？お母さんがいない……」

キッチン、バスルーム、トイレ、庭……。

「お母さん？」

蓮は、静まり返る家の中、もしかしたらお母さんは調子が悪くなって、寝室で寝ているんではないかと思い、二階に駆け上がると、静かにそっと寝室のドアを開けた。

カチャッ……。

クローゼットとクローゼットの間を通り抜けると大きなキングサイズのベットが置いてある。

「お母さん？」

「ん、はぁ……あっ……はぁ……」

ベットの上から聞いたことのないお母さんの荒い息使いとお父さんではない男の人が裸で何かをしている……。

ガバッ！！

夢の途中で蓮は目を覚まし起き上がった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」
すごい汗。
何なんだ？
ルームライトの薄暗い灯りと辺りを見回してホッとする。
なんだ、夢か？
「なんで？……今さら」
なんで、今さらこんな夢を見るのか分からない。
蓮はベットから降り、何かを飲もうと冷蔵庫を開けるが冷蔵庫の中は明るいオレンジの光だけ……。
「ちくしょう！何にもないっ」
蓮は、冷蔵庫をおもいっきり閉め、シャワーを浴び、コンビニエンスストアに向かった。

ずっと見ていなかった思い出したくもない過去の夢。
蓮は、ミネラルウォーター、缶ビールをカゴに放り込む。
「ねぇ、ねぇ？」
蓮は、レジに一人暇そうに立つアルバイトのショートカットの幼い顔の女の子に、いつもナンパする時のように声をかけた。
「えっ、はい？」
「バイト何時に終わる？」ニッコリ微笑む蓮。
ドキッ……。
ショートカットの幼い顔の女の子は自分に話かける蓮の顔をうっとり見とれた。

蓮は、誰が見てもカッコイイ……。
百八十五センチの高い身長に少しクールな顔、でも、笑うと人なつっこい、軽いけど憎めない口調……。

「十一時です」
ドキドキしながら震える手でレジを打つ女の子は蓮の質問に答える。
「また、その時間に来るね？」
「えっ？」
「ダメ？」
「あっ、いえ。大丈夫です」
「じゃぁ、また後でね」
蓮は、袋に品物を入れ終えた女の子のほっぺを軽くつまむと店を出た。

「新しい女か……」
蓮はタバコをくわえるとふっと笑う。

……あの日から大学へ行っていない。
もちろん倫に会ってないし、唯名や直樹からの電話も出ていない……。

何日経ったんだろう？
まだ、倫の肌の温もりは消えない。
好きな女を抱くと、自分の身体にそいつの肌の温もりをこんなにも刻みこんでしまうんだと初めて知る。
それを普通に幸せと感じられたらどんなにいいんだろう？
でも、蓮には、幸せの後にきたのは苦しさと後悔だった。
倫に会いたい……会いたいけど、会えない……矛盾する自分がいる。
毎日そう思う。
こんなに女(ひと)を好きになったコトはない。
でも、先に進めない。

二十三時。
ショートカットの幼い女の子がアルバイトを終える時間にコンビニエンスストアへ向かう
と女の子はまだ店の中にいる。
「忙しそ」
蓮は店の前でタバコを吸いながら女の子を待つ。

「ごめんなさい。急に忙しくなって……」
慌てて店の裏口から走ってきた女の子に、ダストボックスの灰皿にタバコを押し「大丈夫」
と微笑む蓮。
「あの、何処行くんですか？」
女の子は背の高い蓮を見上げた。
やっぱりカッコイイ……。
「何処行こうか？」
髪の毛の隙間から見える瞳、笑った顔を見ると胸がキュンとする。
なんて綺麗な瞳なんだろう？この瞳から目が離せない……。
蓮は自分を見つめる女の子の腰に手を回すと、女の子にキスをした。
「んっ……」
優しいキスは、次第に激しいキスと変わる。
蓮は倫を忘れたい一心で女の子に何度も激しいキスをする。
「んはぁ……ぁ」
そんな蓮の激しいキスに、女の子は息遣いが荒くなり足が立たなくなりそうな感じがし、蓮
にぎゅっとしがみつくように抱きついた。
「どうしたの？」
分かってて分からないフリをする意地悪な蓮の声と表情に、女の子は切なくとろけそうな瞳

で蓮を見上げる。
「……もう、私、ダメ……」
「ダメ、なの？」
そんな女の子の言葉に悪戯っぽい表情で笑う蓮。
「笑わないで下さい」
恥ずかしそうに膨れ、俯く女の子の顔を上げ、蓮はまたキスをする。
「行こうか？」
覗き込むように訊く蓮に女の子はしおらしく頷く。
「……うん」

その晩、蓮は、自分の本当の気持ちを他所に残し、ショートカットの幼い顔の女の子を抱く。

第２１話気持ち

蓮の心の中は複雑でぐちゃぐちゃだった。
何にも手につかない。
あの後も、あの女を何度か抱いた。
けど、倫の肌の温もりを忘れたくて抱いてる女に、ある日、倫を重ねているコトに気づき、
そんな自分に失望する。

「またね」
「ああ……」
いつもそう言って、ホテルの前で別れる。
携帯電話の番号も聞かず「名前聞かないの？」「ただヤルだけだから…」「それもいいかもね」名前も知らない女。
他の女を抱くと余計虚しくなる自分がいる……。

ある日、大学にも来ない、連絡もつかない蓮のコトが気になり直樹がマンションを訪ねてきた。
チャイムが鳴り、インターフォンのカメラで直樹だと確認し『はい……』蓮はインターフォンに出る。
『レーン。俺だけど……』
『今、開ける』……。

「蓮？」
直樹は玄関ドアを開け、覗き込むように部屋に上がる。
カチャッ。
ワンルームのドアを開けた直樹は、自分の目を疑った。

フローリングの上にはビールの空き缶があちらこちらに転がり、ローテーブルの灰皿にはタバコの吸殻で溢れていた。
「うわっ、ど、どうした？」
「……」
綺麗好きの蓮の部屋が見事にダストボックスの中のように見える。
その中で、蓮は、無精ひげを生やし生気のない表情で直樹を見た。
「ど……どうした？お前……」
あまりの光景に言葉を失いそうになる。
「あ、ん？」
「大学にも来ないし、電話にも出ないし……唯名が心配してたぞ」
足元に転がるビールを片付けながら心配そうに直樹は訊く。
蓮は、大きくため息をつくと「抱いちまった……」と息を吐くように呟いた。
「抱いちまった？」
「……」
「唯名を……か？」
蓮は、転がるビールの空き缶を足で転が、し唯名の名前に首を振った。
唯名じゃない？じゃぁ……。
直樹は、蓮がまた他の女を抱いて、後悔しているんだと勝手に思う。
「今までのお前知ってて付き合ってるんだから、ばれたって許してくれるだろう？でも、お前、唯名のコト本当に好きなんだろう？なら、こうなるまで後悔するんなら、もう好きでもない女抱くの止めろよ。じゃないと、いつか本当に唯名のコト失うコトになるぞ」
直樹は蓮に忠告する。
「……」
蓮は直樹の忠告に、無言のままタバコに火をつけ、また大きくた

め息をついた。
「止められないのか？お前……唯名が好きなんだろ？」
直樹は何も言わない蓮に同じコトをまた訊いてみる。
「……」
「蓮」
自分の名前を呼ぶ直樹に、蓮は、タバコの煙を天井にスゥーと吐くと、ぼーっと天井を見つめながらそっと口を開いた。
「違う……」
「は？」
直樹は何が違うか分からなかった。
「あいつ、可愛いけどタイプじゃなかったんだ……」
「……」
は、可愛いけどタイプじゃない？
「どっちかって言うと、つんっとしてる女って苦手で……。だけど、俺、あいつを初めて見て時から気になってしょうがなくて……」
蓮は独り言のように話し出すと、悲しそうにそっと微笑む。
つんっ？
直樹は首を傾げた。
つんっイコール無愛想？
前に蓮の口からそんな言葉を聞いたコトがあるような……気がする。
直樹は思い出そうと眉間にしわを寄せる。
あっ！？
無愛想イコール椎名？
直樹の回路はやっと倫へとたどり着く。
これで、蓮が唯名と付き合い始めたのも、この状況にも納得がいく。
「レ……ン。もしかして、それって倫ちゃんのコト？」

「直樹ぃ……こんな時ってどうしたらいい？」
「蓮」
「俺……好きな女抱いたの、はじめてなんだ……」
倫を想う切なそうで苦しそうな真剣な眼差しで、蓮は直樹に訊く。
こんな蓮をはじめて見る。
「蓮……なんて言っていいか分かんないけど、自分の気持ちに素直になれよ。もう、失うコトばかり考えんなよ」
何度か口にした言葉をまた口にする。
「……今までみたいに他の女を抱いてもダメなんだ……」
そう言うと蓮はフローリングに寝そべった。
「しっかりしろよぉ、お前。とにかく大学には顔出せよ」
「……」
蓮は、直樹の言葉に返事をしなかった。

「俺、帰るからな」
「……」
「蓮……」
直樹は、ため息をつくと部屋を後にした。

やっと、好きになった女と向き合え、受け入れられるようになったと思っていた蓮は、実はもっと
本当に好きな女を心に受け入れないように、前好きだった女と付き合い始めていた。
「どうすんだよ……蓮」
直樹は、また、ため息をつくと、蓮の住むマンションを見上げた。
いつになったら辛い過去から抜け出されるんだよ、蓮。

あの日から蓮くんに一度も会ってない……。

避けられてるのかな？
完璧に遊ばれちゃったのかな？
抱けるまでのゲームをしていたのかな？
恋愛に疎くても、そういうコトだけは考えられる。
蓮くんには唯名ちゃんがいる。
蓮くんはずっと唯名ちゃんが好きで、ずっと二人は両想いだと聞いていた里香ちゃんからの噂。
男の人は気持ちがなくても女を抱ける。
気持ちと身体は別だってコトも知ってる。
でも、自惚れかも知れないけど、あの時の蓮くんの切なそうに見えた顔は、見間違いじゃないような気がする。
そう思えば……少しは気が楽になるかも？
「忘れなきゃ……」
忘れないと……。
でも、何回シャワーを浴びても、どれだけのたくさんの泡で身体を洗っても、蓮くんへの気持ち、
蓮くんの肌の温もりは流れ落ちてはくれない……。
夜、ベットに入ると想うのは蓮くん。
胸がギュッと苦しくて、子宮の底から想いが溢れてくる。
涙が頬をつたう。
大好き……蓮くんの声、瞳、仕草……肌の温もり……大好き。
誰かこの想いかき消してくれるといいのに……。
蓮くん以上の人が今すぐに現れてくればいいのに……。
そんなコトを思う、苦しくて切ない毎日が続く。

朝、いつもと同じ電車。お気に入りのトクトウセキ。
隣には蓮くんじゃない違う人が座ってる。
倫は、また、いつものようにバックから本を取り出し、読みかけのページを開き、読む。

そして駅に着き、電車を降りると改札口を出て大学に向かう。
最近、この道を歩くと泣いてしまいそうになるのは気のせいではないかも……。
私の恋はどうなるんだろう

第２２話それぞれ

「椎名さん！」
大学へ向かう途中、誰かが倫を呼び止めた。
振り向いた倫の少し離れた所に見知らぬ男子学生が立っていた。
倫は、返事もしないで振り向いたまま、ただ男を見た。
男子学生は倫に走って駆け寄ると「僕のコト覚えてる？」と、夏前に図書館へ向かう渡り
廊下で自分とぶつかったコトなど、倫は覚えてはいないと思ったが、もしかして？と密な期
待を持って訊いてみた。
「……？」
思った通りの反応で倫は不思議そうに首を傾げる。
「あはは、一緒の学科なんだけど……」
一緒の学科という男子学生の言葉に倫は少し困惑した表情をした。
「あ、ごめんなさい。私……」
「大丈夫、大丈夫。謝らなくても……。一つ上だし。僕、合田孝司よろしくね」と、謝る倫に
男子学生は焦ったように手を横に振り自分の名前を告げると「あ、はい……」倫は返事をした。

優しそうな人……。倫は、孝司にそんな印象を抱き、しばらく孝司の顔を見つめていた。
「あ……」
あまりにもずっと自分を見つめる倫に、孝司は真っ赤な顔でそっと呟くように口に出した。
「好きだよ」
「えっ？」
思いもよらないあまりの唐突さに倫は驚き目を丸くする。

「ご、ごめん。言うつもりはなかったんだ……」
「あ……」
なんて言っていいのか分からない。
「ごめん。椎名さんがあまりにも見つめてくるもんだから、つい……。ほんとにごめん」
孝司は申し訳なさそうに深ぶかく何度も頭を下げた。
そんな孝司の必死に謝る態度を見て微笑む倫。
「大丈夫ですから、そんなに何度も頭を下げないで下さい。ちょっとびっくりしただけだから……」
「ほんと？」
その言葉に孝司は嬉しそうな顔で倫を見る。
なんかこの人面白い……この人……すごく温かい……。
あまりにもニコニコ笑う微笑む孝司に倫もニッコリと微笑み返した。

その頃、蓮は、大学の図書館で二週間の授業の遅れを取り戻す為、直樹と勉強をしていた。
「あーあ。お前は二週間サボってもすぐに俺を追い越していくんだな……」
直樹がぼやきため息をつく。
「ここの差ね」
そんなぼやく直樹に蓮はニヤッと笑いながら自分の頭を指差す。
「来いって言うんじゃなかったぁ～」
「何それぇ？」
直樹は元に蓮に戻ったコトにホッとし「やっと、元に戻ったな」と安心の笑みを浮かべた。
「ごめん、もう大丈夫だから……」
蓮は俯き、直樹に心配をかけたことを謝った。
「……唯名……心配してたぞ」

「ああ……」

まだ、何もかも整理ができたわけでもない。

今までのままでいくのか、今までの自分の殻を破れるか……蓮にはまだその勇気がつかないし選択できない。

でも、倫と唯名に対してずっとこのままではいられない、いてはいけないんだとは分かる。

倫と孝司は大学内を歩いていた。

「今から、授業？」

「いいえ、今から図書館に……」

「そうなんだ。僕も今から図書館に探し物しに行くとこだったんだ。もしよかったら一緒に行ってもいい？」

「はい」

倫はニッコリと微笑んだ。

断る理由はなかった。孝司とは同じフランス語学科でもあり、共通の話題があったから……。

二人は図書館へ向かう。

「此処にしようか？」

孝司は、窓側の日当たりの良い席を見つけるとバックを置く。

「はい……」

倫もバックを置いて椅子に座ろうとする。

「いい秋晴れだね」

「ほんと今日はいい天気ですね……」

話しながら座りかけ顔を上げた時、孝司の後ろの席の向かい合わせの席に蓮がいるのを倫は見

つけた。
「……」
顔が急に強張り、目を見開いたまま身動きがとれずにいる倫。
「椎名さん？」
そんな倫を孝司が不思議そうに声をかける。
その孝司の呼んだ名に直樹が振り向き、本を読んでいた蓮も顔を上げる。
ドクンッ……ドクン……心臓の音が耳についたように大きく鳴り始めると、その心臓の音と鼓動が普通には呼吸できないぐらい倫を苦しめた。
鋭い蓮の眼差しが倫をずっと見つめる。
あの時の、二人が頭の中をよぎる……。
苦しい……。
呼吸が苦しくなり、立っているコトができなくなった倫は一点を見つめたまま、そっと椅子に腰をかけると、ふと、蓮から目線を逸らし俯く。
孝司は何があったのか分からず、さきほどまで倫が見ていたであろう目線の先を見てみた。
そこには、冷めた目つきの男が倫をずっと見ている。
あいつ、タケシタレン……。
孝司は蓮を知っていた。もちろん金城唯名と付き合っているコトも……。

どうしたらいいのか分からない倫。
蓮もどうしたらいいか分からずに、ただ、ただ、睨むように倫を見つめている。

どうしよう……。
しばらくして、いてもたってもいられなくなった倫はテーブルの上に置いていたバックを握るし

めるとバッと立ち上がり席を離れた。
ガタッ！
「椎名さんっ！」
孝司が、倫を追いかけようと椅子から立ち上がった、その時、倫を追いかけようとした蓮が孝司の横を通り過ぎようとした。
「おいっ」
孝司は自分の横を通り過ぎる蓮の腕をギュッと掴んだ。
「っ！？」
蓮は自分の腕をおもいっきり掴む孝司の顔をキッと睨むと、孝司の手を払いのけ倫の後を追った。
その場に立ち尽くす孝司。

会いたかった……。会いたくて死にそうだった。
でもどうしたらいいのか分からなかった……だからその場から逃げた。
溢れ出す涙。
何もなかったように振舞えばいいの？
そんなコト私にはできない。
倫は走りつづけた。

「りんっ」
倫に追いつきそうな蓮が、倫の名前を呼んだ。
「……」
自分の名前を呼ぶ蓮の声に、倫は止まろうとはせず、講堂までの石畳の細い小道を走り続ける。
「待てよっ、倫っ！」
倫に追いついた蓮は、倫の肩を掴み、二人は芝生の上に倒れこんだ。
「ふぅっ…っ」

「はぁ…はぁ…」
大きく呼吸する蓮。
倫は泣きながらゆっくりと起き上がった。
「倫、ごめん……ほんとうにごめん……」
小刻みに揺れる倫の背中を見つめながら何度も謝る蓮。
倫は、何度も謝る蓮にコクリを頷くと、蓮の顔を見た。
　真っ赤な倫の瞳。
蓮は切なそうな瞳で倫を見つめるとゆっくりと起き上がった。
倫に会いたくてたまらなかった。でも、会えなかった。
ココロの中では二人は同じ気持ち。
蓮は久しぶりに見る倫の顔を見つめる。
薄い桜色の倫のくちびる。
少しずつ、すこしずつ蓮は倫に近づいた。
キス……したい。
倫に触れたい。
蓮のくちびるが徐々に近づき、倫がそっと目を瞑ろうとした瞬間
「蓮？」二人の後ろから
唯名が蓮を呼んだ。
「あ……」
二人はハッとし、慌てて顔を離すと同時に唯名の顔を見た。
「こんな所で何してるの？」
唯名は二人がキスをしようとしているコトに気づいていたがわざと訊いてみた。
「あ……」
俯く二人。
しばらくの居心地が悪い沈黙が続く。
「あ、わ、私、先輩待たしてた。ごめん。先、行くね」
この沈黙に耐え切れず倫は慌てだし立ち上がる。
「あ、ああ……そう？」

蓮はそんな倫を見上げた。
「うん、じゃぁ……。唯名ちゃん、またね」
倫は唯名への後ろめたさに唯名の顔を見ず立ち去った。

気づいただろうな？
泣いた私の顔。
もしかしたら私の蓮くんへのこの気持ちも……。
私、何てコトしちゃったんだろう？唯名に会ったら、後悔がドッと押し寄せてきた。
蓮くんは唯名ちゃんの彼氏。
止めないといけない気持ち。
涙が溢れて前が見えない。
「ふぇっ……」
倫は立ち止まり泣いた。
私、どうしたらいいんだろう？

「椎名さん？」
立ち止まり泣いている倫を孝司が見つけそっと声をかけ近づく。
「先輩」
「……大丈夫？」
「……」
「椎名……」
倫は心配そうに自分を見る孝司の胸に寄りかかり「今だけ、今だけごめんなさい」と謝りながら孝司の胸で泣いた。
そんな倫を孝司はより一層愛しく想う。

蓮はタバコを吸い俯きながら唯名と歩いていた。
「私、別れないから……」
唯名はきっぱりと蓮に言う。

「……」
蓮は顔を上げ、タバコを右手に持つと切なそうに唯名の顔を見た。
こんな蓮の表情を初めて見る。
そんな蓮に、倫ちゃんへの気持ちはいつもとは違うんだと気づく。
どうして？あなたは私を好きなのよ。
蓮に問い詰めたかった。
ずっと想い合っていた私達なのに……何も言わない蓮に腹が立つ。
ただ別れない。別れたくない。唯名はココロからそう思う。
私は、蓮を手放したくはない。
どれだけ二人が想い合っていても。
私は蓮を愛してる。

第２３話この人の手を…

どうして苦しいんだろう……。
人を想うってどうしてこんなに苦しいんだろう？
この寒い日、少しでも暖かくなるお日様のように、誰か私のココロを暖めてくれないかな？
倫と蓮は不自然なほど視線も合わせず近づきもせず日々を送っている。
あれほど仲が良かったのに挨拶すらしなくなった二人に、周りは何があったか気にはなったが
里香ですらそのコトを口に出して聞こうとはしなかった。
でも、二人の気持ちには誰もが気づいている。

季節はもうあと少しで十二月になろうとしている。
「椎名さん」孝司はあれからよく倫を見かけると必ず話しかけてくる。
「先輩」
どうしようもない蓮への苦しい気持ちを抱えてる中、声をかけてくれる孝司が倫には救いだったりする。
いつも孝司の顔を見てホッと癒され、ニッコリ微笑む倫。
「あの……」今日はいつもと違って、孝司は何か言いたげに珍しくモゾモゾしている。
「はい？」おとなしそうな顔とは違っていつも意外と積極的な孝司が、口を開けたり閉じたりしているのを見て、倫はどうしたんだろう？と思い首を傾げる。
「ぼ、僕と……」
「僕と？」
「僕と……」
「僕と？」何度か言っては言葉を詰まらせ、先に進まない孝司の言

葉を復唱する倫。
孝司は息を大きく吸い、吐いてはまた吸うと、おもいっきり「僕と付き合ってくださいっ！！」と周りにも聞こえる物凄い大きな声で倫に告白をした。
「！？」
この前と同様、いきなりの告白に倫は大きな目をさらに大きく見開いて驚き、頭の中が一瞬空っぽになる。
「あ、あ……」孝司はどうしようとシドロモドロするが、すぐに真剣な表情へと変えていく。
真剣に自分を見つめる孝司に対し簡単に軽く返事をしてはいけないと倫は思う。
倫は小さく一呼吸すると「……あの、気づいてると思うんですけど、私、好きな人がいます」里香にもまだ口にはしていない言葉をゆっくりと吐く。
「知ってるよ」あっさりと答える孝司。
「……」
「それでもいいよ。だって彼には彼女がいるんでしょ？」
倫は小さく頷く。
「なら、この僕と付き合って少しずつでいいから彼のコトを忘れて、少しずつ僕のコトを好きになってくれればいい……」
孝司は、倫を優しく包むような声と表情で話す。
倫は優しく微笑む孝司を見た。
少しずつ蓮くんのコトを忘れて、少しずつ先輩のコトを……好きになればいい……？
暖かそうな目……。この人なら……この人なら、きっと……。蓮くんのコトを忘れさせてくれる……？
倫はコクリと頷いた。
「ほっ、ほんとっ？やったぁ～！」頷いた倫に、おもわず我を忘れぎゅっと倫を抱きしめる。
「せ、先輩。人が見てる……」真っ赤な顔で恥ずかしそうに言う倫

を見て、孝司は辺りを見回すと、他の学生達が二人を見て笑っている。
「ご、ごめん」ぱっと倫を離し、恥ずかしそうに赤面し照れ笑いをしながら頭を掻く孝司。
「い、いえ。先輩ってほんと面白いですね」そんな孝司を見て癒される倫。
「行こ」
「……」孝司は倫の手を優しく握りしめると歩き出した。

孝司と蓮は正反対。
ごく普通の真面目な優しい青年といった感じ。
将来はアメリカに渡って、何か自分に合った仕事を見つけたいという夢を持っている。
倫も大学を卒業したら、父のいるフランスへ帰りフランスで仕事を見つけて生活していくつもり。
そういうコトでは、倫と孝司は共通するところがある。
自分の手を優しくしっかりと握り締め、引っ張り歩く孝司の手……。
倫は孝司の背中を見つめる。
この人をどこまで好きになれるだろう？
この人を好きになれたら、きっと……この苦しくて辛い想いは、いつかいい思い出になる……。
私は、この人の手を……。
今、どこにも行き場のない気持ちを抱える倫にとって孝司は救世主のような存在だった。

第２４話人の彼女

大胆告白。
孝司の倫への白昼堂々大胆告白の噂は大学中に流れる。
もちろんそれは当然蓮の耳にも入る。
「蓮、お前本当にいいのか？」直樹は唯名がいない時を見計らって蓮に訊く。
「何が？」直樹が、さっき聞いた倫とあの男子学生のコトを言っているのを蓮は分かっているが、何のコトだ？という表情をし訊き返す。
「何がって、椎名のコトだよ。倫ちゃんっ」蓮に対して歯がゆいと思う直樹は倫の名前をわざと強調し大きな声で口にする。
「……」

倫の名前を聞くと胸が痛くなる。
あの時、その場を立ち去ろうとする倫を見て思わず追いかけた。
真っ赤な目をして泣く倫を物凄く愛しく想い、キスをして抱きしめたくなった。
ココロの中は倫への気持ちで溢れているのに、まだ先に進めない自分をもどかしいと思う。
「お前達見てると……歯がゆいよ」
不器用すぎる二人。
「直樹？」
「お前見てるとほんと辛いよ……」直樹は蓮の顔を見て悲しそうな表情で言う。
「ごめん……」
「どんな形であれ、俺はお前が本当に好きになった女をやっと受け入れられるようになったと思って嬉しかったんだ」
好きな女を抱けるようになれただけでも本当に良かったと思った。

「直樹……」
「もう、他の女なんかじゃ倫ちゃんの代わりにはならないんだろう？」蓮は切なそうな顔で直樹の目を真っ直ぐ見ると正直にコクリと頷く。
「だったら……」
だったら……と言う直樹の言葉の先をさえぎるように蓮は首を横に振ると「俺、唯名と待ち合わせしてるから」とだけ口にした。

＊　＊　＊

図書館でカードを出している時、蓮と会った唯名は嬉しそうに笑みを浮かべると蓮の腕に自分の腕を絡ませた。
「蓮も今来たの？」いつもと違って本当に嬉しそうにニコニコしている。
「あ、うん。どうした、ニコニコして？」最近あまりにもココロから楽しそうに笑ってる唯名に蓮は訊く。
「ん？」唯名は蓮の質問に即答するコトはなく、空いているテーブルに荷物を置き椅子に腰をかけ、隣の席に座った蓮の横顔を見ると今度は蓮に質問をし返した。
「蓮、倫ちゃんのコト知ってる？」
唯名は倫のコトを訊いた。
もちろん知っているだろうと思って訊いてみる。
「……」
蓮は、レポート用紙をバックから出し唯名の質問に耳を傾けず、ただ黙ったまま何かを書き始める。
「倫ちゃん、同じ学部で一コ上の合田（ゴウダ）孝司と付き合い始めたんだって」
（ゴウダ　タカシ）
その名前を聞く度に図書館で自分の腕を掴んだ男子学生の顔が鮮明に浮かんでくる。

蓮は冷めた低い声で顔も上げずに「ふーん。そうなんだ……」とあまり気にも止めていないような口調で一応返事をする。
そんな蓮に唯名は「今度、四人で一緒に映画でも行かない？」と誘う。
「は？」蓮はレポート用紙上を動く手を止め冷めた目で唯名を見ると、唯名はニッコリと蓮に微笑み返した。

＊　＊　＊

大学の帰り。
電車が通り過ぎるとサァーと吹き通る冷たい風。
蓮がタバコを吸いながらプラットホームで一人立っていると、倫が孝司と楽しそうに話しながら階段を上がって来た。
蓮は前髪の隙間から楽しそうに笑う倫を見つめる。
楽しそうな倫の顔。最近、倫のあんな楽しそうな顔を見ていない。
「はぁ……」蓮はタバコを手に取ると視線を線路に下ろした。
たまらない。ココロが壊れそう……。
ーいつか失うなら友達のままがいい……。いつもそう思ってきた。
今もそう思っている？
でも、倫に出会ってそれは少しずつ少しずつだけど変わっていく。
「もう、遅いかな……」蓮はそう呟き、辛そうに微笑んだ。

孝司は倫と蓮が降りる一つ前の駅で電車を降りる。
孝司が見えている間はニッコリ手を振り、孝司が見えなくなると倫は辛そうな表情で深くため息をつき、俯く。

違う場所。
電車に揺られる倫と蓮。
そして二人は俯いたまま電車を降りる。

会いたい。
蓮くんの顔が見たい。
遠くでいいから、今、どうしても蓮くんの顔が見たい……。
倫はこの衝動に堪えきれず立ち止まり、苦しい胸を押さえその場に座り込んだ。

電車を降りてすぐ蓮はまたタバコに火をつけふかしながら顔を上げると、歩く人込みの中、座り込む倫の姿を見つけた。
蓮は倫に近づき右足で倫のお尻をそっと蹴った。
「邪魔だよ」
「……？」
倫は振り向いて自分を蹴った人の顔を見上げると「そんなトコで座ってんなよ」と蓮は悪戯する悪ガキのような笑顔でニヤッとした。
久しぶりに見る悪ガキのような蓮の笑顔を倫は一瞬睨むと微笑みながらゆっくりと立ち上がった。
「痛い～っ」
「お前、笑った方が可愛いよ」そう笑いながら前髪から覗く蓮の綺麗な瞳。
冗談なんだよね？
いつものように軽い冗談なんだよね？
……でも、なんか本心で言ってくれてるような気がする。
蓮はタバコの火を消し、携帯電話の時計で時間を見ると「今からメシ食いに行かねぇ？」と倫を誘う。
倫もバックから携帯電話を取り出し時間を見る。
「あ、もう六時なんだ」
「メシ食いに行くぐらい大丈夫だろ？」
倫は蓮の『大丈夫だろ？』の意味が分からずキョトンとした顔で首を傾げる。
「あー、彼氏にね」

倫の顔が強張り引きつる。
「知って、たんだ……」
「だってすごい噂じゃん！良かったな。優しそうな彼氏で……」
平然さを装いながら笑う蓮に「そうだね。良かった。うん、良かったよ……」と笑顔を作りムキになって倫は言う。
「……」
「……」
だけど二人の表情はやがて暗い表情へと変わっていき、気持ちとは正反対の二人の言葉がしばらくの沈黙を生む。
今、二人何かを口にしてしまえばこの苦しさと辛さが消えてしまうのに……。
二人にはそれが口にできない。
ホームを行き交う人の足音と通り過ぎていく電車の音がなぜか虚しく聞こえる。

＊　＊　＊

二人は、駅近くの人気のあるパスタの店で夕食を取るコトにした。
「この店、何回か里香ちゃんと来たんだ。どれもみんな美味しいんだよ」
嬉しそうに話す倫を見て暖かい気持ちになる。
「そうなんだ」
倫はメニューを見ながら楽しそうに話をする。
それを黙って聞く蓮。
幸せな時間。
少し話し込んでしまった思った倫はただ黙って話を聞きながらメニューを見ている蓮が退屈そうに感じると思い、話を止め「あ、ごめん。注文しなきゃね」と謝った。
「どうして謝るの？」そんな倫に優しい声で聞く蓮。
「あ……うん」話すのを止め蓮くんの顔を見たら、急に目の前にい

る蓮くんに意識してしまった。
初めての二人だけの食事。
いつも里香ちゃんや直樹くんとか……必ず誰かが隣にいた。
「俺、カルボナーラ。倫は？」
「私も……」
「はい、かしこまりました」
蓮はウエイトレスにメニューを渡し水を飲むとテーブルの上にタバコを置きタバコに火をつける。
蓮くんの仕草一つ一つにドキドキする。
倫はドキドキしながらタバコを吸う蓮を見ていた。
「なんか、お前変わったな」
「えっ？」
前ならきっとこんな場所でタバコ吸うなんてサイテーだよ。とか絶対に言うはずの倫。
「なんか、柔らかくなったっていうか……」
「え……」
表情とか、仕草とか……。
まじまじと自分を見つめる蓮に倫は恥ずかしくなり顔を真っ赤にし俯く。
蓮はタバコの煙が目にしみたのか目を細め窓の外をじっと見つめた。
窓の外の街路樹は白熱電球の暖かな光で満ち溢れている。
「もう、十二月だな」
蓮の言葉に顔を上げ、蓮の見ている窓の外の街路樹を倫も見つめる。
「うん。イルミネーション綺麗だね」
「ああ」
クリスマス一緒に過ごせたらいいね。
倫は街路樹を見ながら口には出せない言葉をココロの中で蓮に言ってみた。
蓮はその言葉が聞こえたかのように視線を街路樹から倫に変えると窓の外を見つめている倫の横顔を見つめた。

第２５話出遭った小悪魔

十二月に入るとやたらカップルが増えるような気がする。
倫と蓮は相変わらず大学内では話しかけるコトも目も合わせるコトもしない。

ある日、蓮が一人で大学内を歩いていると
「レーン、いたぁ～」智史が困った顔で走ってきた。

「何だよ」

また何の騒動だよという感じで返事をする蓮。

「今日の合コン来てくんね？メンツ集まんなくてよぉ」

「えー、嫌だよぉ」

そんな気分じゃない。

「唯名に内緒でさ。なっ、なっ」

智史は必死で蓮を説得するが「パス。俺、あいつ怖いもん」蓮は手を振り歩き出す。

「頼むっうぅ！お前がくれば盛り上がるし……」

涙目で頼む智史。

そんな顔されても……。

「もぉ、仕方ねえな……バレたら責任取れよ、お前」

「さすがっ、蓮！」

智史達と合コンする待ち合わせの居酒屋に蓮はいつものように少し遅れて行った。
ドアを開け、店内の客席を見回し智史達を探す。

「おーい、蓮っ！こっち、こっちぃ～」

智史が蓮を見つけ大きく手招きをする。
あーもうすでに出来あがってんな、あいつ。
相変わらずのテンションの高い智史。

「おそい～」

すでに盛り上がっている四人の合コン相手が口を揃え蓮に言う。

「ごめん、ごめん」

謝り空いている座布団に座ろうとしたその時、蓮は四人の中の一人の女と目が合った。

ショートカットの幼い顔の女……。
長身で、少しクールな顔……。
……ホテルの前で別れる二人の姿。

「あ……」

声を揃える二人。

「何、どうしたのまみ？」

「何、二人知り合い？」

「なにぃ？」

口を開けたまま見つめあう二人にみんなが問い詰めると蓮とまみは頷いた。

「そういうコトならお二人さんは隣で……」

いらん気を利かせ、蓮をまみの隣に座らせようとする合コン相手と一緒に

「え、あ、いいよ」と気まずそうな表情を浮かべ困惑する蓮の肩を、無理矢理智史は押した。

蓮とは違って再会を嬉しそうに「偶然ってあるんですね」と言うまみに

「あ、そうだね」冷めた低い声で返す蓮。

「今日は、いつもとフインキが違いますね」

ビールグラスを片手にまみはニッコリと嬉しそうに微笑んだ。

「そう？」

蓮は気まずかった。

「この前はなんか切なそうだったから彼女と別れたのかな？と思った」

「……」

蓮はまみに言葉にグラスのビールを一気に飲み干し、
冷めた目でまみを睨むと不機嫌そうに「ごめん、智史。やっぱ俺帰るわ」と
五千円札をテーブルの上に置いて立ち上がった。

「えっ、蓮？」

みんなは蓮を見上げる。

「悪いな……」

あまりにも不機嫌そうな蓮を止めることができず
「あ、こっちこそ無理強いしてごめんな」と智史は謝ると
蓮は首を振り「じゃぁ、お先に……」と店を出て行った。

何が起こったか分からないみんなは一斉にまみを見ると、
今度はまみが「ごめんっ！私も帰るぅ！」と
自分が何かいけないコトを言ったんだろうか？と気になり慌てて蓮の後を追って店を出た。

「な、何が……どうしたの？」

「さぁ……」

みんなはそんな二人に呆気に取られしばらく放心状態に落ちた。

まみは店を出ると蓮の姿を探し走って蓮を追いかけた。

「あのっ！」
白い息を何度か吐きまみは蓮の前に立ち塞がる。
「何、なんか用？」
蓮はタバコを加え前髪の隙間からまみを見下ろす。
「あの、私、何か悪いコト言った？言ったなら……謝ります」
詰まった声でまみが言う。
「別に何も言ってないよ」
「じゃぁ、なんで？」
必死な顔で蓮の腕を掴み聞くまみ。
そんなまみの顔を見て蓮は少し微笑み「ただ、帰りたいだけなんだよ」と
まみの手を自分の腕から離し歩き出そうとする。
まみは蓮の横顔を見て初めて会った夜の時のようにまたドキッとする。
　この人に抱かれたと思ったらすごく嬉しくなった。
通り過ぎようとする蓮のいい香りがこの間の蓮のあの激しいキスを思い出させる。
アルバイト先で偶然声をかけられ身体を重ね合った。

この人に抱かれた後、もうダメかなと思った彼との別れを選択できた。
お互い名前も知らず会わなくなったこの人とのこの再会はきっと偶然じゃなく運命を感じる。
まみはそう思った。

「私、あなたを好きになったかもしれない……」

まみは蓮の後姿に、すっと告白をした。

「は？」

突然のまみからの告白に驚いた蓮は振り返りまみを見ると
「俺、大切な女、いるから……」とそっと微笑し手を振りまた歩き出した。

まみはそんな蓮の言葉に動じず、
蓮の後姿にニッコリと笑いかけると「絶対、私に振り向かせてあげる」と呟いた。

第２６話狙った彼

朝。
倫が乗車する次の駅で孝司は乗車する。
お気に入りのトクトウセキには最近いつも倫が乗車する前に誰かが座っている。
最近ツイていない。

「おはよ。今日も座れそうにないね」

「おはよう」

十二月になるとなぜか電車の中は人であふれている。

「急がないといけないけど、ひとつアトの電車に乗った方が空いてるかもね」

「……」

ひとつ遅い電車には蓮くんが乗っている。
孝司はこみあう電車の中、倫が他の男に触れられないようにガードしてくれる。
揺れる電車の中、孝司の身体が倫の身体にピタッとひっつき、
倫が孝司の顔を見上げると孝司は倫を見つめる。
赤面する二人。

駅に着くと二人は電車を降りた。
今日はなぜかいつもよく話す孝司は無言で歩き、
話し掛けてこない孝司に対して倫も無言のままで歩いた。

孝司は何度か倫の動く手をちらちらと見ては
タイミングを見計らい倫の手を握ろうとしていた。

けど、咄嗟に手を握るコトはできるが、
ただこう黙って大学までの道のりを歩いていくのには、
手を握るタイミングを掴むというのは恋愛に不慣れな孝司には難しいコトだった。

孝司は、何度かタイミングを見計らって漸く倫の手を掴んだ。

「……」

倫は自分の手を握りしめた孝司の手に驚いた様子で目を大きくし孝司の顔を見た。

「あ……ごめん。手、繋ぎたかったから……」

孝司は驚く倫に申し訳なさそうに照れながら謝る。

「あ、い、え……」

自分の手をぎゅっと握りしめる赤面した孝司の顔の見ながら、
倫は驚く以外は何も感じず、ただ、
あ、そうか……私達は付き合ってるんだ。
……だからこれが自然なんだ。と他人事のようにぼんやりと考えていた。

「こういうの自然にできるといいね」

そう言いニッコリ微笑みかける孝司の顔を見て、
倫は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
私のココロの中にはまだ溢れそうなほど蓮くんがいる。

＊　＊　＊

蓮はいつも図書館で本を読んでいる。
それにつられて直樹と智史も一緒に図書館にいる。

「なぁ……」

智史は相変わらず図書館のフインキが好きではなく気だるそうに蓮に話しかける。

「ん？」

「昨日のまみって女とどういうカンケー？」

ギクッ。
絶対に聞かれると思っていた質問に蓮は顔を上げた。

「何？蓮、またナンパしたの？」

昨日、合コンにいなかった直樹は呆れた表情で聞く。

「別に関係ねぇ。うちの近くのコンビニの店員だよ」

蓮はサラリと流した。

「……あれはお前に惚れてるね」

智史はニヤリと笑い言う。

「まさかぁ～、やめろよ」

蓮は苦笑いをし、場が悪そうにまた本を読み始めた。

冗談じゃない。

『私、あなたを好きになったかもしれない』まみの言葉が頭をよぎる。

勘弁してよ。

蓮は直樹と智史に気づかれないように小さくため息をついた。

＊　＊　＊

「ねぇ、ねぇ、まみ。昨日の蓮って人かっこいいね。どういう関係？」

須藤まみは、蓮や倫の通う大学の英語科の一年生。

「えー」

まみは照れくさそうにモジモジとする。

「ワケアリィ～？隠さないでよっ！」

まみの友達の由紀はまみの服をひっぱった。

まみは恥ずかしそうに俯くと小声で

「一ヶ月前に、二、三回……Hした……」顔を真っ赤にし告白した。

「は？」

由紀はポカンと口を開けたまま目がテンになる。

「一ヶ月前って、成瀬と別れた後ぉ～！？」

「ん……」

まみは小さく頷く。

「っはぁ～？アンタ、いつからそんなに軽くなったの？」

由紀は思いっきり呆れた。

「てへへ」

まみはニヤニヤしながら、蓮とのコトを思い出し笑う。

「あんた、あんなに成瀬、成瀬って泣いてたのに」

まみは蓮と出会った頃に付き合っていた成瀬という男が浮気をしているのを知った。

物凄く好きだった成瀬。

浮気がバレた成瀬は開き直ってまみと別れると言い出した。

何度も別れない別れないとココロに誓い泣いた。

でも、まみはあっけらかーんとした顔で「だって、あっちが女作ったんだよ」

「まぁ……ね」

「丁度いい具合に蓮って人が声をかけてくれたの」
胸の前で自分の両手を握り締めまみは幸せそうに言う。
「はぁ……」
「お互いのキズを舐め合ったって感じ？あの人もなんかすごく苦しそうだった」
「ふーん」
由紀は、はいはい、といった感じでまみの話を聞く。
「顔もスタイルもHも何もかもサイコー！」
まみはもうルンルン気分。
そんな空を飛んでるようなまみに向けて由紀は
「あんだけの男なら彼女っくらいいんじゃなーい？」と言う。
その由紀の言葉に『俺、大切な女いるから』蓮の言葉を思い出すまみ。
「彼女なんかいたって関係ないわ。大切な女がいるなら他の女なんか抱いたりしない」
まみはアスファルトを睨んだ。
「えっ？」
由紀はまみの独り言に聞き返す。

「いいのっ！私、がんばるからっ」

「はいはい」

「早く行こうっ！」

まみは由紀の背中を押すと教室へと歩いた。

＊　＊　＊

昼のカフェテリア。

蓮は唯名と直樹達とランチを取っている。

「蓮先輩っ！」

まみは蓮達を見かけると駆け寄ってきた。

身震いする蓮。

「あ、昨日のまみ？ちゃん。由紀ちゃん」

智史は嬉しそう。

「こんにちは」

まみは蓮の隣に座る綺麗な唯名を見て「こんにちは」と

頭を下げると唯名はまみ達を見てニッコリと微笑み返した。

由紀は、ほらっみなっとまみの背中を肘でつく。

「こっちに座んな」

智史はまみ達に手招きをしたが、
まみは空いていた蓮の隣の席にドカッと座り満面の笑みで唯名に笑いかけた。

そんなまみを唯名は不思議そうな顔で首を傾げ見る。
蓮は唯名に宣戦布告しているようなまみを見て大きくため息をつき、
周りにいる智史達は、あちゃ～っという表情で三人を見た。
これからとんでもないコトが起こりそうな感じがする。
　でもこの時にはまだ、まみには椎名倫という存在も、
倫には須藤まみという女の登場も知る由はなかった。

第27話隣じゃない違う女（ひと）

あれからまみは帰りの電車の中で蓮を見つけると近づいてくる。
「蓮先輩！」嬉しそうなまみの顔。
「……」蓮の迷惑そうな顔。
「先輩、いっつもそんな顔しないでよ」
また遭遇したと言わんばかりの迷惑そうな蓮の表情にいじけてまみが言う。
「なんだよお前。今日もこっちかよ」ほんとにすごーい嫌そうな顔。
「そう、今日もバイト」まみは嬉しそうにそう言うと蓮の腕にピッタリとひっつく。
高校生並の大胆さ。
「んだー、ひっつくなっ！」
蓮はまみを押し離れると向きを変え手すりに手をかけた。
そんな蓮にまみはぶすっとしふてくされ、今度は「いーでしょ！Hした仲じゃん！」と周りに聞こえる大きな声で言った。
「あー、もぉ」
蓮はそんなあまりにも大胆なまみに困り果て、何てコトと額に手をあて首を左右に振った。
駅に着き、ドアが開くと蓮はそそくさと電車を降り急ぎ足で歩き出す。
「蓮センパーイ」まみは懲りずに急ぎ足で歩く蓮の後をつけて歩き、両手でしっかりと蓮の腕に自分の腕を絡ませる。
「はぁ……」これ以上かわしてもどんどんまみのペースに巻き込まれるだけだと、蓮は少し観念した様子で呆れ、腕をまみに取られたまま改札口を抜けるとマンションへと向かい歩く。
「先輩の言ってた『大切な女』って、いつも隣にいる金城唯名？」
「……」蓮はタバコに火をつけ加えたまま、まみの質問には答えずにただ歩く。

「あの人、合同祭の時ナンバーワンになった人だよね？」
「……そう」
「綺麗な人だよねぇ。女の私が見ても惚れちゃいそう」
「そうだな」
「いつから付き合ってるの？」
「合同祭の次の日からだよ」こういうまみの質問には淡々と答える蓮。
「ふーん。お互い好きなんだよね？」まみは蓮に不思議な質問をした。
「は？」
蓮は突然変なコトを訊くまみを驚いた様子でタバコを加えながらまみの顔を見た。
「だってさ、彼女と上手くいってそうなのになんで私と寝たの？」
まみは不思議に思ったコトを遠慮なしにポンポン訊いてくる。
「……」
「あの時、すごく切なそうだったし。あんな綺麗な彼女がいるならフツウ他の女と寝ないと思うんだけど……」
「……」
自分に対してのまみの質問には一切答えようとはせず蓮は歩いた。
「なんで？」
「さぁ？」意外に鋭いところに突いてくるまみに蓮は少し驚いた。
まみは何事においてもあんまり深くモノを考えてそうには見えない。どちらかと言えば、智史と一緒でその場のノリやなるようにしかならないといった感じと自分の感情だけで生きているような人間に見えた。
自分に対しての質問には答えずに、さぁ？と交わす蓮にまみは空を見上げると「まぁ、そんなコトどうでもいいや」と案の定その話を終了させた。
やっぱり智史と同じだ。
「そこに辿り着いてくれて光栄だよ」

「え？私は先輩が好きだから、先輩の気持ちも彼女のコトも私には知ったこたぁないから」
「あっそ」
蓮は取り合えず鋭いまみの攻撃がなくなったコトに安堵して、あまり嬉しくはないけどまみの告白を軽く流した。
「あっ！」
安堵して蓮が二本目のタバコを吹かそうとした時、
まみは何を思ったか急に立ち止まり大きな声を出した。
「！？」
突然発したまみの大きな声に蓮は驚き加えてたタバコを地面に落とした。
「びっくりしたなぁ……ったく、ほんとにお前は……急にデカイ声出すなよ」蓮はブツブツと怒りながらタバコを拾う。
「あの店。私、先輩と行きたい」
まみはある店を指差し、蓮はタバコを口にくわえ直すとまみが指す店を見た。
前、倫と入ったパスタの店。
「あの店パスタとケーキが美味しいんだって。先輩、今度行こうよ」
「あー、行ったコトある」
蓮は倫と行った時のコトを思い出し、この間倫と座った窓際の席を見つめた。
あ……。
蓮がじっと見つめた先に倫が里香と楽しそうに話しながらケーキを食べている。
久しぶりに見る倫の姿。
可愛い顔とは正反対な相変わらずなボーイッシュな格好。
蓮はタバコを口から外し微笑する。
「先輩？」
視線をある場所から動かさない蓮を見て、まみはまた自分の腕を蓮の腕に絡ますと蓮の顔を覗き込んだ。

「……」
蓮はまみの呼びかけに気づきもせず、いつも何に対しても冷めた瞳でモノを見ている蓮の見たコトもない
優しい表情をまみは目にする。
「蓮先輩？」
いつもとは違う表情の蓮の視線の先をまみはゆっくりとたどってみた。
二人の女が楽しそうに話しながらケーキを食べている。まみはその二人の女から目線を蓮に移すとムッとする。
すごく優しい表情の蓮。
「あの人達、知り合い？」まみは蓮の腕を抓った。
「いっ……」蓮はその痛さにふと我に返ると「何？」まみの質問を訊き返す。
「あの人達、知り合いなの？」
「あ、ああ」
まみの腕を自分の腕から離すと蓮の態度がなんとなくぎこちなくなる。
何かある……。と睨むまみ。
空気が読めないくせにこういうコトの勘はもの凄く鋭く働く。
女の直感。
まみは里香ではなく栗毛色の髪の長い倫を指差し「あー、あの人もナンパして抱いたんだぁ」と言う。
「……」
「あの人、彼女の金城唯名より良かったの？でも、あの人先輩のタイプとは違うんじゃない？」
勝手なコト言うまみ。
「あのなぁ……。お前には関係ないだろ？」蓮はタバコを地面に落とし靴で火を消す。
「あの人、あんなおとなしそうな顔してて彼女がいる男と寝るんだ」
蓮は倫の悪口を言われイラッとするとまみの肩を押し、真剣な眼差

しで倫を見つめると「あいつは俺みたいなバカな男に抱かれるような安い女じゃないし、彼女がいる男と寝るような軽い女じゃない」とまみに言う。
倫を見つめる蓮。
あまりにも真剣に苦しそうで切なそうに見つめる蓮の横顔を見つめまみは気づいた。
「もしかして、大切な人って……？」
「……」
蓮は切なそうに俯く。
誤魔化そうと思えば誤魔化せられるのに……。
「あの人なの？」
いつも隣にいる金城唯名じゃなくて、あの人？
私を抱いた時のあの切ない顔も辛そうな表情も彼女を想ってたの？
先輩の元カノ？でも……。
彼女を忘れたくて私を抱いたの？
でも、どうして？
『あいつは俺みたいなバカな男に抱かれるような安い女じゃない』
そう言った先輩。
まみはやるせなかった。
自分も同じだったのに悔しくて苦しい。
私は先輩に抱かれ、成瀬を忘れられた。
先輩の彼女を見る瞳には自分は映らない……。
けど、この気持ちはもう止めるコトができない。
あの人をココロの底から大切に想いながら金城唯名と付き合う先輩。
あんな表情を浮かべるくらいなら……そんなに好きなら手を離さなければいいのに……と思う。
でも、先輩が好きなのが隣にいる金城唯名じゃなく、隣にいるコトがないあの人なら……私は……。
先輩が先に進めないのなら……。
私はどんな手を使ってでも先輩を手に入れてみせる。

まみは今、そう強く決心する。

第２８話止まらない気持ち。愛してる

まみの出現で蓮は頭が痛かった。
唯名にも倫にも曖昧なまま日々を送っているというのに、まみまで現れ自分のしたコトに後悔というものをする。

蓮は珍しく一人で買い物に来ていた。
ブラブラとデパートを散策し、蓮はあるジュエリーショップのショーケースに飾られたピンクシェルでできたバラがついたクロスのネックレスを見つけると足を止めた。
いつか唯名の家のホームパーティーでサーモンピンクのサテンのミニドレスを着た倫を思い出す。
透き通るような倫の白い肌に似合いそうなネックレス。
蓮はしばらくの間、立ち止まりそのネックレスを見つめた。
「お出ししましょうか？」あまりにもずっとネックレスを見つめていた蓮にジュエリーショップの店員が声をかけた。
「あ……お願いできますか？」買うつもりはなかったけど、見るだけならと思い蓮は店員に頼んだ。
「はい」店員は、ショーケースの中から丁寧にピンクシェルでできたバラのクロスのネックレスを出す
と蓮の手のひらの上にそっと置いた。
「……」
「このネックレス素敵でしょ、お勧めなんですよ？」店員は蓮の顔を見てニッコリ微笑む。
「はい……」蓮はそっと自分の指にネックレスを通すと、上から照らすスポットライトにネックレスを翳して見た。
倫にすごく似合いそう。
あいついつも男っぽい格好ばかりしているけど……。
「素敵ですね」店員もうっとり見つめながら呟く。

「これ、包んでいただけますか」蓮は買うつもりのなかったネックレスを買うことにした。
「ありがとうございます」店員からショップのネックレスが入った紙袋を手渡されると「ども」と店を後にする。

蓮は、まだ一人のマンションへ帰る気はなく、デパートの近くの公園でベンチに座ってタバコを吸っていた。
もうだいぶ陽は沈んだというのに公園にはまだ親子連れが楽しそうに遊んでいる。
蓮は、まだ両親の仲が良かった頃、よく行っていた公園の風景を思い出した。
ベンチに座りながらニッコリ笑う母親、キャッチボールをしてくれる父親。
楽しかった光景が今でも鮮明に目に焼き付いている。
「もう一度、戻ってみたいな……あの頃に……」蓮は、寂しそうに微笑みそっと呟いた。
「はぁ……」蓮は、ため息をつき、暗くなってきた辺りを見渡し、帰ろうとタバコの火を消し立ち上がろうとした時、向こうのベンチに座っている倫と孝司の姿を見つけた。
二人は何かを楽しそうに話しているよう……。
蓮はずっと倫だけを見ていたが、倫は蓮に気づかない。
楽しそうに話している倫を見て、蓮は胸が締め付けられる思いがした。
もう、これ以上倫の楽しそうな顔を見てはいられない。
そう思い蓮はその場を離れようと歩き出した。
その時、孝司が倫をそっと抱きしめた。
遠くにそれを見る蓮……。
今すぐ二人の元に走っていき二人を引き離してやりたいと蓮は思った……でも、自分にはそんな資格はない。

「先輩……まだ、人がたくさんいるよ」倫は、孝司を押し、離れると立ち上がり歩き出した。
「倫っ」孝司は倫の名前を呼び立ち上がり倫の後をつけた。
「……」
「倫っ」
「……」孝司が呼ぶ声に蓮の声を思い出す。
「倫ちゃん、待って……」孝司の優しい声に少し意地悪にモノを言う蓮を思い出す。
「……」
「ごめん。倫ちゃん」孝司は倫の腕をそっと掴むともう一度倫を優しく抱きしめた。
孝司がする、一つ、一つの仕草、行動さえ蓮を思い出す。
「先輩……」
孝司は、切なそうに倫の顔を見つめると、目を瞑り倫にキスをしようとした。
少しずつ、少しずつ近づく孝司の唇……。
恋人ならこれが当たり前なんだ……倫は、ぼんやりとただそう思い、目を開いたまま孝司の唇を受け入れた。
ただキスをされているという感じ……。
そんな二人のキスシーンを、蓮は立ち止まり見ている。
孝司の唇が倫の唇からそっと離れると、倫の目からは涙が零こぼれ頬をつたう。
蓮とは違う優しいキス。
「倫?」
「あ、ごめんなさい……」倫は謝り、目の下に指をあて涙を受け止めると孝司の顔を見た。
優しすぎる孝司のキスに、激しい蓮のキスを思い出した倫は、急に孝司に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、首を振るとその場から逃げ出した。
「倫っ!」孝司は、倫の名前を呼んだ。

涙の理由は分かっている。
好きな人がいます。そう言う倫に、それでもいいから……と言った自分に腹がたった。
いいわけなんかない。
孝司は握りこぶしを震わせながら倫を追いかけるコトができず、ただ、その場に立ち尽くした。

ずっと二人を見ていた蓮は、孝司の元から走り去った倫を追いかけ後を追った。
倫は、孝司に追いつかれないように全速力で走る。
「倫っ！」倫に追いついた蓮は倫の背中を抱きしめ二人はアスファルトの上に倒れこんだ。
ドスンッ！！。
蓮は自分の上に倫がのっかかるように抱きしめた。
「いってぇ～」
「はぁ……はぁ……」
倫は、どうして蓮がここにいるのか分からない様子で蓮の上にのったまま大きく呼吸をした。
「ったく。お前、ほんっとうに走るの速いな」蓮は、そう言いながら、自分の顔にかかる倫の柔らかい髪の毛を倫の耳にかけ、息を飲み込みながら微笑んだ。
「っん、ひっく……」
蓮の顔の上に、倫の涙がこぼれ落ちる。
見つめ合う倫と蓮。
……愛しい。
蓮は倫の唇を親指でそっと拭うと、身体を起こし倫に優しくキスをする。
「愛してるよ……倫……」倫の目をじっと見つめ、ずっと言えなかった言葉を口にする。

今度は倫から蓮にそっとキスをした。
「蓮くん、愛してる……」溢れる涙を流しながら、倫は蓮に微笑みかける。
ずっと、倫を見ていたい……蓮は、倫の首筋にキスをした。
「倫……俺、やっぱ、お前が隣にいないとダメだ……」蓮は初めて自分の素直な気持ちを口にする。
私もやっぱり蓮くんしか見れない……。
倫は、蓮の肩をおもいっきり抱きしめた。
「ん……私も……」
今まで抑えてた気持ちが溢れ出すかのように二人は、周りも気にせず何度も何度もキスをした。
……もう……離せない。

第２９話過去

産まれて初めて口にした。
アイシテル……。
こんなに人を愛するなんて思わなかった。
倫と蓮は今まで口にできなかったぶん、お互いに触れられなかったぶん愛し合った。
それはこの間の激しさとは違う。
幸せな時間……。

倫はベットの中から蓮の部屋を見渡す。
モデルルームの様にセンスがいい広い部屋には、大きなプラズマテレビとローテーブル、パソコンデスク、観葉植物だけが置かれている。
「部屋もベットもこんなに広かったんだ……」
「えっ、前に来ただろう？」
蓮はタバコに火をつけ起き上がった。
「あの時はなんだか……」
倫はこの前の激しかった蓮の行動を思い出し、布団で顔を隠した。
「お前、俺が初めてだったんだ」
蓮はタバコをくわえ、布団からはみ出している倫の頭にそっと手をかける。
「蓮くんは？」
起き上がりふくれた顔で倫は蓮を見ると、蓮はタバコの火を灰皿で消しながら平然とした顔で
「違うよ」とあっけらかんに答えた。
分かっていたけどショック……。
「そうだよね」
倫はショックを隠すように少し強気で気に入らないといった様子

で言い俯く。
そんな倫の横顔を見て蓮は「好きな女を抱いたのはお前が初めてだよ」と真顔で言った。
倫はその言葉に胸がキュンとなる。
イヤだ……蓮くん。
倫は物凄く恥ずかしくなり話題をそらせようと明るい声で「そうだ、この間ねっ……」と話し
だした時、「俺さ……」蓮は口を開いた。
悲しそうに床を見つめる蓮。
「……」
「うちの両親さ、すごく仲が良かったんだ。小さい頃、母さんがよく『ママとパパは大好き
で大好きで結婚したんだよ。それで産まれたのが、蓮、あなたよ。
だから、蓮はママとパパ
にとってかけがえのない大事な宝物なんだよ』って……」
「うん」
「そんなコト、毎日のように俺に言ってた母親がある日学校から帰ってきたら何してたと思う?」
蓮は切なそうな表情を浮かべ倫に訊く。
「……?」
倫は想像がつかず首をかしげた。
「……親父と寝るベットの上で、親父じゃない男と寝てたんだ……」
蓮は悲しそうに苦笑する。
「れ……」
「しかも、親父は親父で秘書とできててさ、わずか六年で家庭崩壊。笑っちゃうだろ?離婚してあ
いつらはすぐお互いの相手と再婚して、俺はじいさんのとこに預けられたんだ……」
「……」
「だから、好きな女と付き合っても、きっとそいつもあいつらのよ

うにいつか俺の前から消えてい
く。親のようにあんなに愛し合っても、いつかは……。だから、好
きでもない女と付き合って抱い
て、満足しようとしてた」
「蓮くん」
「サイテーだよな。俺、自分が傷つくことしか考えてない……」
蓮の瞳に薄っすらと涙が浮かぶ。
初めて聞く蓮の過去、初めて見る蓮の涙……。
「そんなコト……ないよ」
倫は裸でいるコトを忘れ、蓮をギュッと抱きしめる。
倫の体温にホッとする蓮。
「お前といるとなんか落ち着いてホッとする……」
蓮も倫の腰に手を回し、ギュッと抱きしめた。
「だからかな？いつもお前に会いたくて、気づくとお前探してた。
産まれて初めてお前だけは誰に
も渡したくないって思った」
いつもいい加減に見えた蓮くんは、実は、自分の辛い気持ちを隠
そうとしてたんだ……。
好きな人の辛い過去。
倫の目から涙が零れ落ちた。
「愛してるよ、蓮くん」
初めて知った不器用な蓮を愛しいと思う倫。
「倫、愛してる」
蓮は自分の為に涙を流してくれる倫にそっとキスをする。
何度言ってもまだ足りなく感じる。
「「愛してる……」」
二人は見つめ合い、そっと唇を重ねあうとまたお互いを求め合い、
そして深い眠りについた……。

第３０話ごめんなさい

二人。
お互いの想い合う気持ちはやっと通じ合えた。
通じ合えたその後、倫と蓮にはお互いそれぞれに傷つく人が隣にいる。
孝司と唯名。

倫は朝早く蓮と別れ、いつものように孝司と大学へ行く時間の電車に乗り、
孝司は次の駅でいつものように乗車してくる。

「おはよう、今日も混んでるね」

「おはよう」

昨日何もなかったようなフリをする二人、でもどことなく少しぎこちない。
公園でのコトがお互いの頭をよぎる。

「ごめんね」

孝司は倫にポツリと謝る。
謝らないで……。
倫はそう思った。

「あ、私の方こそ……急に先に帰ってごめんなさい」

いつも心地良かった電車の音が今日はとても居心地悪く感じる。

二人はつり革に手をかけ、黙ったまま大学のある駅まで電車に揺られた。

電車が駅に着く。

電車を降りた倫は、朝からどう孝司に別れをきりだそうかタイミングをみる。

孝司はいつもとは少しフインキが違う倫に、昨日のコトのせいだと少し戸惑ったが、

このまま無言のままで歩くのもなんだと思い「倫ちゃん、あのね……」と口を開いた。

今しかないっ……。

倫は、孝司が自分に声をかけたと同時に顔を上げた。

「先輩っ……」

倫の声と同時に電車が通り過ぎた。

孝司は身動きするコトなく倫を見つめる。

電車の通り過ぎる音で聞こえないのか、

数秒経った後「えっ、何？」と孝司は倫に聞き返した。

聞こえてなかったんだ……。

もう一度、言わなくちゃいけないなんて……イヤだ。

でも……。

言わないと先には進めない。

倫は目を瞑り、深く息を吸い込み「ごめんなさい。私と別れてください……」

……もう一度、口にする。

孝司は少し怒っているような表情で倫を見つめると、

倫が口に出した言葉に返事もせず振り返ると、倫をその場に残しそそくさと歩き出した。
孝司の背中を見る倫。
何も返事をしてくれない孝司にどうしたらいいのか分からなかった。
でも、倫は孝司を追うコトも孝司の名前を呼ぶこともしなかった。

「ごめんなさい……先輩」

蓮は講義が終わった後、唯名を講堂に呼び出した。

「珍しいね、蓮から私を呼び出すなんて。何かあるの？」
唯名はなんとなく気づいてるよう。

蓮は、唯名の目を真っ直ぐ見ると、迷うコトなくも躊躇するコトもなく
「ごめん、俺と別れてくれ」と言った。
唯名はそんな蓮に微笑し、
「いつもみたいに遊びでもいいじゃない。
蓮、好きな子がいてもいつもそうしてたんでしょ？」と蓮のコートの生地を摘んだ。
唯名の言葉に首を振る蓮。

「もう、自分にも誰にもウソはつかない……ウソはつかないって決めたんだ……」

その蓮の言葉に唯名は悲しそうな表情を浮かべると窓の外を見た。

「あなたが倫ちゃんを好きになっているのはだいぶ前から気づい

てた……」

「……」

蓮は驚き唯名の横顔を見た。

「蓮の気持ちが私にはもうないって分かってた。
でも、蓮は好きな子とは付き合うコトができないって直樹から聞いたコトがあったから、
蓮の隣にいれるだけでも良かった」

唯名の頬にそっと涙がつたう。

「唯名……」

「私は蓮が好きだから……」

「……」

唯名は涙で溢れた瞳で蓮の顔を見つめた。

「でも……もうダメみたいね」

こんなに早くダメになるとは思わなかった。

「ごめん……唯名」

「蓮……」

「ん？」

最後にこれだけは蓮の口から聞いておこうと唯名は思う。
「倫ちゃんと出会う前は、私のコト好きだったんだよね？」
蓮は涙を流す唯名に優しく微笑みかけ「ああ……」と頷く。
それだけでも良かったのかな？と唯名は思う。
「よかった……」
鼻をすすり零れ落ちる涙を手で拭い、
唯名はニッコリと微笑んでまた蓮を見つめる。
「……」
「ありがとう。蓮……別れてあげるよ」
「唯名……」
「まぁ、私ぐらいの女なら、蓮よりもっと他にいい男なんかすぐ見つかるだろうしね」
強気で泣き顔で笑ってみせる唯名。
「ああ……」
「また、前のように友達に戻れるよね？」
「ああ……」

「……今までありがとう」

「……」

「じゃぁ……さようなら……蓮」

唯名は手を振ると蓮に背中を向け講堂を後にした。

離したくはない蓮を離したのは、あんな蓮の顔を初めて見たから。

悔しいけど、私じゃ、蓮を変えるコトはできなかった。

私じゃ、ダメ……だと分かってたから……。

蓮、愛してるよ……。

唯名はココロの中で、本当は今でも口に出したい言葉を呟いた。

大学が終わり、蓮は駅のホームで倫を待っている。

「ごめーん。蓮くんっ」

倫は息を切らしながら走ってくる。

「何してたんだよ～遅いっ！」

蓮は待ちくたびれ、少し不機嫌そうに言うと倫のおでこにデコピンをした。

「もぉ、痛いっ」

倫はブーツのつま先で蓮の足を軽く蹴る。

「あっ、出たな。ほんと、お前気強ぇーな」

「うるさいっ」

倫は膨れ顔で蓮を横目で見ると、蓮はニッコリと笑い返す。

「お前、ほんと可愛いよ」

倫は蓮の言葉に照れ笑いをすると二人は幸せそうに見つめ合った。

「電車、来たね」

「今日、うちでメシ食ってけよ」

「え～、どうしようかな～？」

「あっ、そんなコト言うぅ？」

「うそうそ」

そんな幸せそうな倫と蓮の姿を後ろで誰かがじーっと見つめていた。

第３１話ありがとう

「りーん」

図書館に向かうガラス張りの渡り廊下で倫は名前を呼ばれ振り返った。

「……」

「図書館行くんでしょ？一緒に行こう、倫」

声をかけたのは佐奈だった。

「佐奈ちゃん」

「発音のコトで聞きたいことがあってさ、教えて？」

「うん、いいよ。がんばってるね、佐奈ちゃん」

「恋愛がダメだから、せめて勉強ぐらいはね」

佐奈はため息混じりに言う。

「佐奈ちゃん、好きな人いるんだ」

「いたけど、失恋かな？」

「えー、佐奈ちゃんでも失恋すんの？その人の目、節穴だね。こんないい女フルなんて……」倫は佐奈の失恋相手に怒った様子で佐奈の顔を覗きこんだ。

「あはは」
佐奈は自分の顔を覗き込む倫を見て笑った。
まさか、その節穴の目の奴が、当たり前だけど倫は自分の彼氏だとは知らない。
「どうして笑ってるの？」
倫は自分を見て笑う佐奈の顔を見て不思議そうな表情をし、聞く。
「うんん、別に……」
「その人、彼女とかいるの？」
倫は何気なく聞いてみる。
いるよ。
「うん、いるよ。この間、すごく綺麗な彼女フッて、
今度は、可愛いけど無愛想な女と付き合い始めたんだよ」
「えっ？」
倫は佐奈が話す、綺麗な彼女、無愛想な女という言葉に嫌な感じがした。
「あ、そのフラれた綺麗な彼女が前から歩いてくる」
佐奈は図書館からこっちに歩いてくる唯名を見つけると、
あごを上げ、ほらっという素振りをする。
「えっ？」
倫は佐奈と同じ方向を見る。
歩いてくるのは唯名だった。

唯名ちゃん？
唯名は立ち止まることなく倫と佐奈の横を通り過ぎた。
相変わらず歩く姿も何もかも綺麗で、
唯名がいると周りの学生達はうっとりと見入ってしてしまう。
倫は唯名が通り過ぎた後、佐奈の失恋相手が蓮だと知り、驚き、
佐奈の顔を見た。

「ごめん、倫。ちょっとあんたに意地悪したくなった」
暗い表情を浮かべ佐奈は倫に謝った。

「佐奈ちゃん」

「悔しかった。竹下くん、なんで倫とは付き合えたんだろうと思って。
でも、なんか分からないけど、倫だからかな？なんて思ったりもして……」

「佐奈ちゃん？」

「金城さんもそう思ったのかな？ね、倫」
佐奈は倫の顔を見て、今度はニッコリと微笑んだ。

「佐奈ちゃん、ごめん。先に行ってて」
倫は佐奈の言うコトに、唯名に言わなくてはいけない言葉があると気づいた。

人を傷つけてまで成した恋だからこそ、ずっと大切にしたい。
でも、このままではいけないと思う。
どんなに酷いコトを言われても、この恋を幸せに前進させるため、

傷ついた人の気持ちを受け止めないといけないと思う。
倫は唯名を追いかけた。
「唯名ちゃん、あのっ……」
倫の呼びかけに唯名は振り向いた。
「倫ちゃん？」
驚いた様子の唯名。
「あの……ごめんなさい。謝って済むわけじゃないけど……」
倫は唯名に頭を下げた。
「倫ちゃん」
「でも……私、どうしても蓮くんが好きだからっ」
瞳に涙をいっぱい浮かべ倫は唯名に言い放った。
「蓮があなたを好きなコトも、倫ちゃんが蓮のコトを好きなのも、だいぶ前から気づいてた」唯名も瞳にうっすら涙を浮かべると倫にそっと微笑んだ。
「唯名ちゃん？」
「あなた達、本当に鈍感で不器用なんだもん」
「……」
「カフェテリアで初めて倫ちゃん知った時も、ホームパーティーの時に私といても、
映画に行っても……気づくと蓮はあなたを見てて……ほんと腹が

立った。
あなたがフランスに帰った時は、正直、私、二度と帰ってこなければいいのにって……思った」
唯名は早口で言う。
「唯名ちゃん……」
「あなたがいないうちに、もう一度、蓮の気持ちを取り戻そう、蓮が付き合ってくれるコトは私のコトをもう好きではないってコトだけど、
付き合えばもう一度私のコトを好きになってくれるって、そう思ったけど……無理だった」
「……」
「どうして倫ちゃんは蓮を変えるコトができたんだろう？」
唯名は倫の瞳を見つめた。
純粋な綺麗な大きな瞳で自分を真っ直ぐに見つめる倫。
「……」
「恋愛は理屈じゃないんだって……」
「唯名ちゃん？」
「それは、きっと、倫ちゃんだから……なんだよね？」
「……」
人を好きになるのに理由なんていらないし、あの日がどうなんて

そんなコトもいらない……。

「あー、もぉ、何言ってるか分かんない。何が言いたいんだろう？私……」

唯名は首を振った。

倫ちゃんだから……唯名の言葉が、胸の奥深くに、じんわりと響く。

私だから……？

人の彼を取ったこんな私にそんな言葉を言ってくれる唯名ちゃん。

「唯名ちゃん……」

「でも、きっと、相手が倫ちゃんだから蓮を渡せるコトができたんだろうと思うの……」

こんな酷い私に唯名ちゃんは……。

「ごめんなさい」

倫はココロの底からもう一度唯名に謝った。

「謝らないで……。蓮が、私じゃなく本当にココロからあなたと一緒にいたいと思って

倫ちゃんを選んだんだから」

「唯名ちゃん」

「だから、ごめんじゃなくて、渡してくれてありがとうね。で、ね……なんちゃって」

唯名は倫の胸の前にそっと手を差し出した。

「……ありがとう、唯名ちゃん」
差し出された唯名の手を倫はそっと握る。
「どういたしまして」

第３２話降り出した、雨

もうじきクリスマス。
嬉しくて気持ちが弾む。
蓮くんとこうして、ずっと、ずっと、一緒にいたいなぁ……。
こんなに幸せでいいのかな？

十二月二十一日。
倫は蓮といつものように一両目の真ん中の倫のお気に入りのトクトウセキに座る。
前のように一本遅い電車。
大学までは早足で行かないといけないけれど、
この時間ならサラリーマンが少なくてお気に入りのトクトウセキに座れる可能性が多い。
この席で倫は蓮と出会った。
今はもう、電車で本を読むコトはない……。

駅に着き、改札をぬけ、大学までの道を二人で歩く。

「おはよう」
里香が歩く倫の背中をポンッと叩く。
「「おはよう、里香ちゃん」」
倫と蓮はお互いに呼吸を整えたかのように口を揃えると
「あー、もぉ、嫌だっ。この二人」里香は口を尖らせ言う。

「もぉー、何？里香ちゃん」

「別にぃ～、竹下くんも倫もなんかフインキ変わったね。いい感

じになった。
まぁー私は、前の軽い感じの竹下くんの方が好きだけど……」
里香はニヤリと笑った。
「じゃぁ、戻ろうっかなぁ？」
倫の方を見て蓮は悪戯っぽく笑う。
「やめてよ」
怒りながら蓮の腰を叩く倫。
「あーもうっ！熱い、この二人っ。私、先行くね～」
里香はそう言うと手を振って走って行ってしまった。
「里香ちゃんって、いっつも明るいね」
「うん。いい子でしょ？」
倫は里香の後ろ姿を見ながら微笑んだ。

午後になり、窓の外は急に暗くなりあやしい空模様なる。
「嫌だな……本当に降るのかなぁ……」
里香は不安そうに空を見る。
「うーん。なんか嫌な感じの空だね」
倫も空を見上げた。
グレーの雨雲を見ていたら、なぜだか胸騒ぎがしてきた。
空模様と同じように、なぜかすごく嫌な気分になる……。
なんでだろう？

倫は里香と別れ、まだ講義中の蓮を図書館で本を読みながら待っていると、
後ろから何か視線を感じた。
身体がぞっとする。
嫌な視線に後ろを振り返って見ると一人の女の子が自分をじーっと見ている。

えっ、ヤダ、何？

突き刺さるような視線。
けど、倫はまた本を読み始めた。
倫は彼女が誰だか知らない。

しばらくすると講義を終え、蓮が図書館にやって来た。

「ごめんな、雨降ってきたよ。帰ろう」

「あ、うん」
倫は蓮の顔を見てホッとするともう一度女の子がいた方をチラッと見た。

はぁ……。
女の子はもういなかった。
誰だったんだろう？
倫は首を傾げ、本をバックにしまうと席を立った。

外は凄い雨……。
傘をさしてもダメな感じ。
電車に乗り、倫と蓮はびしょびしょのコートを脱いだ。
「すごかったね」
倫は長い髪の毛をハンカチで拭く。
「あーほんと」
濡れた頭を軽く揺する蓮。
あ、蓮くんの髪の毛が雨に濡れてストレートになってる。
倫はうっとりと蓮を見つめた。
「タバコ吸いてぇ」
倫は急に寒くなり身震いをした。
「寒い……」
「大丈夫？」
蓮は心配そうに倫を見た。
「あ、うん」
吸い込まれそうな澄んだ瞳。
私、この瞳に惹かれたのかな……。
ずっと自分を心配そうに見る蓮に倫の顔は急に真っ赤になり、
心臓の鼓動はドキドキと早く打ち始める。
「倫、顔が赤いぞっ。熱がでてきたんじゃないか？」
蓮は慌てて倫のおでこに手をあてた。

「……」

ドキ……ドキ、ドキッ……。
触れる蓮くんの手。
気が遠くなりそう……。
トローンとした瞳で倫は蓮を見つめる。
少しずつ開く桜色の唇……。
そんな倫の顔を見て、ドキッとした蓮は倫のおでこからパッと手を離した。

「熱……は、ないな……」

「あ……うん……」
どうしよう。
心臓がドキドキして……破裂しそう……。
二人はこんな場をどうしていいのか分からず俯いた。

ずっと一緒にいるのに、いまだにこんなフインキに慣れない。
ただ瞳を見ただけでもすごく意識してしまう……。
恋愛初心者の自分を恥ずかしいと思ってしまう。
こんな私に気づかないでね。
倫は自分の胸に拳をあて、蓮に気づかれないようにそっと深呼吸をした。

どんな女と一緒にいても、
何人かの女のあんな表情を見てきてもこんな気持ちにならなかった。
今すぐ抱きしめてしまいたい…。
いつもそう思う。
倫の表情、仕草、一つ一つが愛しくてたまらない。

……俺……倫と一秒でも離れたくないと思う。

「今日も……うち、来る？」

珍しく照れくさそうに蓮はポツリと言う。

「え、あ……うんっ」

そんな蓮の誘いの言葉に倫は嬉しそうにニッコリと微笑むと頷いた。

駅に着いてもいっこうに止む気配のない雨。

倫と蓮は傘をさし、蓮のマンションへ帰ろうとする。

「蓮先輩っ！」

歩く二人の後ろから、雨の中、誰かが蓮を呼んだ。

倫と蓮は同時に振り返る。

「あ……」

さっき図書館にいたショートカットの女の子？

倫は図書館にいた女の子の姿を思い出す。

「須藤……」

蓮は、最近自分の前に姿を現さなかったまみが久しぶりに現れて、またかという表情を浮かべる。

「蓮くんの知り合いだったんだ」

「なんで、お前知ってんの？」

不思議に思った蓮は倫に聞く。

「あ、さっき図書館で見かけたから……」

「ふーん、そうなんだ」

まみは倫にニッコリと微笑み丁寧にお辞儀をすると、
蓮の前で足を止めると蓮の顔を見上げた。
じーっと蓮の顔を見つめるまみ。

なんか嫌な胸騒ぎがする……。
倫と蓮はそう感じる。

「あのね……」
俯くまみ。

「なんだよ？」

「うん、あのね……」

「何だよ？言いたいコトがあるなら早く言えよ」
じらすまみにいつものように少しイラつく蓮。
そんな蓮とまみを、倫は、何だろう？という感じで、
ただ、黙って立って見ている。

「私ね……」

「なんだ……？」
苛立ち腕を組みはじめる蓮にまみは顔を上げると、
「私、先輩の赤ちゃんができちゃった」と告げる。

ドサッ！

倫の手から、雨で濡れたアスファルトの上にバックが落ちた。

「あ……」

お気に入りのバックが……雨に濡れる……。

倫は何が起こったか分からない様子で雨に濡れるバックを見つめる。

「……」

蓮は口を開いたまま、ただ驚いた表情でまみを見ている。

思いもしない、考えもしない……突然の言葉。

三人は沈黙のまま、ただ、ただ……この雨の中立ち尽くしていた。

第３３話私達は何処に行くのだろう？

いっこうに止まない雨……。
あれから私はどうしたんだろう……？。
雨に濡れたバックを拾って、蓮くんの顔を見て
……そこまでしか覚えていない……。
もう、どのくらい時間が経ったんだろう？

ー「私、産むから……」
まみはそう言い放つと、その場を去ろうとした。

「ちょっ、ちょっと待てよ」
まみの腕をぎゅっと掴む蓮。

痛っ！
凄い力と怖い表情の蓮。

「私、産むから。絶対、産むからっ」
まみは蓮の手を払いのけ、蓮を睨むと立ち去った。

「……」

傘を地面に落としたまま愕然とする蓮。

「……なんなんだよ……」
握りこぶしを震わせ自分の太ももを何度も叩く蓮。

「畜生……何なんだよ。今になってツケかよ」
蓮はそう言うと、下唇をぎゅっと噛みしめた。

次の日、蓮は大学を休み、
まみのバイト先のコンビニの顔見知りの店員にまみの携帯電話の番号を聞き出し、
まみの家近くの喫茶店にまみを呼び出した。

「ごめんな、呼び出して……」
蓮はタバコを灰皿に押し火を消す。

まみは首を振った。

「俺とさ、お前……。お互いなんの気持ちもないのに、
ただ子供ができたからって産むのは変じゃないか？」
まみには何の感情もない冷めた瞳で蓮はまみを見る。

「……」

「お互い何も知らないのに産むなんて簡単に決めるなよ……」

「先輩にはなくても私には、気持ちあるから……」
まみはきっぱりと答える。

凍りつきそうな蓮の瞳。
蓮は、またタバコに火をつけると大きくため息をつく。

「私、一人でも産むから……」
強く言い切るまみ。

「……」
蓮は呆れた表情で灰皿にタバコを擦り、テーブルの上の伝票を取るとまみを置いて店を出た。

心臓がドキドキする……。
怖かった……先輩の顔。
でも、もう後戻りはできない。
行くところまで行ってしまおう。
自分で決めたコトだから……。
まみは灰皿の中に捨ててある蓮の吸ったタバコの吸殻を見つめた。

今日、蓮くん大学に来なかったな。
あれから連絡もないし……どうしたんだろう？
倫は不安を抱え、駅までの道を一人俯きながら歩く。

「倫……」
自分を呼ぶ優しい声に倫は顔を上げると、目の前に蓮が立っていた。
見つめ合う二人。
「今日、大学に来なかったね」
倫は少し微笑んだ。
辛そうな蓮の顔。
「ん……」

続かない……。

「……」

……会話。

「話……したんだ。……あいつと……」

「そう……」

倫は俯く。

「産むって、いってんばりで……」

その言葉に、倫の胸は張り裂けそうになった。

いつもとは違う、ド……ン。とした重い心臓の鼓動。

このまま二人で何処かへ行ってしまおう……。

そんな言葉を口にしてしまいたくなる。

でも……二人とも口にはできない。

倫は震える言葉にならない声で「蓮くん……どうするの？」と聞いた。

「……俺、産むなんて言われても……別にあいつとは……

あいつのコト、全然知らないし……」

あいつのコト全然知らない……。

蓮のその言葉に倫は顔を上げ、

「蓮くん、赤ちゃんって、一人じゃ……できないよ」

と悲しそうに瞳に涙を浮かべ言う。

「……分かってる」

「蓮くんがしたコト……もう、あなたひとりの問題じゃないし、あなた達だけの問題じゃないよ」真剣な顔の倫。

あなたひとりの問題じゃないし、あなた達だけの問題じゃない……。

倫の言葉が蓮の肩にドンと重く圧し掛かる。

きっと、自分以上にショックを受けているはずの倫。

その倫の口からその言葉を言わせるのはとても惨いコト……。

俺は……。

「……」

「赤ちゃん……もう、お腹で生きてる」

「……」

「蓮くん」

「ん？」

蓮は、涙で溢れた倫の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「私は大丈夫だから、彼女のコト、真剣に考えてあげて……ね」

倫は瞳いっぱいの涙を零し、本当は言いたくない言葉を、口に……する。

倫は涙を拭い歩き出す。

「……」

倫に出会って、初めて好きな女を他の男(ヤツ)に渡したくないと思った。

この恋を、この女を……産まれて初めて、大切に、大事にしたいと…そう思った。

そんな大事なコトを、大切なコトを気づかせてくれた倫を、自分がしたいい加減なコトで、一番傷つけるコトになってしまった。

悔やんでも、悔やみきれない……。

私達は何処へ行くのだろう？

第３４話ずっと、アイシテル…

十二月二十四日　クリスマス・イブ。
私は、今日という日を忘れない。

朝。
起きて私は鏡の前で笑顔の練習をする。

腫れた顔……。
こんな顔で蓮くんに会うのはすごくためらう。
ほとんど泣き通しで、夜もろくに寝られない。
でも、今日が最後かもしれない……。

「たった、二週間のカノジョ……かぁ……」
ため息をつき倫は自分のお腹を触る。
あの子のココには、蓮くんの赤ちゃんが……いるんだ。
やるせなかった……。
等身大の鏡の中の自分を見つめる。
私のお腹にいてくれればよかったのに……。
倫は化粧をし服に着替え、家を出た。

ＡＭ７：００.
いつもの駅、改札口前で早い待ち合わせ。
昨日、夜遅くに蓮くんからメール。

…明日、一緒に海に行こう…

約束の時間を少し遅れて、眠そうな顔で蓮がやってきた。

「ごめん、遅れた」

駅の改札口前のベンチに座って待っていた倫は蓮の顔を見上げる。
眠そうな蓮くんの顔。
蓮くんも眠れなかったんだ。

「おはよ……」
真っ赤に充血した倫の目を見て、蓮は咄嗟に目を逸らし、
「ごめん……」と謝った。

謝らないで……。
辛そうに俯く蓮に倫は明るくニッコリ笑って、
「今日は、何処の海に行くの？」と立ち上がる。

蓮はそんな倫を見て少し微笑んだ。
「あー、親父の別荘がある海に行く」

「べっ、別荘ぉ？」
倫は大きな瞳を更に大きくして驚く。

「……そう」

蓮は財布を出し切符を二枚買う。

「蓮くんのお父さん、別荘持ってるの？」

「ああ」
倫に切符を渡し、さらりと返事する蓮。
「……蓮くんのお父さんって何やってる人？」
倫は不思議そうな顔をして聞く。
「あれ、言ってなかった？会社の社長だよ」
「！？」
驚いた倫は開いた口がふさがらない。
だから、あんなに広いマンションに一人で住めるんだ……
なんとなく気立てが良さそうな感じがしたのも納得できる。
「さっ、行こう」
蓮は固まる倫の手を握り改札口を抜けた。

暖かい電車の中。
大学とは反対の路線を進む電車。
倫は窓の外を見ながら「初めてだね。どっかに二人で行くの」と嬉しそうに言う。
「ああ……」
蓮も窓の外を見る。
見慣れない景色、二人を乗せて走る電車。
土曜日のせいなのか、朝早いのか分からないけど、

蓮くんと私以外には人が乗っていないこの車両。
この電車、このまま何処かへ連れて行ってくれればいいのに……。
倫はそう思った。
蓮くんもそう思ってるかな？
倫は外を見つめる蓮の横顔を切なそうに見つめた。

二時間半ほど電車に揺られて二人は目的地の海に着く。
電車を降りると潮のにおい。
改札口を抜けると、彼方に広がる水平線。
「恋路が浜……って言うんだ」
蓮は小さな声で言う。
「こんな所あったんだ。綺麗な所だね」
海を見つめ、ニッコリ微笑む倫。
蓮は海を見つめ、目を細めた。
「お前を絶対連れて来ようと思ったんだ」
すごく嬉しい。
「ありがとう」
「どういたしまして」
蓮は照れくさそうにお辞儀をした。

海を散歩し、夕食の買い物を済ませ、倫と蓮は別荘へ向かう。
蓮の父親の所有する別荘は高台の上に建っていた。
急な坂を登りきり、倫は立ち止まり振り返った。

「きれい……」

倫の言葉に蓮も振り返る。

「……」

水平線に沈んでいく太陽。
産まれて初めて見る。
目に痛いほど眩しい光を放つ太陽。
少しの間、倫と蓮は夕陽を眺めていた。

「沈んじゃったね」

「うん。中、入ろうか？」

「うん」

別荘の玄関の白い大きなドアを開けると、
なんの仕切りもなくただ海の見える大きな窓が広がった。

「……」
倫は感激のあまり言葉を失う。

「どうぞ」

「あ、うん」

広いリビングには大きなローテーブル、大きな真っ白いソファ、
暖炉が置いてある。

「今、暖炉に火つけるから、ソファに座ってて」
蓮は暖炉に薪を入れ、火をつけはじめる。
倫はソファには座らず、蓮が暖炉に火をつけているのを
「初めて見たぁ」と嬉しそうに見ている。

「フランスの家、なかった？」

「うん。セントラルヒーティングだったもん」

「そうか……」

パチ、パチッ……と音をたてて燃え出す暖かな色の炎。
さっきの夕陽に似てる……。
倫はしばらく暖炉の炎を見つめた。

倫と蓮は二人で楽しく話しながら夕食を作る。
今晩のメニューは倫が得意なローストポークにエスカベッシュにシーザーサラダ。
手際よく作っていく倫に関心しながら隣で手伝う蓮。
二人の幸せな時間。

料理を作り終えた二人は、
料理をローテーブルに並べると部屋の明かりをダウンライトの灯りだけにし、
買ってきたたくさんのローソクに灯を灯す。

「俺、六歳の時からクリスマスなんてしたことがなかったんだ」

ロウソクに灯る灯を見つめながら蓮は言う。
寂しげな蓮。

「……」

「クリスマスは……」
その言葉の先を言えず、蓮は真っ直ぐに自分を見つめる倫の顔を見つめた。

「……私は、パパが仕事で忙しかったから、いつもお手伝いさんと一緒に過ごしてた。
でも、朝起きると大きなぬいぐるみがベットに一緒に寝てた」

「そういえば、お前、お母さんいなかったんだよな」

「……うん」
倫はロウソクの灯を見つめた。

「俺も、いてもいないようなもんだけど」
瞳を倫からロウソクに移し、そっと寂しく微笑む蓮。
もう、十年以上会っていない母親。

「……どんな理由であれ、子供には両親が必要だよね」

「ああ……」

二人、親を失った理由は違うけれど寂しい子供の頃を送ってきた。
片親になる、両親と離れて暮らす子供の気持ちは痛いほど、よく分かる……。
だから……そんな思いをさせてほしくないし、させたくない……。

『私は大丈夫だから……』
倫はああ言うしかなかった。
彼女のコトじゃなく、彼女のお腹にいる蓮くんの赤ちゃんのコトを考えて……。

次の朝、二人は行きと同じように早い時間に電車に乗り二人が住む街へと帰る。
行きとは違い、帰りは刻々と早く進むように感じる電車と時間と……近づく駅。
二人は何も話さず無言のまま、お互い手をしっかりと握り寄り添いあう。
周りのこの空気も、この時間も……この手も……失いたくない。
そう強く想う。

「じゃぁ、また……」
蓮はニッコリ微笑むと倫を見つめる。
「うん。じゃぁ……」
倫もニッコリと微笑み返す。
それ以外、みつからない言葉。
二人は握った手をそっと離す。
「じゃぁ……」
「じゃぁ……」
二人はゆっくりと振り返るとお互いの帰る方向へと、一歩、一歩、

歩き出す。
倫の瞳から零れ落ちる涙……。
倫は溢れ出る涙を手で拭う。
「ぅっく……」
小さく肩を動かし指で口を押さえる。

「倫っ」
蓮は振り返り倫の名前を呼んだ。
「……っく」
慌てて涙を手で拭い、泣いていたコトに気づかれたくない倫は
思いっきり明るい笑顔で振り返った。
「なにー？」
「これっ」
蓮は振り返った倫に向けて、銀色に光る何かを、ふわぁ……と投げた。
えっ？
「……？」
倫は両手で掴んだその銀色に光る何かを見ると、
それはピンクシェルでできたバラがついたクロスのネックレスだった。
きれい……。
倫はネックレスを見つめ、そっと握り締める。

「それ、お前にやるよ」
蓮はそう言うと、振り返りまた歩き出す。

「ありがとう……」
遠ざかる蓮の背中を倫は見つめた。

涙が溢れてくる。

「んっ、っく……」

涙で蓮くんが見えない。
愛してる……蓮くん。
蓮くん……これからも愛してる……。
愛してる。
あいしてる……。
……ずっと、アイシテル……。
倫はネックレスを握り締め、何度も、何度も、ココロの中で呟いた。

蓮は俯き、ジーンズのポケットからタバコを出す。
ジッポを持つ手が震える。
渡してはいけないと思ったネックレス。
でも、俺には倫しかいない……今も、この先もずっと……。
たとえ倫と一緒にいられなくても……。
倫、お前を愛してる。
倫の笑顔、倫の白い肌……。
倫の生意気な……仕草……。
全部、愛してる。

倫、アイシテル……。

蓮くん……アイシテル……。

第35話悲しいプレゼント

新しい年を迎え、新たな気分でスタート？
大学が始まる。
クリスマスから蓮くんに会っていない……。
蓮くんから貰ったクリスマスプレゼントのネックレスは私の首元でキラキラと輝いている。
今でも信じられない。
ウソだったらどんなにいいのか、とも思ってみる……。
でも、どういう方向に進んでも、私にはもうどうするコトもできない……。

「お・は・よ・う！」
弾んだ里香の声。
今はこの里香ちゃんが少し救いかも。
里香は朝からニコニコスマイルの上機嫌。

「どうしたの？」
倫は上機嫌な理由を里香に聞いてみる。

「ふっ、ふっ、ふっ。彼氏できちゃった」

顔を手で押さえ照れくさそうに言う。

「え～！？いつぅ？良かったね、里香ちゃん」
自分のコトのように素直に喜ぶ倫。

「まぁ、さ、竹下くんよりは落ちるけどさ……」

里香は口を尖らせて言う。

「今度、会わせてよ」

「うんっ！今度、ダブルで行きますか？」

えっ……ダブル？そうか、里香ちゃんにまだ話してなかった。

「う、うん」

倫の表情が急に曇り空のような暗い表情へと変わる。

「そういえば、竹下くんは？」

里香は辺りを見回した。

「あ、今、忙しいみたいよ」

引きつる笑顔と咄嗟に出る言葉（うそ）……。

少し落ち込みかげんの倫を見て、里香は「喧嘩でもした？」と聞いたが、

倫は思いっきりブルブルっと首を横に振った。

「そう……」

そんな倫にしっくりこない里香は眉間にしわを寄せ倫の顔を覗き込む。

「急ごうっ」

「えっ」

「遅れちゃう～」

今はまだ何も言えない倫は里香の手を引っ張り教室へと走り出した。

蓮は今日も図書館で黙々と本を読んでいた。
その隣にいつもかったるそうにいるのは直樹と智史。

「お前、最近勉強しすぎ〜」
智史はぼやく。

「……」

別に勉強してるわけじゃなかった。
ここにいるのは考え事をするのに都合がいいだけ……。
最近、あまり図書館に行かなくなったと思っていたのに、
また図書館でこもりはじめた蓮を少し変だと思い「椎名となんかあった？」
と直樹はポツリと何気なく聞いてみた。

なんかあった？
図星……。
とんでもない図星。

「……」

本から目を離さず何も言わない蓮。

「あー」
直樹は頷きながらやっぱりという顔をしたがそれ以上蓮に何も言わなかった。
もちろん蓮も何があったかなんて直樹達には言わなかった。
言えなかった……。

今度は逃げてはいけないと思う。
今は、本当は誰とも会いたくない……。
でも、少しでも気を紛らわせようと大学に来る。
何も変わらない日。
そんな日が続く……。

ある日、蓮が図書館へ行こうとすると図書館の入り口にまみが立っていた。
少し痩せた感じのまみ。
まみは蓮の顔を見るなりに突然走り出した。
「ちょっ……」
蓮は自分を見るなりに走り出したまみを追いかける。
「おいってばっ」
追いついた蓮はまみの腕をぎゅっと掴んだ。
「痛いっ」
「走ったら危ないだろぉ」
息をきらしながら心配そうにまみを見る蓮を見てまみの胸はキュンとなる。
好きで好きでたまらない。
「離してっ、先輩には関係ないじゃん！」
まみは蓮から顔をそらし、おもいっきり蓮の手を振り払う。
「お腹に……いるんだろう？」

「……」
まみは振り返り蓮の顔を見上げた。
蓮はまみのお腹をあごでふっと指し「その子、俺の子なんだろ？」と聞く。

「そうだよ。先輩の赤ちゃんだよ」
まみは瞳に涙を浮かべ言う。

「だったら、もう、強がんな……。分かったから……」
蓮はそうまみに優しく言うとそっと微笑む。

「えっ？」
分かったって……？
まみは蓮の言葉に驚いた。
まさか蓮の口からそんな言葉が出るとは思わなかった。
まみの瞳から止まるコトを知らないかのようにたくさんの涙が溢れ出てくる。

「それって？」
分かったというコトは、答えはひとつしかない。
そう思うが、まみは蓮の両腕を掴み白い息を吐き聞いてみる。
蓮はまみの瞳を見て、少し寂しそうな表情を浮かべるとこくりと頷いた。

「ほんとうに？」
泣き顔から徐々に笑顔へと変わるまみの顔を見て、
蓮は優しく微笑むと「ああ……」とまた頷く。
まみは嬉しさのあまりおもいきり蓮を抱きしめた。

「ぐすんっ。嬉しい。まみ、いいお嫁さんになるから。

先輩に似合ういい女になるから」
大泣きするまみの腰に蓮はゆっくりと手をまわした。

倫の肌の温もりを忘れたくて利用した身体。
倫をこれ以上好きにならないように、無我夢中で無茶苦茶に抱いたまみの身体……。
その行動が、まさか本当に倫を忘れなくてはいけなくなってしまうなんて……
あの時は思いもしなかった。

蓮はまみを抱きしめそっと瞳を閉じると、
……ごめん……。
ココロの中で自分に向けて優しく微笑んでくれる倫の顔を浮かべ謝った。

大切なコトを教えてくれた倫。
倫、ごめん。
俺、今度は逃げない……。
今度は逃げない。

一月二十二日。
今日は倫の誕生日。
蓮が出した結論を倫はまだ知らない……。

朝。
蓮くんから久しぶりのメール。
…今日、帰り図書館で待ってて。…

いつもと変わらない短い蓮くんのメール。
でも、このメール、私には分かった。
誕生日のメッセージを伝えたいんではなく……サヨナラメール。

授業を終わらせ、図書館の前で蓮を待つ倫。
もう、涙は流さない……。
この一ヶ月、たくさん泣いたし、たくさん考えた。
何度か諦め、何度か夢であって欲しいと強く願った。
でも、こない蓮くんからのメール、蓮くんと会えない日々が
やっぱり本当なんだ……と……。

「よぉ……」
一ヶ月ぶり？ぐらいに会う倫と蓮。

蓮くん、フインキが違う。
目の前で止まる蓮を倫は見上げた。
髪の毛染めたんだ……。

「蓮くん、髪の毛真っ黒にしたんだ」
何も無かったように明るい口調で話す倫。

「あ？ああ……」
でも、蓮の顔からは笑顔はない。

もう、分かってる。
言葉にしてくれなくても伝わる。
少し震える身体と自分の腕をそっと掴む倫。

「話……あるんだ」

そう言うと蓮はアスファルトに目を向ける。

「……」

ドクンッ……ドクンっ……。

もう、分かってるはずなのに、真正面から『話……あるんだ』なんて言われると今まで以上緊張してしまう。

大きく動く心臓の鼓動が自分を支えきれなくなる。

「俺……」

蓮は閉じていた唇をゆっくりと開き言葉を出そうとする……。

重たく感じる心臓の鼓動が、今度は倫の呼吸を苦しくさせる。

ドクン……ドクン……ドク……ン。

心臓の鼓動が……物凄い音で聞こえる。

言わないで……もう、分かってるから……。

「分かってるっ！」

倫は咄嗟に蓮の唇に自分の手を押し当てた。

「……」

泣かない……泣かないって決めてたのに……涙が溢れてくる。

蓮は冷たくなった手で倫の手をそっとどかすと、

泣きそうな震える声で、一言「ごめん」と呟いた。

「……」

……ごめん……。

蓮は倫の手から自分の手を離し、
一瞬、瞳を閉じると握りこぶしを震わせ倫のもとを去って行った。
溢れ出していた涙が、蓮を諦めたかのようにウソみたいに止まる。
もう、涙さえでないの？
倫は綺麗な青い雲ひとつない空を見上げた。
どうして今日の空はこんなに綺麗……なんだろう？
もう……涙さえでない。
産まれてはじめて蓮くんから貰った誕生日プレゼント。
初めて本当に好きになった人から貰った誕生日プレゼント。
それは、
……サヨナラ―

第３６話後悔という名の責任

最近、また図書館に入りびたる元気のない蓮。
直樹はそんな蓮に「今度、四人で温泉にでも行かねぇ？」と誘う。
「ん、二人で行っておいでよ」
本を読みながら蓮は言う。
「……なぁ、蓮？」
「ん？」
「そういえばさ……」
蓮の隣に倫の姿がなくなったコトを不思議に思い、直樹は、椎名は？と訊こうとした。
その時、「お待たせ」
本を読む蓮に声をかけたその声の主を見て直樹は驚いた。
は、なんで？
「ああ……」
蓮は、当然驚く様子もなく、冷めた瞳で顔を上げると本を閉じ席を立った。
蓮の前に現れたのは倫ではなく須藤まみだった。
どういうコト？
直樹は驚きのあまり声を失い蓮の顔を見上げた。
「夜、お前んち行くわ」
蓮は直樹にそう言い、机の周りを片付けるとバックを肩にかけた。
「あ、うん……」
「直樹先輩、すみません。私、蓮と一緒に帰るんで……」とまみはニッコリと言う。
「あ、そう。じゃぁ……」
直樹はこの状況が読めず困惑した表情を浮かべる。

「じゃぁな、直樹。また後で」
「……」
蓮はまみと図書館を後にした。

どういうコト？何がなんだか直樹には理解できない。
やっとの思いで椎名と通じ合えたと思ったら、いつの間にか須藤まみと一緒にいる。
「訳が分かんねぇ」
直樹は机に肘をつくと大きくため息をついた。

夜。
蓮は、久しぶりに直樹の家へ行く。
「どういうコトだよ？」
直樹は、自分の部屋に入ってすぐに蓮の顔を見てムッとしたように訊く。
「……」
蓮は、何も言わず、缶ビールとつまみが入ったビニール袋をローテーブルの上に置くとクッションの上に座った。
「椎名倫は？」
直樹は、あえてフルネームで倫の名前を口にし、腕を組み単刀直入に訊く。
さっき図書館で聞きたかったが、まみが現れ聞けなかった。
「……」
プシュ。
ビールの缶を開け俯く蓮。
「間違っても、やっぱ好き過ぎて付き合えないなんて、俺には言うなよ」怒り口調気味に訊く。
「……」

それでも何も言おうとはしない蓮。
直樹は、ビニール袋の中に入った缶ビールを荒々しく取り出すと、ビールを一気に飲み干した。
「っぱー。言いたいコトがあるならさっさと言えよ」珍しく苛立つ直樹。
蓮は、缶ビールをビニール袋の中からまた取り出し「子供ができたから、須藤まみと一緒にな
る……」と直樹の顔を真っ直ぐ見つめ真剣な表情で告白した。
「はぁ？」
直樹は、耳障りになったうるさいテレビの電源を切ると、蓮の前にどかっと座った。
「……」
「あほか、お前？」
いつも穏やかな直樹が物凄い荒々しい口調で蓮に言い放つ。
「あほ……だな？」
ふと諦め笑いをしながら缶ビールの栓を開けまたビールを飲む蓮。
「好きでもない女と結婚したって上手くいくわけないだろうがっ」
「好きな女と結婚したって分かんないよ。そんなの……」
直樹の言葉に反論するように蓮は答えた。
「なっ……」
直樹は、蓮の言葉に首を傾げ呆れ果てる。
「……直樹、俺が今までしてきたコトって、いつかはこうなるん運命だったんだろうな」
蓮は、直樹の部屋の天井を見つめ、深くため息をつく。
「……」
「こんなんなるんだったら、もっと早く倫に素直になっとけばよかった。……こんなんなるんだっ
たら、ウチの親みたいにお互いが嫌いになってから別れた方がなんぼか楽だよな」

蓮は、悲しげに笑った。
「蓮……」
「結局、少ししか始まらないうちに自分から倫を失うハメになっちゃったよ」
苦笑から徐々に泣き顔へ変わっていく。
「蓮……」
「やべぇ……うそ。俺……ごめん……」
蓮の瞳から涙がこぼれた。
倫が、好きで好きでたまらない。
あんなに好きになれる女はもう現れない。
蓮は、おでこに手をあてるとビールを一気に飲みほし、たえきれず泣いた。

……なんて声をかけたらいいのか分からない。
直樹はしばらく泣く蓮の姿を、ただ黙って見ていた。

しばらくし、黙っていた直樹が口を開いた。
「認知って、カタチじゃぁ……いけないのか？」
蓮は、直樹の顔を見た。
それでもいいかもと、蓮も一度は思った。
「……」
でも……。
『……子供には両親が必要だよね』倫の言った言葉が頭をよぎる。
「別に、結婚までしなくてもいいんじゃないか？」
そう言う直樹に、蓮は首を横に振った。
「ダメ……なんだ」
「なんで？分かんねーよ」
「そんなコト、あいつが許すわけない……」
「そんなコトないだろ？だってお前達は……」
蓮は、直樹の言葉を遮るようにばっと立ち上がると、カーテン

を開け曇る窓を手で拭き外
を見つめた。
祖父母の家の自分の部屋の窓から、いつ迎えに来るんだろう？と待つ小学生の自分がいる。
きっと、母親を失った倫も父親の帰りを窓の外を見て待っていたんだと思う。
会ったコトがない小さい頃の倫を想像し、思い浮かべてみる……。
窓の外、景色は違うけど……。きっと二人は同じ気持ち。
同じ寂しさ……。
「俺達……小さい頃、お互いに寂しい思いをしてきたんだ」
「……」
「俺は両親と離れ、倫は母親を亡くして……」
蓮が、両親のせいで寂しい思いをしてきたコトは、小さい頃からずっと一緒にいたから直樹も
知っている。
「蓮……」
「だから、自分の子供にはそんな思いをさせたくない……」
倫だけじゃなく、それは俺でも強く思う。
「本当にお前の子なのか？」
直樹の疑いに蓮はそっと頷く。
「ああ……。俺は、倫を忘れたくてあいつを無茶苦茶に何度か抱いた」
「だからって……」
「だから……」
蓮は、曇り始めた窓ガラスを拭き、また窓の外を見つめた。
「だから？」
「……責任」

今さら、後悔しても、後　後悔という名の責任。

悔しきれない……。

責任……。

第37話小さな生命（いのち）

倫に別れを告げ、少し経った後、蓮は、父、翔に電話をした。

「親父？蓮だけど……」

祖父母の家に預けられてからめったに話したコトがない、

高校卒業以来に聞く父親の声。

「俺、大学辞めて働くから……」

蓮の言葉を遮るようにして怒鳴る電話の向こうの声。

「あー、子供ができたから結婚する。じゃぁ、用件はそれだけ……」

大学を辞め働く理由を口にする蓮の言葉に戸惑い焦った電話の向こうの

父親の声を無視するかのように、蓮はまだ話している父親との電話を勝手にきった。

初めて聞いた親父の焦った声。

『一度、家に帰って来い……』

どうしても、大学は辞めてほしくないらしい……。

父、翔が再婚した秘書との間には、娘一人しかできなかった。

要するに後継ぎは蓮しかいない。

蓮は『経営学部へ進め』と言う翔の反対を押しきって法学部へ進んだ。

次の日曜、あまりにも毎日しつこく携帯電話に電話してくる父親に観念し蓮は家へ帰った。
十五年振りに帰る家。
十五年振りに帰った家の中は当たり前だが、母親がいた頃とは違っていた。

「お久しぶりです」
蓮は、翔と継母、久子に他人行儀にお辞儀をする。

「元気そうね」
優しい久子の笑顔。

「あ、はい……」
蓮は目線を逸らし返事をした。

父、翔の話は『結婚は許すから、うちの会社で働きながら大学へ通い、
大学は必ず卒業しろ』……と。
蓮は、考えると一言。
『夕食を一緒に……』と言う久子の誘いを断り、家を後にした。

倫に会いたい。
まみといても思い出すのは、倫の仕草、倫の笑顔。
あの後、倫はどうしたんだろう……？
別れを告げようとした時、倫が押さえた自分の唇にはまだ倫の手の温もりを感じる。
このままずっとこの感覚が残ればいいのにと願う。

「俺、らしくないよな……」
ポツリ呟く蓮。
「ん、何？」
蓮は隣にまみがいるのを忘れてた。
「あ、お前んちと病院行かないとな……」
「びょっ、病院はいいよ。恥かしいから一人で行くよっ」
病院という言葉に反応し急に慌てるまみ。
なんだろう？
気にはなったがそんなコトはどうでもよかった。
蓮の頭の中は倫のコトでいっぱいだった。
まみが隣にいようが関係ない……。

ある日、倫が図書館で調べ物をしていると、
倫の読んでいる本の上に里香がバックをドカッと置いた。
「ちょっとぉ」
怒っている様子の里香。
「どうしたの？」
「倫、何か言うコトないん？」
「……」
首を傾げ黙ったまま里香の顔を見る倫。

ペチッ！
里香は何も話そうとはしない倫の頭を叩いた。
「バカッ！なんで一人で苦しんでんの？」
「里香ちゃん？」
「何も役に立たないかもしれないけど、泣く肩ぐらいは貸せるんだよっ！」
里香の言葉に倫の瞳から涙が溢れ出した。
「もう、涙……枯れちゃったよぉ」
「バカッ～」
里香はイスにそっと腰を下ろすと泣き出す倫を抱きしめた。

倫は今までのコトをすべて里香に話した。
「そんなコトあってん。……ごめん、何も気づかなくて」
「もう、いいんだ。終わったコトだから……」
倫は涙をハンカチで拭き、ニッコリと微笑むと本を取りに立ち上がった。
ふわぁ……。
その時、突然、身体の感覚がなくなり目の前が真っ暗になると意識が遠のいていくのを感じた……。
意識がうすれていく……。

「倫っ！？」
里香ちゃんの声が遠くに聞こえる……。

倫はしばらくして目を覚ました。
見慣れない天井。

「倫、気がついた？」
心配そうな表情で里香が目を覚ました倫に声をかけた。

「ここは？」
起き上がり何処だろうと辺りを見回す。
まだ少しフラフラする。

「医務室だよ」

医務室のベットの中。
私、どうしたんだろう？

「椎名さん気がついた？」

「あ、はい」

「あなた、最近、目眩するの？」
目を覚ました倫に医務室の先生が聞く。

「いいえ、初めてです」

小さい頃から身体は丈夫で貧血なんて初めて。
ここんとこ、ずっと色々なコトがあって寝不足だったからな…

…。

「もう少し休んで、もし時間があったら大学病院に寄って行きなさい」

「はい……」

「もう少し寝てた方がいいよ。私、ついてるから」

里香は倫を布団の中に寝かせた。

「うん……」

倫はベットの中であるコトに気づいた。

そういえば誰が私を……?。

もしかしたら……と思い、期待をする。

「今日、私、時間があるから帰り一緒に病院寄って行こう」

里香の言葉に倫は頷く。

「里香ちゃん、そういえば誰が私をここに?」

倫の質問に里香は俯くと、「孝司、先輩だよ……」と小さな声で答えた。

「……」

孝司先輩……。

「会ったら、お礼言っとかないとね」

「……うん」

私、何、期待してたんだろう……？

蓮くん……かな？なんて期待しちゃった。

だいぶ落ち着いた倫は帰り里香と一緒に大学病院へ寄った。

「んー、風邪はひいてないね。念の為に、血液検査と尿検査をしておこうか？」

「はい」

「倫ちゃん、お父さんは元気かい？」

「はい」

大学病院の内科担当の小田先生は倫の父親と幼馴染。

「また、こっちに帰ってきたら、来いって言っといてくれよ」

「はい、おじさん」

「じゃぁ、向こうで検査して、結果が出るまで待っててね」

「はい」

「倫、どうだった？」

診察室から出てきた倫を中待合室で待ってた里香は心配そうに聞く。

「今から、一応検査して、結果待ち……」

「そっか」

少し安心した里香は倫と一緒に検査室まで歩いた。

院内を見渡す倫。

「病院……来ると思い出す」

強張る倫の表情。

「お母さん？」

「うん……」

四歳だった私でもいまだ鮮明に覚えてる。

思い出したくない……記憶。

『ママは天使になったんだよ』パパの言葉。

三十分くらいして、待合室で座る倫は看護婦に呼ばれ、また診察室へと入る。

おじさんの険しい表情。

「倫ちゃん、座って……」

「はい……」

私、何か悪い病気なの？

緊張が走る。

倫は緊張し、検査結果を見つめるおじさんを見ながらゆっくりとイスに腰をかけた。
そんな緊張の中、おじさんはふーっとため息をつくと「最後、生理いつ来たか覚えてる？」
と聞いた。

えっ？
何のコトか分からずに頭の中で数えてみる。
十二月……十一月……十月……。

「あ……」
そういえば……ずっと、きていない……。
「十月……二十……三日、です……」

おじさんはやっぱりという顔をすると
「倫ちゃん、妊娠してるよ」と、倫の目を見た。

予期せぬ発せられる言葉。

妊娠……？
頭の中が真っ白になる倫。
ええ……？。
私……蓮くんの赤ちゃん？
私のお腹に蓮くんの赤ちゃん……？私に、赤ちゃん？
真っ白になった頭の中で懸命に色々な言葉を並べる。
真っ白になったまとまらない考えられない頭の中で必死に何処かへ辿り着こうとする。

「私……」
コンガラガッタ頭の中で、思ったコト……辿り着いたトコ……。

正直の思ったコト。

私、蓮くんの赤ちゃん産みたい……。

第３８話倫の選んだ道

嬉しかった。
小さな命。
この言葉しか思いつかない。

倫は、診察室から出てしばらくぼんやりと立っていた。
一点を見つめ何か考え事をしているようにただ立っている。
そんな倫に「倫、どうしたの？嫌だ……なんか言われちゃったの？」
放心状態の倫の服の袖をひっぱる里香。
虚ろにボッーとした視線はやがて里香へと移っていく。

「里香ちゃん」

「里香ちゃん。じゃ、分かんないよっ！」

「里香ちゃん、私のココにね……」
倫は嬉しそうに自分のお腹を優しくさする。

「うん。お腹がどうしたの？」
里香は心配し焦りながら不思議そうに倫のお腹を見る。

「あか……ちゃん」

「うん。赤ちゃん」

えっ！？
里香は目を丸くし驚いた。

「ここに、蓮くんの赤ちゃんがいるんだって」
ニコニコと微笑みお腹を愛しそうにさする。
そんなのんきな倫とは反対に自分のコトではないのにあたふたとしだす里香。

「どうすんの倫っ！？」

「……」

そんな里香を置いて倫は黙って歩き出す。

「倫っ！今から竹下くんのとこ行こうっ。今ならまだ間に合うよっ」
里香は歩き出す倫の手をひっぱった。

「里香……ちゃん」
倫は振り返り里香の顔を見つめた。

そう、今なら……。
今ならまだ間に合うって、私もそう思った……。

けど、倫は首を振った。

「……どうして？」
そんな倫に震える声で悲しそうに里香は聞く。

一瞬でもそう思ったけど、けどね……里香ちゃん……。
倫は、自分もそう思ったというコトは里香に言わず、
「もう、蓮くんとのコトは、終わったコトだから……」

そう……終わったコト……。
自分に言い聞かせるようにそう里香に口にした。
里香にはそう答える倫の気持ちが理解できなかった。
「どうして？好き合ってるのはあの子と竹下くんじゃなくて、倫と竹下くんだよ」
「……」
「倫っ！」
「でも、もう、終わったコトだから……」
倫は頑なにそのコトを言い通しまた歩き始めた。
あの子のお腹にも蓮くんの赤ちゃんがいる。
「私、分かんないよ」
里香は怒りにもとれる震える声で倫の背中に向けて言う。
「里香ちゃん」
倫は振り返り真剣な眼差しで里香の顔を見つめた。
「倫……」
きっと、今、このコトを口にしたらあの子のお腹の蓮くんの赤ちゃんは……。
そんな悲しいコト、私にはできない。
「里香ちゃん。ごめんだけど、もし、

蓮くんに会ってもこのコトは絶対に言わないで……ねっ」
「倫。バカでよ……あんた、大バカよ」
あまりにも強い眼差しで言う倫に里香はこれ以上何も言えなかった。
ただ、ただ、倫の代わりに瞳にいっぱいの涙を浮かべるコトしか……
泣くコトしか、してあげられない……。
「……そう……だね？」
倫は自分の為に泣いてくれる里香を見てそっと微笑んだ。
恋には不器用すぎる倫。
自分より相手のコトを考えてしまう倫。
そんな倫が、私は歯がゆいよ。
倫、あんた……大バカだよ……。
あんた、本当にいい子なんだから……。
「倫っ」
里香は駆け出し倫を思いっきり抱きしめた。
「里香……ちゃん」
倫も里香をぎゅっと抱きしめ里香の肩で涙を流した。

＊　＊

そんなコトを知る由もない蓮は、日曜日、父、翔とまみの自宅へ足を運んでいた。
当然、まみとの結婚の話。
まみは今学期いっぱいで大学を中退するコトになった。

蓮とまみの結婚式の予定は大体三月の下旬ということになった。
三月……。
後、二ヶ月ぐらい……。
決めたはずの気持ち。
……まだ固まるコトのない自分の気持ちとは裏腹に話はとんとん拍子に進んでいく。

「俺、ここで降りるわ」
蓮は駅前で車を止めてもらい車を降りる。

考えたくない。
誰ともいたくない。
マンションまでの道を蓮はタバコを吹かしながら歩いた。

倫はあれからずっと考えていた。
私っていつも冷静。
大学のコト。
パパのコト。
これからシングルマザーとして生きていくコト。
本当なら不安でたまらないはずなのに、意外と前向き。
蓮くんの赤ちゃんを産みたい……。
どうしようなんて思わない。
もう、この子は私のお腹で生きてくれてる。
私を、選んで生きててくれてる。
私が、幸せにしてあげるから。
そう、強く決心をする。

次の日、倫は大学へ行く前、大学病院へ寄る。

「どうかね、調子は？」

「つわりとかも全然なくて……」

エコーの写真を見ていないと本当は間違いなんかじゃないかと思うくらい普通の身体に感じる。

「倫ちゃん。もう少ししたら人工中絶は勧められないよ」

おじさんは険しい表情と口調で言う。

「おじさん、私、産みます」

倫はきっぱりと答えた。

そんな倫に驚くおじさん。

「彼氏は知ってるの？」

「もう、別れました」と小さい声で答える。

「お父さんは、なんて？」

「まだ、なにも……」

でも、パパの言葉が出ると少し暗くなる倫の表情。

「お父さんとよく話し合って、また来なさい。その時、産婦人科に連絡するから……」

おじさんはそう言うとパソコンをうち始めた。

倫は、父、良明に黙ってフランスへ帰ろうと考えていた。

言ったら、絶対、反対する。
そんなの当たり前。
片親の苦労もよく知っている。
でも、もう決めたコトだから……。
蓮との別れと同様に強く決心する。

大学のキャンパスを俯き歩く倫。

ドンッ！
痛っ！
人にぶつかった拍子に何冊かの本が倫の足の上に落ちてきた。
「ごめんなさいっ」
落ちた本を拾おうと慌ててしゃがみ込んだ倫は相手の顔を見て驚いた。
「……」
ぶつかった相手は孝司だった。
「倫ちゃん」
倫の顔を見てニッコリ微笑む孝司。
二ヶ月ぶり。
「先輩っ！」
「調子は良くなった？」
倫は拾った本を地面に落とし立ち上がる。

「あ、こ、この間はどうもありがとうございました」
場に困った倫は戸惑いオロオロとこの間のお礼を言う。
孝司は本を拾い「どういたしまして」と冷静に本についた砂を掃う。
久しぶりに見る孝司の優しい笑顔に倫はホッとした。
微笑み合う倫と孝司。
そんな二人を図書館の前でまみの授業が終わるのを待っていた蓮が偶然見ていた。
壁にもたれ二人を見る蓮。
ポケットからタバコの箱を取り出し、タバコに火をつける。
「蓮、お待たせ」
まみは、図書館の壁にもたれて待っていた蓮の肩をポンっと叩いた。
「……」
全く気づかない蓮。
「蓮？」
まみは蓮の顔を覗き込み、瞬きもせず何かをずっと見つめている蓮の視線の先に目を向ける。
その視線の先……。
蓮のその視線の先には倫がいた。
まみは周りと倫に聞こえるような大きな声で蓮をもう一度呼ぶ。
「蓮っ、待ったぁ？帰ろっ！」
その声は、一番に倫に気づかせてやろうという思いで大きな声で……。
蓮はその声に驚き、タバコを地面に落とすとまみを見た。

「あ、須藤……」
倫も孝司もまみが呼んだ名前とその大きな声がした方を見る。
そこにはまみとタバコを拾う蓮がいた。

蓮くん。
倫は蓮を見た。
蓮も倫を見る。
そらしたいけど二人とも目をそらすコトができなかった。
なぜなら、そこには、会いたかった、倫、蓮がいたから……。
見つめ合う二人。
そんな二人に嫉妬したまみは蓮の腕をぎゅっと掴み
「早く行こうっ」と蓮を連れて歩いて行ってしまった。

「はぁ……」
倫の口から大きなため息がこぼれる。

蓮の腕をしっかり掴むまみ。
まるで『蓮はもう私のモノよ』……と、宣言されてるみたい。

「倫ちゃん、大丈夫？」

「はい、全然」
倫は明るく笑ってみせた。
本当は全然大丈夫じゃないし、全然平気じゃない。
でも、どうしようもない。
もう……あの頃に帰ることはできない。

まみは隣にいる蓮を見つめた。
隣にいる蓮。

私の隣にいる蓮。
もう、私のモノだよね？蓮に直接聞きたいけど、それだけは聞けなかった。
答えは分かってる。
でも、好きで好きでたまらない。
まみも苦しかった。
隣にいても蓮のココロの中には私は砂の粒の大きさも無い……。
分かってる。
でも、欲しかった。
どうしても欲しかった。
あんなコトしてまでも蓮が欲しかった。
私も蓮をどうしようもなく愛してる。
だから私は蓮を離さない。

第３９話ほんとうのコト…君は知らずに

粉雪がちらつく金曜日。
倫は大学の事務室で大学を辞める手続きをしている。

「ありがとうございました」
手続きを済ませ、倫は辺りを見ながらゆっくりと歩いた。
この芝生の上。
この道……。
みんな、蓮くんとの思い出ばかり……。
倫は少し微笑むと「私、諦め悪いのかな？」と呟く。
思い出にひたっていられないね。
もう、前に進まなきゃ……。

「がんばろう！」
倫は自分のお腹を見つめそっと触り、自分に言い聞かせ自分を励ます。
「……」
顔を上げた倫は少し離れた所で、蓮がこっちを見て立っているのに気づいた。
ゆっくり近づく二人。
「よぉ！」
「よぉ！」
蓮のかけた言葉をそのままぶっきらぼうに言い返す倫。
「元気？」
照れくさそうな蓮。
「元気だよ。蓮くんは？」
倫は生意気な顔で訊き返す。
「元気だよ」

「そう、よかった……」
『元気だよ』と返事する蓮に安心と寂しさを感じた倫は俯いた。
蓮はジーンズのポケットからタバコを取り出しタバコに火をつけた。

しばらく沈黙のまま立ち尽くす二人……。
時間がこのまま止まってしまえばいいのに……。
私達にはそう思うコトも、もう許されないんだよね？
静寂な二人の間、時折二人の耳に入ってくるキャンパスを歩く学生の楽しそうな声。
少しして倫がゆっくりと口を開いた。
「蓮くん、彼女と幸せにね……」
精一杯の明るい声、精一杯の満面の笑みで……。
「……」
そんな倫の笑顔を見てたら抱きしめたいと思う。
けど、できなかった。
今、ここで倫を抱きしめてしまえば、二度と離せない。と思ったから……。
蓮はくわえてたタバコを手に持ちかえると「お前、やっぱ笑うと可愛いよ」
切なそうに微笑し、少し震えた右手で倫の頬にそっと触れた。
倫……愛してる。
「……」
冷たい蓮くんの手……。
泣きそうな自分。
必死で堪えてる。
……今度こそ、本当のバイバイ。
「バイバイ……」
別れを口にしながら蓮は倫の頬からゆっくりと右手を離していく。

もう、きっと、二度と会うコトはないと思う……。
倫の前から消えていく蓮の姿。
「蓮……くん」
さようなら……。

三月に入り、慌しくなってきた。
蓮はまみと街の産婦人科の待合室にいる。
「須藤さん、お入りください」
アナウンスが流れる。
「蓮、来てくれる？」
「えー、ここで待っててやるから行ってこいよ」
まみは一人で診察室へ入っていった。
「座ってください」
「はい……」
まみは産婦人科にくるのはこれが初めてだった。
「もう、四ヶ月月経が来てないの？」
「はい」
「うーん……」
まみは先生が申し訳なさそうに口に出した言葉に、言葉を失った。
「……」
診察室を出たまみは、イスに座り雑誌を読んでいる蓮の姿を見つめた。
「終わった？」

「うん。五ヶ月に入ってるんだけど……赤ちゃん、ちょっと弱いみたい」
不安そうに震えるまみを蓮はそっと抱きしめた。
「結婚式、延期しようか？」
「うんん、イヤ」
まみは首を振った。
延期……なんかしたら……。
まみは蓮をぎゅっと抱きしめた。

その頃、倫は里香と大学病院の産婦人科に来ていた。
「もう、五ヶ月に入ってるけど……んー」
ボールペンを上下に、心配そうな先生の顔。
「……」
「どうしてでも、帰るんだよね～？」
倫はコクリと頷く。
「十二時間のフライトかぁ……」
倫は今学期の終了を待たずにフランスへ帰るコトにした。

「お待たせ」
「先生、なんて？」
「あはは、んー。って、ずっと言ってた」
苦笑いする倫。
「そりゃぁ、そうだ。妊婦がフランスに行くなんて……」
里香は納得した顔で言う。
「そうだよねぇ……」
微笑む倫を見て、里香は「寂しくなるね」と呟いた。

「色々ありがとうね。里香ちゃん」
倫はこれまでの里香への感謝の気持ち込めて里香をぎゅっと抱きしめた。
「見送り、行けないけど帰国した時には必ず電話頂戴ね」
「うん」
「倫……」
「ん？」
里香は、もう一度竹下くんに会ったら？と言おうと思ったが、言うのを止めた。
明るく前に進もうとする倫の決心が固かったから……。

＊　＊　＊

病院の帰り、蓮とまみはお互いの母親達と待ち合わせしている結婚式場へ寄った。
今月の終わりにある結婚式のウエディングドレスを決める為。
たくさんの純白のドレスをまみは嬉しそうに選んでいる。

「ねぇ？蓮。どれがいいと思う？」
今日は一段とボーっと窓の外を見ている蓮。
少し弱いと言うまみが言った子供のコトを考えていた。
もし、子供がいなくなってしまったら……。
この結婚は無意味になる。
あの日から、ずっとこのコトが頭から離れない。

「蓮っ！」
「あーごめん。何？」
興味がなさそうな浮かない顔で蓮はまみを見た。

「どれがいいと思う？」

まみは両手に純白のドレスを持ち、嬉しそうに蓮の前にドレスをかざす。

「んー、こっちでいいんじゃない？」

蓮はマーメードラインのドレスを指した。

その蓮の選んだドレスをまみの母親は気に入らなさそうに触れると

「そうかしら？まみは顔が幼いからこっちのミモレ丈のリボンが付いた

ドレスの方が合ってると思うわ」と言う。

「んー、なら、そっちにしたらいいじゃん？」

全く他人事の蓮。

「……」

まみはそんな蓮の態度が気に入らなかった。

今日だけではなく、結婚式の話もなんの話をしててもうわの空。

『んー、そう……』

ただ、なんとなくされるがまま、なるようにしかならない、

そうしたいならそうすれば？そういった諦めの感じで。

まみは、ドレスをかけ、選ぶ手を止めて俯いた。

「まみ？」

母親たちは不思議そうな顔でまみを見る。

「もういい……」

「……」

どうしたのか分からないみんな。

「もう、いいよ蓮」

「……」

まみは蓮を見て、大きくため息をついた。

「はぁ～。妊娠なんて、ウソ」

「えっ？」
驚くみんなはただ口をポカンと開けまみを見る。
開いた口がふさがらない……まさにそんな状態。
蓮は大きく目を開けたまま見動きせずまみを見る。
「赤ちゃんなんていない。みんなウソ……」
「まみっ！どういうコト？うそって？」
まみの母親がまみの身体を揺する。
「本当は分かってた。妊娠なんてしてないかもって……でも、先輩が欲しかった」
「……」
何も言わずただまみを見る蓮。
「でも、もしかしたら生理不順じゃなく、ホントかもって……」
まみの目から大粒の涙が零れ落ちる。
「まみ、あなたって子はっ……」
まみの母親は、まみの肩を何度も叩きながら同じように涙を零す。
「どんな手を使ってでも、先輩が欲しかった」
そう言うとまみは泣き崩れた。
「俺とあいつ……どんな思いで別れたと思ってんだよ……」
気が抜けたように壁にもたれ、力ない目でまみを見る。
「ごめんなさい、ごめんなさい」
まみは何度も何度も謝ったが、蓮は俯いたまま、ただ、ただ、黙っていた。

あれから蓮は色々考えていた。
もちろん、まみとの婚約は破棄。
『妊娠はウソだった』そう言いに倫に会いに行こうと思った。
けど、蓮は行けなかった。
倫を傷つけてばかりいる。
泣かしてばかりいる。

こんな俺があいつの前に行けるのか？
あの日の、孝司と笑う倫の顔が目に浮かぶ。
あいつといた方が幸せになれる。
勝手にそう思い臆病になっている。
人を好きになるって、簡単のようで簡単じゃない。
愛してれば愛してるほど……。
本当に大切な女（ひと）

蓮はベットに倒れ込んだ……。
「倫……」

＊　＊

とってもいい天気の金曜日。
空港へと向かう倫。
空には雲ひとつない。
「あと少ししたら春だね」
お腹の子に話しかける。
この景色ともしばらくお別れだね。薄っすら浮かぶ涙。
蓮くん、あなたとはずっと……ね。

その頃、蓮は大学内を走っていた。
何かを吹っ切ったかのように必死で倫の姿を探す。
俺にはやっぱり、倫しかいない。
こんな俺でも……倫、やっぱりお前が必要。
「竹下くんっ！」
必死に倫の姿を捜し走る蓮を誰かが止めた。
立ち止まり振り向く蓮。

……呼んだのは里香だった。
蓮は息を切らしながら里香に聞いた。
「里香ちゃん、倫、見なかった？」
暗い顔をする里香を不思議に思う蓮。
「……言わないでおこうと思ったんだけど、竹下くんを見て、つい……」
「えっ？」
なんのコトか分からない。
「倫、今日、フランスに発つの……」
その言葉で一瞬にして目の前が真っ暗になる蓮。
「えっ？」
もう一度、聞き間違いかと思い聞き返す蓮。
「倫、今日十一時四十五分発の飛行機でフランスに発つの」
十一時四十五分？
蓮は携帯電話の時計を見た。
今なら、まだ、間に合うかも……。
「ありがとうっ」
そう里香に言い、また走り出す蓮。
「竹下くんっ、倫はっ……」
里香は倫の妊娠のコトを言おうと思ったが、やっぱり言うのを止めた。
倫の、二人の、せっかくの決心を無駄にしていけない。
二人は必ず会える……。
それを言うのは、最後に竹下くんに会えた倫が決めるコトだから……。
「神様、最後にもう一度、二人を会わせてあげて……」
里香は小さな声で言った。
人目だけでもいいから……あの二人を会わせてあげて……。

「倫、お父さんをよろしく頼むな」
「うん」
ニッコリ頷く倫。
「きよつけて、丈夫な子を産むんだよ」
祖母は目に涙をいっぱい溜めた。
「うん」
「いつでも、帰っておいで。お婆ちゃんとおじいちゃん楽しみに待ってるから」
「うん、ありがとう。また、帰ってくるよ。元気でね」
倫はパスポートを取り出し、搭乗口へと向かう。

空港に着いた蓮は走りながらロビーを見回した。
「倫っ！」
走りながら倫の名前を何度も呼ぶ。
だが、倫はいない。
「リ……ン……」
蓮は足を止め、立ち止まった。
倫が乗った飛行機は、今さっき飛び立ったみたいだ。
ガラス越しに空を見上げる蓮。
ジーンズのポケットからタバコを取り出す。
「畜生……カラじゃん……」
蓮はごみ箱にタバコの空箱を投げ捨てると空港を後にした。

第３９話ほんとうのコト…君は知らずに（後書き）

次回は最終回です。

二人…出会えたから（前書き）

最終回です。

二人…出会えたから

一年後。

意識不明な祖父と残された椎名医院と祖母の為、倫達は日本に帰国した。

まさかこんなに早くこの空の下に立つとは倫は思いもしなかった。

蓮と彼女が子供と暮らしているかもしれないこの街に……。

春の日差しが心地良く照らしている。

倫は、今、語学教室のフランス語教師をしている。

電車のドアが開き、倫はいつものように一両目の真ん中の二人用のイスに座る。

このセキは大学生だった倫がお気に入りだったトクトウセキ。

もちろん今もそう……。

倫はバックから本を取り出し読みかけのページを開く。

発車時刻になり電車のドアが閉まりかけたと同時にスーツを着た男が

駆け込み乗車し倫の隣にドカッと座った。

その拍子に倫の読んでいた本の一ページが折れた。

あっ……。

男はそんなコトは知らずバックで自分を仰ぎ始める。

もぉ……。

倫は本を読みながら隣に座った男に腹をたてたが、

前にもこんなコトがあったコトを思い出す。
そういえば前にもこんなコトがあった。
初めて蓮と会った時のコトを思い出す。
丁度こんな頃。
暖かい日差しが窓の外から私を照らしてくれてた……。
今でも鮮明に覚えてる……。

「ふふっ」
倫は思い出し笑いをし、微笑みながら隣に座る男の横顔を見た。

「……」

男は、蓮……だった。

倫は声もかけずに、ただ黙ってじーっと蓮を見つめる。
蓮はバックで扇ぐのを止めるとふーっと大きく息を吐いた。
何か視線を感じる……。
蓮はまたかと思い迷惑そうに隣に座る女の顔を見た。

「……」

倫……だった。

二人は思いかけない再会に無言のまま見つめ合う。
倫と蓮、二人の間の空気だけが止まっているそんな感じがする。

電車に乗っていればいつかは会えるんじゃないかと
思っていた倫の姿が目の前にある。
蓮は嬉しさのあまりニッコリ笑いかけると「お前、笑った方が可

愛いと思うよ」
初めて会った時のように倫に声をかけた。
「まだそんなコト言ってるの？」
倫は呆れた顔で蓮を睨む。
「まぁね」
おもいっきりニッコリと笑う蓮
一年以上ぶり。
変わらない二人。
「一年ぶりだね」
そんな蓮に倫はニッコリと微笑んだ。
「ああ……」
倫は色々聞こうと思った。
蓮の子供のコトとか、幸せ？とか……。
蓮は言おうと思った。
結婚はしなかったとか、あの日、空港へ行ったんだ……とか。
二人は何を話したらいいか分からず色々考えてると電車は次の駅で止まった。
「あっ！」
倫は辺りを見回し、慌ててバックに本をしまう。
「どうした？」
「私、ここで降りなきゃ。じゃぁ……」

後ろ髪ひかれる思いでセキを立つ倫。

「えっ？ああ……」

なぜか蓮も倫につられ慌てて一緒にセキを立つ。

「さよなら……」

倫は少し寂しそうな表情を浮かべると蓮に頭を下げた。

「あ、うん……」

また蓮も何か物足りず、寂しげな表情をするとゆっくイスに腰を下ろす。

電車の中の蓮にニッコリと笑い手を振り歩いていく倫。

蓮が結婚をしていないというコトも知らずに……。

「はぁ……」

蓮は倫が見えなくなるまで見送ると俯き大きくため息をついた。

突然の倫との予期せぬ再会に何も話せなかった。

「ダメだ、俺……」

倫の心臓の鼓動はあの時のように壊れそうなくらい早く動いている。

今も蓮くんが好き。

蓮くんを愛してる。

帰国し、いつかは再会するかもしれない蓮に、いざ再会してみると、

前以上に蓮が好きだと思い知らされる。

倫の頬を一粒の涙が流れ落ちた。

「やだ……」

どうしよう……。
泣くのを必死で堪える。
苦しくて胸が張り裂けそう……。
けど、倫は前を向いた。
もう、終わったコト……だよ。……そう自分に言い聞かせ。

午後六時三十分。
仕事を終えた倫は急いで駅に向かう。
改札で駅員に急いで定期入れを見せ、階段を駆け上がる。
四十分。
この電車に乗らないと間に合わない。
倫には、杏という八ヶ月になる女の子がいる。
そう、蓮との間にできた大切な子供。

駅に着き、電車のドアが開くと今度は一目散に電車を降り歩き出す。
早く杏に会いたい。
早く会って、『ママ、今日、あなたのパパに会ったんだよ』って言いたい。

急いで歩く倫らしき姿を、後部車両から降りた蓮は見つけた。
改札口を抜け、家とは違う方向へと歩いていく倫。
自分のマンションと同じ方向。
同じ方向を歩く二人。
蓮はタイミングを見計らい行き急ぐ倫に声をかけようと、足早に倫の後ろをついて歩く。

「あいつ、急いで何処に行くんだろう？」
あまりにも急ぐ倫のコトを不思議に思う。

しばらくあとをつけていると、倫はあるマンションの一階の店舗の前で足を止め、
中に入っていった。
蓮も立ち止まりその店の中を覗いてみる。
えっ？
その場所に蓮は驚き、店舗の看板を見上げる。

「あ……」

そこは託児所だった。
保母らしき女性から渡され倫に抱きかかえられる女の子らしき赤ちゃん。
その倫の姿を見て蓮の頭の中は真っ白になった。
どういうコト……？
頭の中が混乱してる蓮。
蓮がしばらく考えていると、託児所から倫が出てきた。

「今日ね、ママ、杏のパパに会ったんだよぉ～」
嬉しそうに子供に話しかける倫。
倫は目の前に立っている蓮に全く気がつかない。
嬉しそうに話している倫の首もとから杏は何かを引っ張った。

「あっ」

その何かは、倫の首元からパーンと離れ蓮の足元に落ちた。
蓮は自分の足元に落ちた何かを見つめた。
それは、自分がクリスマスに倫にあげたピンクシェルでできたバラのクロスのネックレスだった。
しゃがみ込み蓮はネックレスを拾う。

「イヤだ。きちんと留めてなかったんだ」
倫もしゃがみ込みネックレスを拾おうと手を伸ばす。
倫は蓮を見て驚き立ち上がった。
「いつから……そこに？」
「はい、ネックレス」
蓮はゆっくり立ち上がり、倫にネックレスを手渡すと倫と杏の顔を見た。
「あ、ありがとう」
「もしかして、その子……？」
蓮の問いかけに、戸惑い首を振る倫。
「ち、違うよ。この子は、私がフランスで……」
言葉と一緒にこぼれ落ちる涙。
倫は慌てて涙を手で拭った。
そんな倫を見つめ蓮は切なそうに小さな声で「もう、いいよ……」と言う。
切なそうな蓮の顔。
「あっ、違うの。今の彼氏の……本当に……」
杏が自分の子だと知ったら蓮を苦しめると思い、倫は懸命にウソをつこうとする。
必死にウソをつく倫と自分の小さい頃に似た杏を蓮は優しい顔で見つめると、
杏も蓮を顔を見てニコニコと笑いかけた。

そんな杏のほっぺを蓮はそっと摘むと「もう、隠さなくても大丈夫だよ」と言った。

大丈夫だよ。

それがどう意味なのか分からない倫。

倫は少し考え、恐る恐る蓮に聞いてみた。

「もしかして、彼女と別れ……たの？」

首をふる蓮。

「はじめからいなかったみたいなんだ。子供……」

「えっ？」

はじめから……いなかった？

その言葉を聞き、今までココロにいい聞かせてきた強がりが、シャボン玉を割ったように倫のココロの中でパンッとはじけ散った。

蓮は倫の手の中からネックレスを取ると、倫の首につける。

「倫、いっぱい、いっぱい傷つけてごめん」

倫の溢れ出る涙を親指でそっと拭う蓮。

「……」

今、私の目の前には蓮くんがいる。

もうなんの諦めもいらない蓮くんが目の前にいる。

「いっぱい、いっぱい、辛い思いさせてごめん」

もう、会えないかもと思っていた倫が目の前にいる。

蓮は優しくそっと二人を抱きしめる。

「蓮……くん」

倫はもたれるように蓮の胸に顔をうずめ泣いた。

小刻みに揺れる倫の華奢な身体。

こんな細い身体でがんばろうとしていた倫を今まで以上愛しく想う。

「もう、大丈夫だよ。これからはずっとそばにいるから」

「……」

倫は蓮の顔を見上げた。

優しく微笑む蓮がいる。

「今までの分、ずっとそばにいるから……」

手放したくなかった倫が、今、自分の腕の中にいる。

ずっと、そばにいるから……。

ずっと……。

蓮くんと出会って、本当の恋を知った。

倫に出会って、本当に人を愛するというコトを知った。

辛くて苦しかったけどこれからは二人（三人）で歩いて行ける。

二人…出会えたから。

二人…出会えたから（後書き）

最後まで読んでくださった方ありがとうございました。
前回なかったストーリを入れ直しました。
よかったら感想など頂けると嬉しく思います。
（あまり厳しい評価はへこむけど。。。）

＊＊近々、続編を公開したいと思います＊＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0992b/

二人…出会えたから

2011年1月4日00時14分発行